

自治医科大学看護学部年報 (第8号)

Annual Report Jichi Medical University School of Nursing

自治医科大学大学院看護学研究科年報 (第4号)

Annual Report Jichi Medical University Graduate School of Nursing



2009

目 次

○ 巻頭言

看護学部長（兼）大学院看護学研究科長	水戸美津子	 5
--------------------	-------	---------

○ 特別報告

認定看護管理者に求められている役割とこれからの看護管理について
 —変革期を乗り切るための看護組織再構築に向けての発想転換の提案—

大柴 幸子	 9
-------	---------

急性重症患者看護専門看護師としての抱負	茂呂 悦子	13
---------------------	-------	---------

○ 活動報告

実習調整委員会	委員長	中島登美子	17
文献講読セミナー	科目責任者	永井 優子	18
研究構想発表会	大学院看護学研究科委員会	中村 美鈴	22

○ 看護学部委員会報告

人事委員会	委員長	水戸美津子	31
教務委員会	委員長	春山 早苗	32
学生委員会	委員長	竹田津文俊	34
F D評価実施委員会	委員長	三瓶眞貴子	36
広報委員会	委員長	中村 美鈴	37
編集委員会	委員長	竹田津文俊	39
予算委員会	委員長	水戸美津子	40
国家試験対策委員会	委員長	成田 伸	41
臨床実習指導研修委員会	委員長	本田 芳香	42
研究推進委員会	委員長	半澤 節子	43
実習調整委員会	委員長	中島登美子	44
入試実施委員会	委員長	渡邊 亮一	45

○ 大学院看護学研究科委員会等報告

研究科委員会	委員長	水戸美津子	49
研究科委員会幹事会	幹事長	三瓶眞貴子	51

○ 教育研究分野別報告

基礎科学関連	55
--------	---------

医学関連	57
基礎看護学	58
地域看護学	59
精神看護学	62
母性看護学	64
小児看護学	67
成人看護学	68
老年看護学	72

○ 大学院看護学研究科 教育の概要

共通科目	77
母子看護学領域「小児看護学」	78
母子看護学領域「母性看護学」	79
健康危機看護学領域「クリティカルケア看護学」	80
健康危機看護学領域「精神看護学」	84
がん看護学領域「がん看護学」	85
老年・地域看護管理学領域「老年看護管理学」	87
老年・地域看護管理学領域「地域看護管理学」	89

○ 研究業績録

基礎科学関連	93
医学関連	94
基礎看護学	95
地域看護学	96
精神看護学	99
母性看護学	100
小児看護学	102
成人看護学	103
老年看護学	105
がん看護学	106

○ 資 料

2009年度（平成21年度）看護学部年譜	109
自治医科大学看護学部の概況	110
看護学部教職員名簿	111
2009年度（平成21年度）大学院看護学研究科学年暦	112
大学院看護学研究科の概況	112

大学院看護学研究科教職員名簿	113
編集後記	114

巻 頭 言

看護学部長・大学院看護学研究科長
水戸美津子

看護学部が開設されて9年目となりました。4年を一周期と考えると3周期目に入ったことになります。学部運営の要である各種委員会活動は、これまでの活動を評価し改善を図り、委員長と副委員長がよく連携をとり、効率よく運営されるところが多くなってきております。これは、教職員のスタッフ全員の協力の賜物と感謝しております。

学部運営が効率的になってきたとはいえ、教員は、教育活動、研究活動、社会貢献等と多忙であることに変わりありません。さらに、ここ数年は看護学と看護職に関して、教育内容や制度の大転換期にあたり、それに伴い、教員一人ひとりの業務と責務は増加の一途をたどっております。このような中で、全教職員が教育活動の改善、研究の推進、学部運営の効率化等に取り組んでおります。

教育研究分野においては、平成20年度から新カリキュラムと旧カリキュラムを同時に運用するという煩雑さにも関わらず、それぞれの科目で学生による授業評価と教員の自己評価に基づき改善している努力の結果を、この年報に見ることができます。学部教員だけでなく、臨床教授等称号付与者の教育への参画も増えております。

研究活動は、年々活発になってきており、論文数は確実に増加しております。文部科学省科学研究費補助金の獲得に力を注ぎ、厚生労働省科学研究費補助金や各種財団の研究費補助事業にも積極的に申請し、補助金の獲得を図っております。また、本学部共同研究費補助金事業による附属病院との共同研究も定着し、毎年度10件程度が実施されております。教員一人ひとりが専門分野の研究課題に取り組むことを要求されており、研究の結果から得られた知見を臨床現場につなげ、さらには研究活動を通して把握した知見等を学生に教授していることの成果をこの年報に見ることができます。

年報は、本学部の1年間の教育研究活動、学部運営等の成果を記載したものであり、また、学部教育全体の自己点検・自己評価に繋がるものでもあります。年報を通じて、本学部をより一層ご理解いただき、厳しいご批判と温かいご指導をいただければ幸いと存じます。

特別報告

認定看護管理者に求められている役割とこれからの看護管理について —変革期を乗り切るための看護組織再構築に向けての発想転換の提案—

自治医科大学附属病院 医療情報部 看護師長 大柴 幸子

2010年7月、私は認定看護管理者審査に合格し認定看護管理者に認定された。本稿では認定のご報告とともに、認定看護管理者制度の概要について、また認定看護管理者制度の目的と定義、審査内容から考える認定看護管理者に求められている役割と、変革期にある医療提供体制下で看護が置かれている難局を乗り切るための看護組織の再構築に向けて、発想転換を求められている看護管理の認定看護管理者として、これからの看護管理について考えていることをご報告させていただく。

ご存じのように認定看護管理者制度は、1994年「専門看護師認定制度」、1995年「認定看護師制度」について1998年に発足した日本看護協会の資格認定制度である。『日本看護協会認定看護管理者制度は、多様なヘルスケアニーズを持つ個人、家族及び地域住民に対して、質の高い組織的看護サービスを提供することをめざし、一定の基準にもとづいた看護管理者を育成する体制を整え、看護管理者の資質と看護の水準の維持及び向上に寄与することにより、保健医療福祉に貢献することを目的とする』（日本看護協会認定看護管理者規則第1章第1条）制度である。そして『認定看護管理者とは、本会認定看護管理者認定審査に合格し、管理者として優れた資質を持ち、創造的に組織を発展させることができる能力を有すると認められた者をいう』（日本看護協会認定看護管理者規則第1章第3条）と定義されている。2010年の新規認定者は266名で、全国総数は951名になり、栃木県は今年度合格者を含めて14名である。

認定審査の経緯を述べると、2009年3月に自治医科大学大学院看護学研究科を修了し、認定看護管理者認定審査の受験資格の6つの要件のうち『師長以上の職位での管理経験が3年以上ある者で、看護系大学院において看護管理を専攻し修士号を取得している者』（日本看護協会認定看護管理者規則第6章第2節第21条）という要件を満たすことができ認定審査の受験資格を得た。

2010年3月の書類審査では、それまでの職歴はもとより研修受講実績、学歴と成績、研究実績や業務実績が評価される。また施設長か所属長の推

薦状も求められる。書類審査の後5月の認定試験（筆記試験、論述試験）は看護管理に関わる広範な分野から出題される。看護管理論をはじめとして組織論、マネジメント論、経営経済論、制度政策論等々、診療報酬制度に関するもの、労働基準法等の法律関係、またこういう場合は管理者としてどう考え決断するかと言った事例問題が複数題出題される。

論述試験では2つのタイトルが提示されどちらか1つを選択し、自身の考えていることを簡潔明瞭に展望も含めて述べる。テーマはいずれも現在最も注目されているテーマである。限られた時間の中での論述であり、いかに論理的に展開できるか日頃の訓練と積み重ねが試される。そういった審査ののち7月に結果発表となる。

認定審査と制度の目的、定義から認定看護管理者に求められている役割を考えてみると、「創造的に組織を発展させることができる能力」を活かし、「質の高い組織的看護サービスを提供すること」「看護管理者の資質と看護の水準の維持及び向上に寄与する」と言える。

認定看護管理者制度はその言葉通り看護管理者としての資格認定である。制度制定以前から各施設では看護管理者の選定基準が設けられて選定が行われていると思うが、全国共通の評価基準により、看護管理者として、より客観的な評価を得ることができるこの制度の社会的意義は大きいと考える。客観的評価を得たことによって、周囲からの評価が看護管理者の役割意識の向上につながり、さらに充実した活動へとつながり、その社会的意義を高めるという良い循環を生み出すと考える。

またどんな資格でも同じであると思うが認定看護管理者も当然ながら更新制であるので認定されたからといってのんびりしている訳にはいかない。研究や業務実績等組織や看護への貢献が要求され、「組織的看護サービス」「看護の質」「管理者の資質向上」という役割と責任を果たすことが要求されている。認定看護管理者の活動状況調査からも明らかなように、制度制定から10年が経過し認定

看護管理者は様々な場で活躍している。私も認定看護管理者として認定されたことに恥じないように、成果の見える活動を行い組織と看護に貢献したいと考えている。

先日開催された第14回日本看護管理学会でもシンポジウム等で、変革期にある医療提供体制下でこの難局を乗り切るためには看護組織の再構築が必要であり、再構築を行うには看護管理者の看護管理に関する発想の転換が求められていると問題提起されていた。

看護管理の発想転換を求められている認定看護管理者として自身の役割を含め、これからの看護管理について考えていることは大きくは以下の3点である。

1. 効果的な看護ケア提供のための組織体制づくりへの問題提起とアイデア提供

少子高齢化、医療費高騰による社会経済の圧迫という情勢の中で、医療機能の分化が推進され、急性期病院ではさらに在院日数が短縮化される傾向にあり、チーム医療によるケア提供活動の推進、先進医療への取組等々刻々と医療情勢は変化している。その変化する医療情勢に組織の体制が対応しないまま、看護師の意識を含めて従来の組織体制のままで対応していることのゆがみが、医師や看護師のやりがい感の喪失や疲弊につながっているのではないかと考えている。

認定看護管理者の役割の「創造的に組織を発展させること」ということにも示されているように、これまでの体制や考え方に固執することなく組織のあり方を考える発想の転換が求められている。組織のもつ限られた人材資源を効果的に効率的に活用してよりよいケア提供を行うためには、どういった体制づくりが必要なのかを組織全体で考える必要がある。今後の動向を予測し、いかに様々な角度から考えられるかが問われているし、いかに受動的ではなく能動的に考え動くことができるかが問われていると思っている。

『問題はつかむものではなくつくるものであると言われている。問題意識をもってこそ何かがつくり出せる。問題意識をもつということは、解決すべき課題を明確化し、挑戦すべき課題を自主的にとらえることを意味する』¹⁾と述べられている。本稿では組織体制の詳細については言及しないが、認定看護管理者として社会背景をふまえた問題意識を常に持ち、今直面する課題は何か、行うべき

意思決定は何かを考えて、よりよいケア提供ができる組織体制になるように、少しでもよりよい方向に発展できるように問題提起とアイデアの提案を行っていきたいと考えている。

2. エビデンス指標を提示した論理的な見える看護管理

看護管理というまでもなく看護を管理することである。つまり自分が在籍する組織や部署が求められている看護とは何で、どういった成果を出さなければいけないのかを常に意識しつつ、実際にはどういった看護が提供され、どういった成果が出ているのか、または出ていないのかを把握し評価することが管理者としての大きな役割である。もちろん評価するだけでなく次の看護提供に活かしていかなければ意味がない。

現状では看護の臨床指標や成果指標、ベンチマークは明確にはなっていないし、行政も各施設も試行錯誤といった段階であるように思う。しかし看護記録も電子化されている時代であり、実施した看護を記録することは当たり前のこととなり、貴重な看護のデータが日々蓄積されていることは周知のことになっている。

そのような中で診療報酬上でも早晚看護の成果が問われることになってくると考えているし、そういった動きも始まっている。他施設との比較や明確な指標がないからといって何もしないのではなく、所属の部署では現在どういったケア提供が必要とされているか？現実の状況はどうなっているのか？実践したことの効果や成果はどうか？そこから見えてくる問題は何か？等をエビデンスとなる指標とともに示していくことが求められている。

また見える看護管理として重要なことに「目標管理」がある。『看護師を最も特徴づけるのは集団形成である』²⁾と言われ、看護師は集団としては自律しているが、その集団を形成している個々の看護師の自律性は低いとも言われている。自律性が低い上に、個々の看護師が全く別の方向を向いてしまっているのは効果的な看護機能を発揮できるはずがない。

「質の高い組織的看護サービスを提供する」ということには、自律した看護師がいかに同じ方向を向いて看護を行っていきけるかに懸かっていると思っている。各個人が、また各部署が、つまりはその組織全体が同じ方向を向いて、看護師が協働



【図1 「見える化」の5つのカテゴリー】

していくために、組織として解決すべき課題と目標は何かを共有していくことが必須となる。看護マネジメント論では、『考え方を共有していくためには個人の意見を表明する機会と意見をもみ合う機会が必要であり、目標管理には問題を掘り下げる力と異なる考え方を統合する対話力が必要である』³⁾と述べ、P.Fドラッカー氏もマネジメントの技能として「動機づけとコミュニケーションを図る」ことの重要性を述べている。

さらに目標共有、目標に対しての納得や理解を得るために必要なのはコミュニケーションだけではなく、どれだけのエビデンスが示せるかということが重要となる。エビデンスを示すためのキーワードは徹底した「見える化」であると考えている。「見える化」とは「あいまいさや問題点を外側から見える形にして客観的に把握する取り組みを指す言葉」⁴⁾とある。図1は遠藤氏の見える化の5つのカテゴリーを示した図4)である。この図にあるように、看護に関して上層部だけではなく、組織を構成する全員に「経営」「状況」「問題」「知恵」「顧客」の見える化を行っていく必要がある。

3. 人材の開発・育成のための教育体制づくり

刻々と変化する激流のような医療情勢の中で、看護師が激流に流されることなく、古くて新しいテーマである「チーム医療」の中で看護をしっかりと根づかせていくために大切なことは、「看護とは」、「看護師の仕事とは」何かということを見守る。看護師自身が認識していることである。その「看護とは」、「看護師の仕事とは」という原理原則をふ

まえた上で、看護師の自律性—つまり他職種の判断に依存しないで、自身で判断し実践できることを高めていくことが必要と考える。

現在、組織での看護師の存在意義は診療報酬上の評価によって認められているが、自律性の低い現状維持のままでは患者からもその存在意義を認められず、チーム医療の推進や医師不足という中で看護師という職業自体が機能分化されてしまい、存続が難しくなってしまうのではないかと危機感も持っている。

臨床で、チーム医療の中でさらに看護師の存在意義を高めていくため、「看護の水準の維持及び向上に寄与する」ため、また様々な問題解決をするための知恵と創意工夫ができるためには、看護組織にとって最も重要な資源である人材の育成・開発ということがこれまで以上に重要になってくる。いかに多くの人材を持っているかが組織の価値を高めることにつながる。組織体制づくりとも関連してくるが、部署ごとの人材育成ではなく、組織として必要な人材を開発育成していくことが求められる。

人材の開発育成、自律性を高めるための基本は教育である。現在多くの施設でキャリア支援や生涯教育の考え方のもと各施設オリジナルの教育体制を取り、人材開発・育成だけでなく、看護師の所得の改善にも力を入れている。そのためには、看護師の知識や技術の向上が必須事項である。単なる技術と知識の習得ではない、組織体制だけではなく、臨床での組織的教育という意味で看護師の教育体制そのものも発想の転換が求められている。

認定看護管理者として今後の発想転換した教育体制づくりにもアイデアを提供し、人材育成にも関わっていききたい。私自身の自己研鑽が必要であることは言うまでもないが、私の知識やスキルを多くの人に活用してもらうことでさらに知識やスキルの向上につながり、認定看護管理者として成長していくことにつながると考えている。認定看護管理者自身、各スタッフ、そして組織それぞれにとって利益を得ることができる、そんなサイクルをつくっていけると良いと思っている。

認定看護管理者の認定の更新は認定証取得後5年ごとになっている。更新の要件としては、

(1) 看護管理実務時間が2,000時間以上に達してい

ること。

- (2) 制度委員会が認めた研修会、学会への参加や発表または雑誌発表など自己研鑽の実績が規定の内容で50点以上に達していること。

- (3) 積極的に社会活動していること。

である。さらに『医療環境の大きな変化のなかで認定看護管理者の能力が必要とされており、「看護の質向上，病院経営への参画，人材育成や組織改革」など，その活動が期待される』（日本看護協会認定看護管理者細則第6章）とある。認定看護管理者認定制度がもつ社会的意義は「資格」という意味で大きいと思うが，さらにその存在価値を高めていくのは，認定看護管理者の活動とその成果にかかっている。肝に銘じて活動していきたい。

最後に紙面をお借りして，このような報告をさせていただく機会を与えてくださった関係者の方々，またこれまでご指導いただいた方々，大学院で研究指導をいただいた水戸美津子先生に感謝申し上げます。

【引用文献】

- 1) 井部俊子監修「看護管理概説」日本看護協会出版会；第6章p.139, 2007
- 2) 井部俊子監修「看護における人的資源活用論」日本看護協会出版会；第1章, 2007
- 3) 井部俊子監修「看護マネジメント論」日本看護協会出版会；第1章p17, 2007
- 4) 遠藤功, 「見える化」東洋経済新聞社；2007

急性重症患者看護専門看護師としての抱負

自治医科大学附属病院 集中治療部 主任看護師 茂呂 悦子

私は2009年3月に自治医科大学大学院看護学研究科修士課程を修了し、同年12月に急性重症患者看護専門看護師の認定を受けました。

現在は、これまでと同様に集中治療部の主任看護師として勤務しています。また、2003年に集中ケア認定看護師の認定を受けて以降、実施してきた活動を専門看護師の役割・機能を取り入れながら継続しています。

本来、今年度から専門看護師として、横断的・組織的な活動に専念するのが望ましいのかもしれませんが、大学病院という大きな組織の中で、専門看護師の役割・機能を果たしていくには、覚悟と具体的な活動のイメージをもつ必要があると考えます。

今年度は、そのための準備期間として捉え、他施設ですでに活躍されている専門看護師の方々と学会等から情報を収集し、今後の活動について考えています。

ここでは、今考えている活動の中で新たに取り組みたい2つの抱負について述べたいと思います。

1. せん妄ケアのシステムづくり

せん妄への適切なケアは、患者・家族、臨床現場においてニーズが高く、チーム医療が重要な課題だと考えます。

そのため、実践での役割モデルやせん妄ケアに関する勉強会・事例検討会などの教育・指導だけでなく、せん妄の評価、予防や発症時のケア、治療的介入、多職種との連携、人員の調整などを含めたケアシステムをつくって行っていきたいと考えています。

2. 急性期看護の教育プログラムづくり

根拠や理論を踏まえた看護実践や、安楽な体位早期離床、深部静脈血栓予防など急性期看護の重要な課題を解決するために必要な医療機器・器材の整備と正しい活用の徹底は、患者の安全を守り、回復を促進するうえで重要です。

しかし、日常的な看護実践場面を振り返ると、最新の知見や医療機器・器材に関する情報が臨床に正しく理解され取り入れられるまでには時間が

掛かる状況にあると感じています。

そのため、急性期看護に必要な知識や技術を系統的に教育できるプログラムを作成・導入したいと考えています。さらに、患者・家族、組織に効率的で有益となるような医療機器・器材の導入・整備にも関与していきたいと考えます。

いづれも実現するまでには、時間を要し、多くの困難に直面すると考えます。また、これら2つ以外にも実践・調整・倫理調整・コンサルテーションなど専門看護師として横断的な活動を本格的に開始すると種々の取り組むべき課題が見えてくると推察されます。

そして、どのような活動においても組織や職種を問わず周囲の人々の理解と協力が必要不可欠であり、看護に関する知識・技術だけでなくコミュニケーションや状況分析の能力、忍耐と信念など、自分自身の内面も含めて研鑽していく必要性を感じています。

また、今後、専門看護師として活動を展開するうえでは、その成果を示していくことが重要であると考えます。さらに、専門看護師への興味・関心を高めて、目指す人が増えていくよう取り組むことも役割・責任であると考えます。

これらの点については、今後、同じ施設で活動する専門看護師が、増えてくると期待されますので、協力して取り組み、臨床看護の向上に努めていきたいと考えています。

活動報告

実習調整委員会

委員長 中島登美子

1. 活動報告

今年度の活動で特記すべきこととして、1) 実習教育説明会を実施したこと、および2) 電子カルテ参照に伴う個人情報保護の講義を実施したことがある。

1) 実習教育説明会

現行カリキュラムの進行に伴い、実習施設の皆様に本学部の実習教育内容をご理解いただくことと意見交換を行うため、4月下旬に開催した。参加者は約87名であり、主たる実習施設である附属病院と学外施設からの参加を得て、実習についての説明と意見交換を行った（表1参照）。

次年度の開催については、4回目を迎え新カリキュラムの実習科目が主となることから、開催時期や実施目的、実施方法等の見直しを含め検討を行うこととした。

2) 個人情報保護の講義

これまで、看護学生は教員に電子カルテを開いてもらい閲覧していたが、電子カルテ参照に伴う責任を学生に課すことも必要であるため、個々の学生にID,パスワードの申請を可能とした。申請にあたっては、個人情報保護の講義を受け誓約のもとにID,パスワードを申請することとなっているため、医療情報部長による電子カルテ参照に伴う個人情報保護の講義を受け、ID,パスワードの交付を受けた。

今後、個人情報保護の講義は、附属病院における実習開始直前の学年のみ受講予定である。

表1. 実習教育説明会概要

内 容	担 当 者	概 要
本学部の教育目標	学部長	ご挨拶と臨床教授制等について説明
本学部の教育目標	教務委員長	現行カリキュラムと指定規則の変更に伴う新カリキュラムの相違について、およびカリキュラムの構成と実習の位置づけ等について説明
大学における実習教育の考え方	実習調整委員長	新カリキュラム移行の背景にある看護実践能力育成への課題、カリキュラムにおける実習の考え方、本学の実習の考え方、教育側が担うことと臨床側が担うこと、看護基礎教育における技術教育のあり方、臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術の水準等について説明
最近の学生の気質と実習指導について	臨床実習指導研修委員長	社会の変化と大学に入学するまでの基礎教育の変化、大学生の学生状況、いまどきの大学生（看護学生）とは、看護実践能力育成における臨床実習の意義、実習指導で大切にしたいこと等について説明
平成21年度実習スケジュールについて	実習調整副委員長	平成21年度実習計画について説明
質疑応答	実習調整委員会	カルテ閲覧以上にベッドサイドに足を運ぶことを重視する指導の要望、入院患者への倫理的配慮に伴う看護倫理等の内容や進度について

平成21年度「文献講読セミナー」の報告

科目責任者 永井 優子

「文献講読セミナー」は、2年次前学期に開講される、2単位30時間の必修科目である。平成20年度から開始した現行カリキュラムにおいて、1年次の「基礎セミナー」を引き継ぎ、3年次の「研究セミナー」へとつなぐ科目として位置づけられている。

看護にかかわる情報収集の基本的な方法を習得することを目的とし、2つの目標が設定されている。すなわち、看護に関する学生の興味や関心を明らかにするために、文献・情報を収集すること、および、図書館の効果的活用と文献検索ができることである。

平成21年度は、科目責任者のほか、講師9名（宇城令、工藤奈織美、崎田マユミ、櫻井美奈、角川志穂、野崎章子、松本幸枝、矢野美紀、敬称略）の計10名が担当し、渡邊教授の協力を得て実施した。また、実施初年度の科目であることから、担当教員の他に希望する者29名に、授業資料等を配付し、教員間で内容を共有できるようにした。また、図書館運営委員の協力を得て、図書館における文献検索方法に関する演習（以後図書館演習という）を準備した。

授業は全15回であり、初回から7回の講義終了後に試験を行い、図書館演習を同日連続で2回、グループ別演習を4回、最終回をレポート提出と設定した。第3回授業時間の半分は、初回のグループ別演習を行った。教科書は、山崎茂明、六本木淑恵著の「看護研究のための文献検索ガイド第4版」（日本看護協会出版会、2005）を使用し、講義内容に応じて、その都度必要なものを紹介した。（表1参照）

授業の履修学生は、2年次の学生101名であった。グループ別演習は、12人を2グループ、11人を7グループとして全9グループで、各グループに担当する講師1名が担当した。使用した教室は、大教室Ⅰ・Ⅱ、中教室Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ、精神看護学演習室である。また、図書館演習は、21人を1グループ、20人を4グループとして全5グループで、5日程を確保した。

なお、初回授業では、学習効果を高めるために、

心がけることを三つ提示した。第一に、文献に興味を持つことの重要性を示した。本学図書館をブラウジングして、どこにどのような文献があるのか把握し、図書や雑誌を手にとって眺めてみることを勧めた。また、興味のある文献を読んでみて、自分が面白いと感じた文献があれば、他の人に勧めて、感想を聞くように教示した。さらに、本学図書館は医学図書館であることから、公共図書館との相違を考えてみるように教示した。

第二に、自分自身の知りたいこと、明らかにしたいことについて考えてみることの重要性を示した。自分の興味や関心があることを中心に、どんなことを知りたいのか、明らかにしたいのか、関係することも含めて考えることを教示した。さらに自分の興味や関心があることについて、関心や興味を寄せる人がいないか探し、話し合ってみること、および他の人の興味や関心のあることについて説明してもらい、自分の興味や関心との接点を探してみることを勧めた。

第三に、自分の考えを事実に基づいて理解しようと努力することの重要性を示した。具体的には、自分が得た情報のもとを考えてみることに留意すること、客観的な情報と主観的な情報があることに留意すること、自分の考えと他の人の考えを分けて考えること、自分の考えたことに責任を持つことである。

第2回授業では、現在の関心を持っているテーマの提出を求めたところ、99名が提出した。その内容は、主に次の6つのテーマに集約することができた。

① 社会・文化・役割などに関すること

日本および世界の文化、国際貢献、ボランティア、看護職、環境問題、経済、社会制度・社会現象など

② 日常生活と健康

食事、運動、ダイエット、排泄、睡眠時間など

③ からだのしくみとはたらき

人種による身体特徴の差異、スポーツと筋肉、遺伝、利き手など

④ ひとの気持ちや精神のはたらき

コミュニケーション、性格、色彩や音楽の影響、など

⑤ 食品、料理、栄養などに関すること

ダイエットに有効な食事・食品、がん予防食、豆乳の効果、など

⑥ 病気や症状とその治療法や対策

糖尿病、妊娠中絶、アレルギーなどの疾患とその治療方法、月経痛、便秘、頭痛などの学生が経験している症状の緩和方法など

グループ別演習では、各学生が設定したテーマについて調べた文献をあらかじめ提出し、学生一人あたりプレゼンテーション15分間と討議15分間の計30分間を行った。発表内容は、各学生が明らかにしたかったこと、文献の検索方法と文献の解釈の結果であった。最終的に学生が決定したテーマは、当初の関心を発展させたものであった。一般的な関心が減少し、人間の生活と健康との関連や病気や症状の原因と対応方法に焦点を当て、具体的な疑問の形態に発展したものが増えていた。

評価方法は、授業時間内の筆記試験を50%、グループ別演習の参加態度、プレゼンテーションを40%、最終レポートを10%として、60%以上の評価を得たものを合格とした。

学生による授業評価は、他の授業と同様に行った。すなわち、最終回のグループ別演習で担当教員が授業評価票を配付し、回収箱に提出するように指示し、その結果の報告を受けた。回収数は20で、回収率は19.8%と5人に一人が提出したに過ぎなかった。試験期間が迫っていたことから、学生に回答する余裕がなかった可能性が考えられた。学生の評価はどの項目もおおむね好評であった。（表2参照）提出者の3割にあたる6名が自由記載欄に記入していた。論証や発表方法について学べたこと、授業時間内で試験を設定したことについて、肯定的に評価されていた。一方、学生によってグループ別演習における発表日と図書館演習日程がかみ合っていなかったことについて、改善を求める意見があった。図書館演習の日程とグループ別演習の日程については、科目責任者が公表されてから調整する日程に限られ、科目責任者として直接交渉もできなかったことから、検討する余地が大変少なかった。担当教員は、与えられた日程の中で、学生の状況に合わせて十分に個別指導を行ったが、学生にとっては厳しい日程であったと考

えられる。

ほとんどの担当教員は前学期に看護学実習を担当し、実習指導を終えて、グループ別演習に駆けつけなければならない。さらに本年度は、担当教員のうち一名が傷病休暇を取ったため、科目責任者が当該担当教員に代わってグループ別演習を行った。このため、各担当教員に対して科目責任者として当初表明していた配慮が十分にできなかった。そのような状況でも、教員は、特に担当学生との個別指導や資料等のやり取りについて工夫をして対応し、授業全体を円滑に進めることができた。

図書館演習については、図書館司書による一斉講義1回（記念棟コンピューター教室）とし、図書館の利用を含めたグループワークの時間を1回確保することが望ましいと考える。また、学生の関心は多岐にわたっているが、本学図書館は医学図書館であるため、一般大学の図書館では利用できることが多い「ネットで百科」等のWeb対応の百科事典資料等は利用できない。これらの拡充等を含めて、科目責任者が直接図書館と協議できる体制を作る必要がある。

また、学生の関心を疑問の形として具体的に絞り込む過程では、個別に文献を使って調べることとグループ別演習の進行がリンクするように授業回数を設定することも必要である。担当教員全員が集まり、開始直後、グループ別演習開始前、授業終了後の各3回、授業の進行について検討し、共有できるようにした。このような授業形態でより良い授業を提供するには、担当教員が密に連絡調整することが必須である。グループ別演習時には毎回アフターミーティングを設定することが望ましいが、担当教員の業務を考慮すると、この3回の設定を確保することが必要だと考える。完成年度までの期間は、授業内容は概ね現状を維持することが望ましいが、図書館の看護分類の変更等の状況にも合わせて、検討する必要があると考える。

グループ別演習では、少なくとも修士号を取得しており、2年以上本学での教育経験を持つ教員が指導を担当することが必要と考える。教員一人当たりの担当学生数は、集団力動を考慮すれば8名までとすることが望ましく、105名を定員とする場合、最低14名の教員が必要になる。さらに、今年度同様に、グループ別演習の担当教員の事故

等を考慮すると、科目責任者は全体調整を主とする必要があり、担当教員数は合計15名が必要となるだろう。「看護基礎セミナー」と時間割上、並行配置をする科目として実施されることから、配置教員数については、併せて検討する必要がある

だろう。

完成年度に向けて、現行カリキュラムの総合科目全体で「学士力（看護学）」をどのように涵養するのか、教員組織として検討する必要があると考える。

表1 文献講読セミナーの授業日程・内容・担当者

回	月 日 (曜日)	学習課題	学習内容	担当教員
1	4月8日 (水)	看護と文献	コースオリエンテーション、文献の定義と役割について理解する。	永井 優子
2	4月15日 (水)	情報から文献へ	情報の発生と流通のプロセスについて理解する。	永井 優子
3	4月22日 (水)	一次資料と二次資料	資料の種類と構造について理解する。	永井 優子
4	5月13日 (水)	参考文献とは	辞典、事典、法令・通達、社会状態や行政の取りくみ、統計データ、検査方法データ、薬品等の調べ方について理解する。	永井 優子
5	5月20日 (水)	看護の文献とは	我が国および世界の看護文献の現在の状況について理解する。	永井 優子
6	5月27日 (水)	看護の情報源の構成	単行書、学術雑誌、学術論文の構成について理解する。	永井 優子
7	6月3日 (水)	インターネットの情報資源	インターネットの信頼性、役に立つWeb サイト、電子ジャーナルについて理解する。	渡邊 亮一
8	6月10日 (水)	試験	基礎的知識の確認のための筆記試験（教科書等の持ち込み不可）	永井 優子 渡邊 亮一
9	6月16日 (火)	図書館の効果的活用と文献 検索の実際	文献検索の方法について、本学図書館で体験的に理解する。5回の日程のうち、指定された1回（Ⅲ・Ⅳ限連続）を受講する。	図書館職員
	6月23日 (火)			
	6月30日 (火)			
10	7月7日 (火)			
	7月14日 (火)			
11	6月24日 (水)	グループ別学習	指定されたグループにおいて、学生が設定したテーマについて、調べた文献を提出し、学生一人30分程度を持ち時間として、検索方法や解釈について討議する。使用する文献の複写・資料等は発表する前週火曜日17時までに各担当教員に提出する。（大教室Ⅱ、中教室Ⅰ～Ⅵ、精神看護学演習室、研究室15）	永井 優子 宇城 令 工藤奈織美 崎田マユミ 櫻井 美奈 角川 志穂 野崎 章子 樋貝 繁香 松本 幸枝 矢野 美紀
12	7月8日 (水)			
13	7月15日 (水)			
14	7月22日 (水)			
15	7月27日 (月)	17:00 課題レポート提出		

時間は原則として5時限（16：20～17：50）

表2 学生による授業評価 (N=20)

評価項目	とても あてはまる	あてはまる	やや あてはまる	あてはま らない	無回答
シラバスと整合性があった	11	8	1	0	0
授業内容が理解できた	10	6	4	0	0
授業方法が良かった	9	6	4	1	0
構成・内容・流れ・順番が良かった	9	5	4	2	0
科目の課題は適切であった	9	8	3	0	0
指定の教科書・参考書は適切であった	6	11	2	1	0
全体として良かった	10	8	2	0	0

第1回研究構想発表会を開催して

大学院 看護学研究科 中村 美鈴

自治医科大学大学院看護学研究科は、地域と保健医療福祉の向上に寄与するために看護学の高度な専門知識・技術を有し、看護管理と実践的教育、研究を通じて地域のケアニーズに即した看護活動を改革できる高度専門職業人としての上級看護職者を育成するために、平成18年度4月に設置され、約3年が経過した。従来は、大学院生は、各自の研究計画書を主として指導教授のもとで指導を受け、作成していた。しかし、指導教授のみならず、他の大学院教員や大学院生の発想も取り入れ、より多角的な視野から研究課題を絞り込み、研究計画書を作成する過程は必要であるという視点から、平成21年度の看護学研究科の事業に新たに、研究構想発表会の企画が加わった。

このような背景から、研究構想発表会は発足した。第1回目の研究構想発表会は2009年11月20日（金）に開催した。発表会のねらいは、「研究構想の発表と質疑応答を通して、大学院生自身が今後の課題を明らかにする」という身近な内容とした。研究構想発表会では、大学院生が研究構想の段階で各自の研究内容について発表を行い、他の大学院生や指導教員以外の教員との意見交換のもとに、研究構想や研究計画書を洗練する場という位置づけで実施した。研究構想会企画の担当者は、研究科委員中村美鈴（責任者）、研究科委員成田伸、幹事会委員井上映子、幹事会委員齋藤良子、看護学務課河原節子の5名であった。

発表対象者は、原則として、次年度に修士論文（特別研究ならびに課題研究）の提出を予定している者とした。今回の発表者は12名であり、研究課題名については、表1に示すとおりであった。参加者は、研究科長、幹事長、当該大学院生、大学院教員、看護学部教員で関心のある者、事務担当職員、他、研究指導において指導教授が必要と判断した修士論文関係者、合計55名であった。

発表会の具体的な進行は、開会の言葉、研究科長挨拶、幹事長から特別研究と課題研究の位置づけと評価基準について説明があった。その後、発表大学院生は、順に、配布資料、もしくはパワーポイントを用いてプレゼンテーションを行った。

発表する大学院生は、発表時間7分の中で、各自の研究構想を他者が聞いてわかるようにコンパクトにまとめて、プレゼンテーションを行った。その後、発表の大学院生ごとに、質疑応答8分、計15分の展開で12名の発表は、概ね予定通り進化した。質疑応答は、大学院生自身が研究構想に取り組む中、現時点で行き詰っている点・疑問点、および参加者からの質問についてなされた。

今回の研究構想発表会の特徴として、指導教員が座長を行った。その役割は、発表する大学院生が研究構想を十分伝えられるよう、必要時はサポートすることであった。また、質疑応答が大学院生自身の達成感や成長につながるものとなるよう調整を行う役割を担った。さらに、指導教員以外の教員は、発表会のねらいを踏まえ、発表者に対し教育的配慮に基づいた質疑応答となるよう努め、参加者全員がスムーズ、かつ活発な質疑応答に加われる配慮をした。初めての取り組みではあったが、活発な質疑応答がなされ、有意義で画期的な発表会となった。

発表会終了後は、今回の企画・運営について評価を行うために、発表者ならびに参加者全員にアンケート調査を実施した。アンケート用紙の回答に関する評定形式は、感度をより良くするために、7:とてもそう思う、6:まあまあそう思う、5:少し思う、4:どちらとも言えない、3:あまり思わない、2:ほとんど思わない、1:全く思わないの7段階で行った。アンケートの質問概要は、今回の研究構想発表会は今後に向けて示唆を得ることができたか否か、発表時期、発表時間、質疑応答の時間・内容の適切性等の7点についてであった。アンケートの回収率は、64.2%（34名）であった。結果は、表2と図1に示す通りである。

大学院生からの自由記述の内容からは、「研究の目的や意義の絞り込みについて示唆を得られた」、「研究方法について示唆を得られた」、「自分の戸惑っている点に対して適確に指摘を頂けた」、「他の人の研究や課題がわかったので勉強になった」など、概ね、肯定的な記載であった。他、開始時刻の検討や発表会が全体的に長時間に渡るた

め2回に分ける、あるいは2部構成に分けて同時進行がよいなどの意見があった。

今回の研究構想発表会は、アンケートの結果からも、質疑応答というやり取りを通して、大学院生は、今後の課題や多くの示唆を得ることができたと言える。

これらの成果より、研究構想発表会の企画のねらいには、達成できたと考えられる。すなわち、今回の発表会において、大学院生自身は、多角的な視点から意見や示唆を得ることができ、研究を推進する上での自己の課題の明確化、ならびに研究課題の設定、研究計画書の洗練について、熟考する態度の必要性和研究者としての姿勢も合わせて修得できと言える。また、大学院生のみならず、参加者において、研究構想を把握する場となったと思われる。

一方、今回の発表会では、CNSを目指す者に必須とされる課題研究と修士論文の作成を目指す者に必須である特別研究の研究構想について、それぞれの学習進度や研究の進捗状況から、発表時期については、検討が必要と思われた。さらに、より学術的な観点からみると、授業等で既習した研究の理論的基盤の取り組み、質的研究のサブストラクション、量的研究のサブストラクションなども踏まえて、発表がなされると、より洗練された研究構想になったであろうと考える。

今後は、大学院生が主体となって、このような発表会を催すことに期待したい。

第1回研究構想発表会 プログラム（表1）

1. 16:30 開会のことば
2. 16:30～16:35 看護学研究科長挨拶 水戸 美津子教授
研究科幹事長 挨拶 三瓶 眞貴子教授
3. 16:35 院生の研究構想に関する発表（一人15分目安：発表7分，質疑応答8分）

	時 間	科目群	発表者	研究課題
1	16:35-16:50	母性看護学	高木友子	妻が精神疾患をもつ夫にとっての妊娠・出産・育児の体験
2	16:50-17:05	母性看護学	高橋斉子	低出生体重児の母親が搾乳を継続する要因
3	17:05-17:20	精神看護学	谷田部佳代弥	精神科看護師の退院困難度の変容に関する検討
4	17:20-17:35	クリティカルケア 看護学	橋本幹子	2型糖尿病をもつ長距離運転者が認知するPoor Control を促進する状況
5	17:35-17:50	クリティカルケア 看護学	細萱順一	（仮）開胸手術後に持続する疼痛を体験している患者の言 語的表現
6	17:50-18:05	クリティカルケア 看護学	樫山定美	（仮）救急医療の場における患者家族の 代理意思決定に対する看護師の認識と看護実践
	18:05-18:15	休憩		
7	18:15-18:30	がん看護学	小松崎香	再発乳がん患者のパートナーシップを高める要因
8	18:30-18:45	がん看護学	下河朋子	泌尿器がん術後リンパ浮腫が男性患者にもたらす生活障害
9	18:45-19:00	がん看護学	出口雅貴	術後イレウスにより入退院を繰り返すがん患者の困難
10	19:00-19:15	がん看護学	石島久子	病名告知を受けて手術療法を受ける肺がん患者の家族の
11	19:15-19:30	がん看護学	山本真由美	（仮）急性骨髄性白血病患者在が告知を受け初回治療を受け る間の心理的・社会的変化
12	19:30-19:45	老年看護管理学	高山詩穂	（仮）FMEAを用いた高齢者の口腔・鼻腔吸引業務プロセ スに伴う潜在的リスク要因の検討
13	19:45-20:00	地域看護管理学	青木さざ里	離島での保健活動において保健師の私生活が果たしている 役割

4. 20:00 閉会のことば

研究構想発表会アンケート結果 2009. 12.

表2

参加者数	院生	教員	関係者	小計
合計	20	32	1	53(名)

回収率	院生	教員	小計
合計	65.0% (13/20)	60.6% (21/32)	64.2% (34/53)

1. 今後の課題を得るのに役立ちましたか。

	全体 (6.26±0.86)	発表院生	教員その他
4: どちらとも言えない	2	0	2
5: 少し思う	3	0	3
6: まあまあ思う	13	5	8
7: とてもそう思う	16	8	8
合計	34	13	21

2. 示唆を得ることができましたか。

	発表院生 (6.69±0.63)
5: 少し思う	1
6: まあまあ思う	2
7: とてもそう思う	10
合計	13

3. 発表時期は適切でしたか。

	全体 (5.21±1.47)	発表院生	教員その他
2: ほとんど思わない	1	0	1
3: あまり思わない	5	2	3
4: どちらとも言えない	5	2	3
5: 少し思う	5	3	2
6: まあまあ思う	11	4	7
7: とてもそう思う	7	2	5
合計	34	13	21

4. 発表時間は適切でしたか。

	全体 (5.81±1.47)	発表院生	教員その他
1: 全く思わない	1	0	1
2: ほとんど思わない	1	0	1
4: どちらとも言えない	3	1	2
5: 少し思う	3	0	3
6: まあまあ思う	12	6	6
7: とてもそう思う	12	4	8
無回答	2	2	0
合計	34	13	21

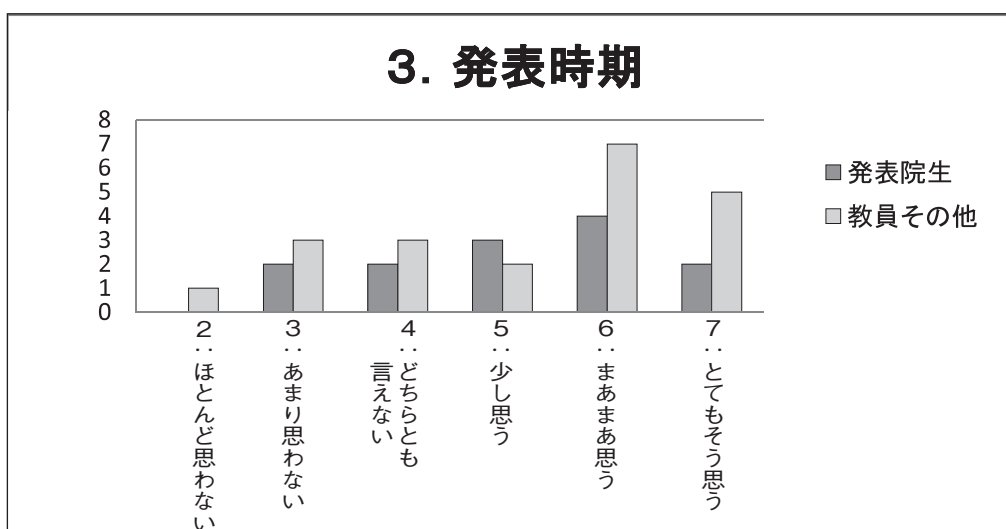
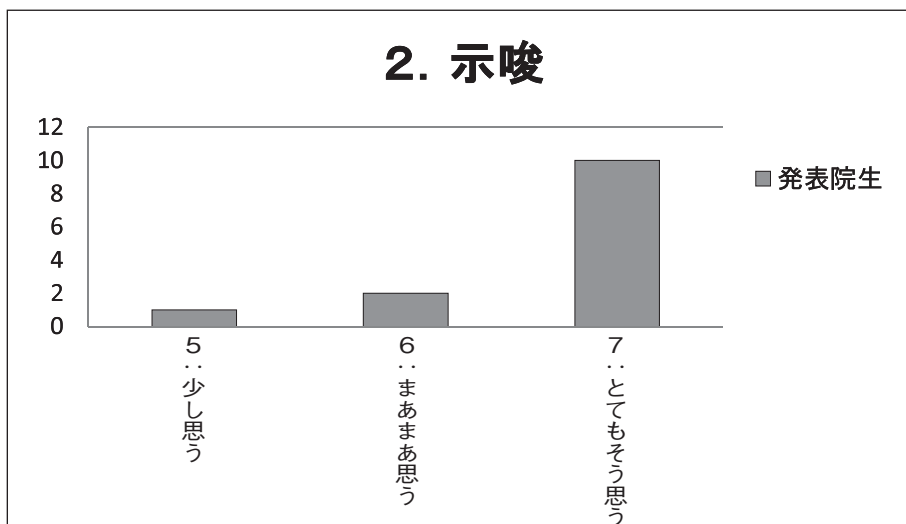
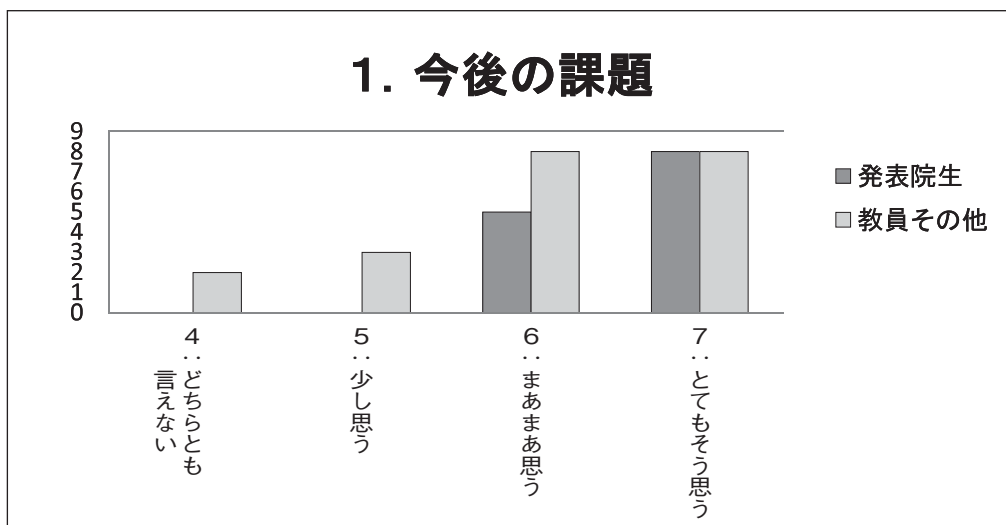
5. 質疑応答の時間は適切でしたか。

	全体 (5.97±1.1)	発表院生	教員その他
2: ほとんど思わない	1	0	1
4: どちらとも言えない	2	0	2
5: 少し思う	4	1	3
6: まあまあ思う	15	7	8
7: とてもそう思う	11	5	6
無回答	1	0	1
合計	34	13	21

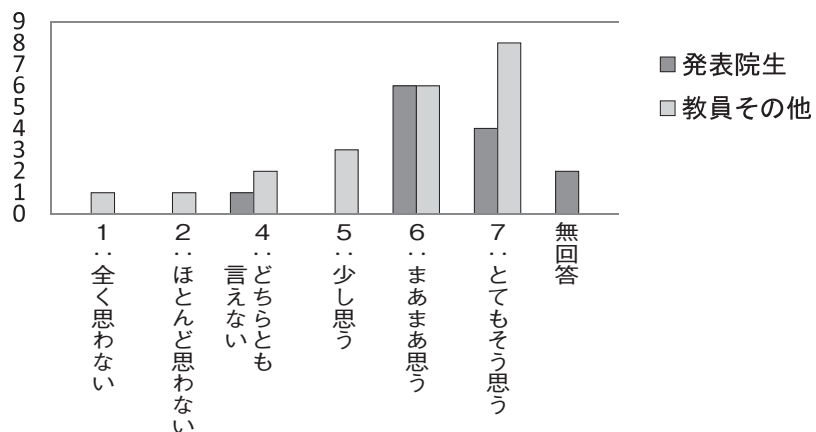
6. 質疑応答の内容は適切でしたか。

	全体 (6.24±0.82)	発表院生	教員その他
4: どちらとも言えない	2	0	2
5: 少し思う	2	0	2
6: まあまあ思う	16	4	12
7: とてもそう思う	14	9	5
合計	34	13	21

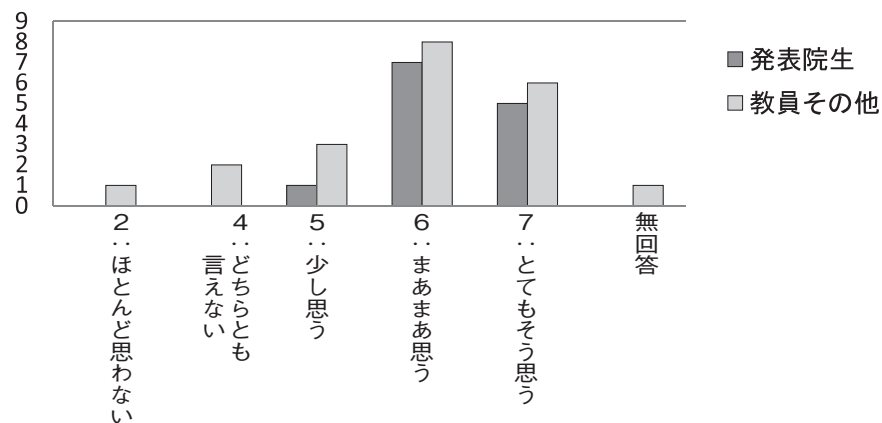
図1



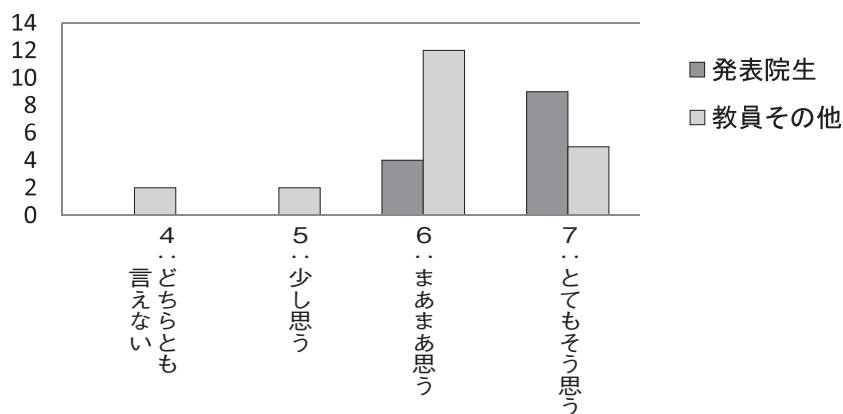
4. 発表時間



5. 質疑応答の時間



6. 質疑応答の内容



看護学部委員会報告

人事委員会

委員長 水戸美津子

1. 所管事項

- (1)自治医科大学看護学部教員の選考に関する事項
- (2)非常勤講師の選考に関する事項
- (3)その他学部長が必要と認めた事項

2. 委員会の構成

- (1)「自治医科大学看護学部教員の選考方法等に関する内規」に規定する者
(5名以上7名以内)

8	12月24日	・基礎看護学教授・准教授の選考結果について
9	1月4日 (持ち回り審議)	・基礎看護学准教授・講師の公募について
10	1月28日	・小児看護学准教授・講師の選考について ・非常勤講師の追加任用（4人）について
11	2月18日	・成人看護学助教の選考について ・非常勤講師の追加任用（4人）について
12	3月11日	・母性看護学講師の選考について ・小児看護学・地域看護学講師・助教の選考について

表1 構成員と役割

氏 名	役 割
水戸 美津子 学部長	委員長
春山 早苗 教授（教務委員長）	委 員
竹田津 文俊 教授（学生委員長）	委 員
三瓶 眞貴子 教授（FD評価実施委員長）	委 員
被選考教員の関連領域の教授等	委 員
学部長が必要と認めた者（2名以内）	委 員

3. 活動内容

- 1)「自治医科大学看護学部教員の選考方法等に関する内規」第2条の規定により、表2のとおり人事委員会を開催した。

表2 2009年度の審議事項

回	開 催 日	審議事項
1	4月16日	・非常勤講師の追加任用（2人）について
2	4月30日 (持ち回り審議)	・非常勤講師の追加任用（1人）について
3	5月12日 (持ち回り審議)	・非常勤講師の追加任用（1人）について
3	5月21日	・基礎看護学助教の選考について
4	7月23日	・精神看護学助教の選考について ・非常勤講師の追加任用（1人）について
5	9月17日	・非常勤講師の追加任用（1人）について
6	10月21日	・非常勤講師の追加任用（1人）について
7	12月3日	・成人看護学講師・助教の選考結果について ・非常勤講師の追加任用（1人）について

教務委員会

委員長 春山 早苗

1. 所管事項

本委員会の所管事項は①授業及び試験に関する事項②単位及び課程の修了に関する事項③学生の入学、退学、休学及び卒業等に関する事項④学生の修学指導に関する事項⑤授業関係の予算に関する事項⑥その他学部長が必要と認めた事項である。

2. 委員会の構成

本委員会の構成員を表1に、下部組織を表2に示す。昨年度、設置した「演習室運用管理担当」は目的を達成したことから廃組した。また、卒業試験導入の必要性、並びに、その方法の検討を役割とする「卒業試験導入検討担当」を新たに設けた。

表1 構成員と役割

氏 名	役 割
春山 早苗 教 授	委員長
中島登美子 教 授	副委員長
三瓶眞貴子 教 授	委 員
中村 美鈴 教 授	委 員
成田 伸 教 授	委 員
永井 優子 教 授	委 員
半澤 節子 教 授	委 員
本田 芳香 教 授	委 員
渡邊 亮一 教 授	委 員
井上 映子 准教授	委 員

表2 2009（平成21）年度 下部組織

担 当 名	担 当 者
既修得単位認定及び編入生履修指導担当	●成田 伸、竹田俊明、大塚公一郎、内海香子、塚本友栄
時間割担当	●中村美鈴、川上勝、長井栄子、宮田真理子
夏季へき地研修担当	●三瓶眞貴子、竹田津文俊、里光やよい、工藤奈織美、島田裕子、和久紀子
カリキュラム運用担当	●永井優子、高木初子、齋藤良子、工藤奈織美、崎田マユミ、樋貝繁香
共通物品管理担当	●半澤節子、櫻井美奈、池下麻美、小川貴子、宮田真理子、西岡啓子、武正泰子、北村露輝
助産師国家試験受験資格関連科目受講生選考担当	●成田 伸、中島登美子、渡邊亮一
授業関係予算担当	●成田 伸、西岡啓子
卒業試験導入検討担当	●成田 伸、中村美鈴、三瓶眞貴子、竹田津文俊

●担当責任者

3. 活動内容

「卒業試験導入検討担当」の提案に基づき、卒業試験は導入せず、本学部教育課程による看護実践能力の卒業時到達度の評価を行うこととし、その評価方法を次年度検討していくこととなった。また、新型インフルエンザの流行に伴い、授業に関わる学生への対応について検討、実施した。

表3 2009（平成21）年度 議題

回	開 催 日	審議事項・報告内容
1	2009年4月9日	・編入生単位認定・履修指導 ・既修得単位認定 ・下部組織の各担当 ・科目責任者・補助科目責任者 ・本委員会年間スケジュール
2	2009年5月7日	・前学期履修状況 ・下部組織の各担当役割と年間計画 ・2009年度授業関係予算の配分
3	2009年6月11日	・前学期定期試験（4学年） ・全体で行う実習の担当 等
4	2009年7月9日	・前学期定期試験（1・2学年） ・2010年度授業関係予算要求（案） ・2010年度時間割
5	2009年9月10日	・4年次前学期取得単位 ・卒業認定 ・復学 ・2010年度時間割 ・2010年度授業関係予算要求（案） ・前学期再試験 ・前学期単位取得状況 ・夏季へき地研修 ・研究生の受け入れ
臨時	2009年9月24日	・新型インフルエンザ対策と授業に関わる学生への対応に関する周知
6	2009年10月20日	・2010年度の本委員会関連学年歴 ・助産師国家試験受験資格関連科目受講生の選考 ・カリキュラム説明会（3年次科目） ・2010年度教室整備に係る予算要求（案） 等
7	2009年11月12日	・後学期履修状況 ・2010年度シラバスの依頼 ・夏季へき地研修報告
8	2009年12月10日	・退学 ・2010年度科目責任者 ・2009年度授業関係予算の執行状況
9	2010年1月14日	・後学期定期試験 ・「履修等に関する調べ」の調査結果 ・現行カリキュラム完全移行後の夏季へき地研修 ・3階コピー機の設置

10	2010年2月10日	・4学年後学期の取得単位 ・卒業認定 ・2010年度時間割 ・3学年看護学実習
11	2010年3月11日	・休学、復学 ・後学期単位取得状況（1～3学年） ・進級判定 ・助産師国家試験受験資格関連科目受講生の選考結果 ・下部組織の各担当の活動報告 ・2010年度開講科目の科目責任者 ・旧カリキュラム留年生の履修科目

学生委員会

委員長 竹田津文俊

1. 所管事項

- (1)学生の厚生補導及び賞罰に関する事項
- (2)学生の健康管理及び学生相談に関する事項
- (3)学生の進路指導に関する事項
- (4)学長賞等の選考に関する事項
- (5)看護学部学生寮の管理運営に関する事項
- (6)奨学生の採用及び貸与に関する事項
- (7)授業料等の免除及び徴収猶予の学生選考に関する事項
- (8)その他学部長が必要と認めた事項

2. 委員会の構成

学生委員会の機能を果たすために、奨学生選考担当、卒後指導担当、学友会幹事がおかれた。役割担当（委員会外教員も含む）は、表1の通りである。

表1 構成員と役割

氏 名	役 割
竹田津文俊 教 授	委員長 学友会幹事
半澤 節子 教 授	副委員長 進路指導担当
成田 伸 教 授	委員 奨学生選考担当
本田 芳香 教 授	委員 奨学生選考担当
井上みゆき 准教授	委員
大塚公一郎 准教授	委員

* 進路指導担当：

井上映子准教授（老年看護学）、鈴木久美子准教授（地域看護学）、塚本友栄講師（地域看護学）、川上勝講師（老年看護学）、西岡啓子助教（母性看護学）

3. 活動内容

学生委員会は、「学生が健全な学業生活を送ることができるよう支援すること」を第一の目的とする委員会である。上記目標に即して、平成21年度も例年通り、学生委員会は、学業（課外活動も含む）の奨励・支援、学生の学業生活上生じた様々な障害や問題の解決への支援、学生の健康問題解決への支援、学生への経済的支援、学生の将来の進路決定の支援を行った。本学部には、女子学生向けの寮があり、健全な寮生活の支援も本委員会が担当した。本学部の学生は学生自治会を、

また寮在住学生は寮自治会をそれぞれ組織し、自主的に運営している。この二つの自治会の運営の支援も本委員会が担当した。これらの本委員会の活動は、本学部の事務を所掌する看護学務課、看護総務課と緊密な相談・連携のもと行われた。

学生の学業生活上生じた様々な障害や問題の解決への支援は、各学生委員の学生との直接相談、学年担当アドバイザーとの緊密な連絡相談、カウンセリングルーム活用の奨励などを通して行った。

学生の健康問題解決への支援は、学生健康管理チームが中心となって行い、また大学保健室の行う検診への受診の奨励、個々の学生の健康相談などを行った。また、大学保健室において、インフルエンザや破傷風の予防接種を希望者に行った。

学生への経済的支援は、主に奨学金の選考・推薦を通して行われた。自治医科大学看護学部奨学金、日本学生支援機構奨学金の選考・推薦を行った。

新たな学生への経済的支援として、平成21年度より、本学においても、日本社会全体の景気低迷による保護者の経済破たんによる就学困難学生への就学資金（授業料等）の援助が開始された。授業料等の免除・徴収猶予の制度が設けられた。平成21年度は、1学生に「半額免除、半額徴収猶予」の措置が講じられた。

学生の将来の進路決定の支援は、卒後指導担当が中心となって行った。

学生自治会、寮自治会の運営の支援は、学生委員会委員と両自治会役員との懇談を通して行われた。寮生活そのものの支援として、入寮案内、寮生活オリエンテーション、防災訓練、寮規則違反者への指導などが行われた。

部活動、クラブ活動、サークル活動などの課外活動を、学友会（本学部では、学生委員会が所掌）を通して奨励した。薬師祭（学園祭）の開催を支援した。本年度は、当初9月25日（金）～9月27日（日）の開催予定だったが、新型インフルエンザ流行のため、11月に延期し、学外の一般の人々が参加できる公開型ではなく、学内のみを対象として開催された。

授業中、課外活動中に発生した傷害、疾病、器物損傷に対する保険として損害賠償責任事故保険「WILL」への学生の加入を促した。尚、平成20年度までに入学した学生（平成21年度の2～4年生）は、入学時に、授業中、課外活動中に発生した傷

害、疾病に対する保険として、学生教育研究災害傷害保険にも加入している。平成20年度まで「学生教育研究災害傷害保険」と「WILL」の2本立てだったが、平成21年度以降の入学生からは「WILL」に一本化された。

通常の疾病に対する保険として自治医科大学学生健康保険組合（自治医科大学附属病院での加療に対して一人年間10万円まで給付されるものである）への学生の加入を促した。

学業（課外活動も含む）の奨励・支援の一環として、看護学部校舎における防災訓練を行った。

4学年卒業予定者のなかより、学長賞候補者を選考し3名推薦した。

学生委員会は、8月を除いて毎月定例開催され、合計11回開催された。臨時の委員会が9月に2回開催された。

議題を下記に示す。

議題

4月第1回定例

- (1)年間予定について
- (2)役割分担について
- (3)その他

5月第2回定例

- (1)防災訓練について
- (2)奨学金の進捗状況の報告について
- (3)その他

6月第3回定例

- (1)看護師宿舎・看護学部学生寮合同防災訓練の報告について
- (2)奨学金の報告について
- (3)看護学部の防災訓練の日程と内容の検討について
- (4)その他

7月第4回定例

- (1)看護学部校舎内防災訓練の日程変更について
- (2)その他

9月第5回定例

- (1)看護学部奨学金の追加希望者について
- (2)看護学部防災訓練について

(3)その他

10月第6回定例

- (1)看護学部校舎内の防災訓練について
- (2)その他

11月第7回定例

- (1)懲戒規程について

12月第8回定例

- (1)学長賞の選考について
- (2)懲戒規程について

1月第9回定例

- (1)学長賞の選考について
- (2)懲戒規程について
- (3)その他

2月第10回定例

- (1)学長賞の選考について
- (2)卒業式の送辞担当学生について
- (3)入寮希望学生の審査について
- (4)その他

3月第11回定例

- (1)学年担当アドバイザー報告
- (2)その他

5月第1回臨時

- (1)学生の違反行為について

9月第2回臨時

- (1)懲罰規程について

F D評価実施委員会

委員長 三瓶眞貴子

1. 所管事項

- (1) 授業の内容及び方法の評価に関する事項
- (2) 教員の資質開発に関する事項
- (3) 教員研修会の企画，実施に関する事項
- (4) 教育内容等の改善のための組織的取組に関する事項
- (5) その他学部長が必要と認めた事項

2. 委員会の構成

表1 委員会の構成と役割

氏 名	役 割
三瓶 眞貴子 教授	委員長
井上 映子 准教授	副委員長
竹田 俊明 教授	委 員
齋藤 良子 准教授	委 員
内海 香子 講師	委 員
塚本 友栄 講師	委 員

3. 活動内容

今年度は、FD報告書の作成と、授業評価の在り方の再構築を目標に掲げて活動した。

前者については、授業研究会の成果を授業研究会報告書として作成し、将来の評価にたえる資料として残すと同時に、私立看護系大学全117校へも送付し、本学部のFD活動並びに教育活動の一端を紹介した。

後者においては、FDについての学習を行いながら、1年間かけて名実ともに大学としてふさわしい授業評価の在り方について検討を重ねた。その成果の一部は次年度へと活用できるようにした。

広報委員会

委員長 中村 美鈴

1. 所管事項

広報委員会は、平成18年度の広報・編集委員会から、広報活動部門を強化するために平成19年度から新たに設置された委員会である。広報委員会の所管は、本看護学部における教育・研究の活動状況を積極的に社会に向けて広報することに努め、正確かつ迅速な情報の提供を行うとともに本看護学部が学内外に向けて行う広報活動に寄与することである。

そのために、看護学部の広報活動の充実と促進を図り、本看護学部の情報提供の体制を整備することが役割である。

2. 委員会の構成

本委員会は、委員長、副委員長ほか、4名の委員、ならびに事務局3名で構成した。委員の主な役割を表1に示すように分担し、年間計画にそって活動した。委員会は4回開催した。

表1 構成員と役割

氏 名	役 割
中村 美鈴 教授	委員長 統括、オープンキャンパス ホームページ 看護学部DVD
半澤 節子 教授	副委員長 Vitamin N ホームページ
鈴木久美子 准教授	オープンキャンパス 看護学部パンフレット
小原 泉 准教授	Vitamin N 看護学部パンフレット
櫻井 美奈 講師	看護学部パンフレット 看護学部DVD
川上 勝 講師	オープンキャンパス 看護学部DVD

3. 活動内容

第1回目の委員会（平成21年4月16日）では、本委員会設置の目的と所管事項について確認し、年間の役割、活動内容等について確認した。主な活動内容としては、(1)看護学部パンフレットの作成、(2)ホームページ(3)広報誌ビタミンN作成、(4)オープンキャンパスの企画・実施、(5)進路相談会、模擬授業等への参加、(6)その他PRに関することである。2009年度の新たな取り組みとして、現状

に見合うDVD作成（チャプター形式）が決定した。

第2回目の委員会（平成21年6月18日）では、まずは、オープンキャンパスの企画・運営について検討した。過去2年間の実績を踏まえてワーキングで検討した平成21年度看護学部オープンキャンパス実施要領について、資料に基づき説明があった。主な変更点については、次の3項目が挙げられた。①例年参加人数が多く、中講堂では収容が困難なため、大講堂に変更する。②各担当の説明時間を15分から10分に短縮する。③15時からの施設見学について、学生引率による巡回方式から、参加者の自由見学方式に変更する。

他、看護学部パンフレット、ポスターが5月に完成したことが報告された。また、看護学部パンフレットの完成に合わせて看護学部のホームページもアップされた。VitaminNについては、予定通り7月発行で進行している旨が報告された。さらに、DVD作成に関してスケジュールならびにシナリオが示された。

第3回目の委員会（平成21年10月15日）では、オープンキャンパスの実施・評価について検討した。実際のオープンキャンパスは、8月5日（水）の参加者人数は、生徒294名、保護者132名、合計426名、8月21日（金）の参加者人数は、生徒188名、保護者104名、合計292名、2日間の全体参加人数718名（前年度618名）であった。オープンキャンパスの進め方は、概ね順調に実施された。さらに、アンケート集計結果では、大学のホームページ及び高校へ送付したポスターで知った者が多いこと、8月に2回程度の開催で良いこと、多くの場所を自由見学する方式が良いこと、体験看護演習が好評なこと等が判明したが、来年度に向けて広報委員会としての具体的な関わり方を施設見学だけでなく、全体構成（メディカルシミュレーションセンター、図書館）について検討する必要があるのではないかということ、協力学生への来学者への説明の仕方をもう少し徹底した方がよいとの意見が出された。

一方、次年度のパンフレットについて、看護学部の現状を反映するように写真の更新や新カリキュラムの掲載、内容の充実が図れたと考えているが、QRコードを掲載し、受験生が簡単に情報入手を可能にするなど改善に向けて検討を行った。ビタミンNについては、オールカラー化で仕上が

り好評で学内、学外（保護者など）に合せて1,300部配付した。また、ホームページに掲載する場合の記事の考え方上について検討した。

第4回目の委員会（平成22年1月21日）では、作成したDVDを視聴し、必要箇所を吟味した。次年度に向けた看護学部ホームページについて、平成21年4月から12月までのアクセス件数について、分析し検討した。

その結果、今後の課題が挙げられ、次年度に引き継ぎ運びとなった。

進路相談会ならびに説明会では、前年度の実績に基づき、事務員と共に教員が高校や説明会場に出向いて広報を行った。模擬授業は、真岡高校に中村、栃木女子高校に小原准教授が担当した。

2009年度の広報委員会の全体的な活動評価を実施し、概ね活動目標には達成できたという委員全委員の評価であった。

編集委員会

委員長 竹田津文俊

1. 所管事項

- (1)看護学ジャーナルの編集，刊行に関する事項
- (2)年報の編集，刊行に関する事項
- (3)その他学部長が必要と認めた事項

2. 委員会の構成

本委員会の構成員と役割は表1に示すとおりである。

表1 構成員と役割

氏 名	役 割
竹田津 文俊 教授	委員長
大塚 公一郎 准教授	副委員長
小原 泉 准教授	委員
齋藤 良子 准教授	委員
鈴木 久美子 准教授	委員
高木 初子 准教授	委員

3. 活動内容

編集委員会は，自治医科大学看護学部年報と自治医科大学看護学ジャーナルの刊行を担当した。自治医科大学看護学ジャーナルは，大塚准教授が主に担当し，自治医科大学看護学部年報は竹田津が担当した。

自治医科大学看護学ジャーナル第7巻を刊行した。内容は，原著論文 2編，報告 6編，資料 1編，看護学領域共同研究報告 9編であった。

自治医科大学看護学部年報は，従来の編集方針通りに，刊行した。

尚，自治医科大学看護学部年報と自治医科大学看護学ジャーナルは，本号，本巻より，電子媒体化された。電子ジャーナル，オンラインジャーナルとなり，学内外多くの人々が閲覧できるようになるであろう。

予算委員会

委員長 水戸美津子

1. 所管事項

- (1) 学部の教育及び研究にかかる予算に関する事項

2. 委員会の構成

本委員会の構成は、表1のとおりである。

表1 構成員と役割

氏 名	役 割
水戸 美津子 学部長	委員長
春山 早苗 教授（教務委員長）	委 員
竹田津 文俊 教授（学生委員長）	委 員
中村 美鈴 教授（FD評価実施委員長）	委 員

3. 活動内容

本委員会は定例の開催ではなく、所管事項に関して審議の必要な事項が生じた際に、不定期で開催している。2009年度の開催日及び審議事項は表2のとおりである。

表2 2009年度の審議事項

回	開 催 日	審議事項・報告内容
1	4月22日	・2009年度看護学部教育研究経費等の予算額について ・教員の海外出張に係る取扱について
2	5月21日	・2009年度看護学部授業関係予算の配分について
3	9月17日	・2010年度看護学部予算見積額について
4	11月19日	・教員の海外出張に係る取扱について

国家試験対策委員会

委員長 成田 伸

1. 所管事項

国家試験対策委員会の所管は、保健師・助産師・看護師国家試験を受験する本学部の在学学生や卒業生が国家試験に合格するように、学習環境を整え、学習相談などの支援を行うことである。

2. 委員会の構成

平成21年度の家試験対策委員会は、表1に示す8名の委員、ならびに事務局2名で活動を行った。

表1 構成員と役割

氏 名	役 割
成田 伸 教 授	委 員 長
大塚公一郎 准教授	副委員長
竹田 俊明 教 授	委 員
里光やよい 准教授	委 員
鈴木久美子 准教授	委 員
内海 香子 講 師	委 員
塚本 友栄 講 師	委 員
樋貝 繁香 講 師	委 員

3. 活動内容

計11回の委員会を開催した。国家試験対策委員会の具体的な活動としては、まず国家試験受験に向けてのガイダンスを、3年生に1回、4年生に2回実施した。次に、国家試験対策のための模擬試験を、保健師については2回、助産師については2回、看護師については3回実施した。この模擬試験の成績を踏まえて、学生の個別面接・指導を行った。個別面接・指導では、学生を7グループに分け、それぞれのグループを1名の国家試験対策委員が担当し、学習方法や学習上の悩みなどの学習相談を行った。また、国家試験出題科目を担当する他の教員にも協力を依頼し、平成21年12月から平成22年1月にかけて、国家試験対策ゼミを開講した。

学習環境の整備については、学生サロンに設けられた国試対策コーナーに、受験参考書や問題集を置き、学生がいつでも利用できるようにした。さらに、業者が実施する模擬試験・国試対策講義のパンフレットを置き、学生が国家試験に備えるための便宜を図った。

平成21年度の家試験は、助産師が平成21年2月18日（木）に、保健師が平成21年2月19日（金）に、看護師が平成21年2月21日（日）に実施され

た。その結果は、表2に示すとおりであった。平成21年度は保健師・助産師・看護師とも全国平均が80%台と低迷した。本学は、看護師については例年通りの高い合格率であり、保健師は88.9%と全国平均は上回ったものの、助産師は全国平均より低い80.0%という結果であった。今後も国家試験の傾向の変化が考えられるため、次年度以降は、高い合格率に復帰・維持できるように、国家試験対策に力を注いでいく必要がある。

表2 平成21年度保健師助産師看護師国家試験の結果

区 分	資格	受験者数 (人)	合格者数 (人)	合格率 (%)
自治医科大学 看護学部	保健師	108	96	88.9
	助産師	10	8	80.0
	看護師	99	97	98.0
全 国	保健師	13,048	11,295	86.6
	助産師	1,901	1,579	83.1
	看護師	52,883	47,340	89.5

臨床実習指導研修委員会

委員長 本田 芳香

1. 所管事項

本委員会は、今年度の臨床実習指導研修会の企画運営及び来年度に向けての計画を所管する。

2. 委員会の構成

本委員会の構成員と役割は表1に示すとおりである。

表1 構成員と役割

氏名	役割
本田 芳香 教授	委員長
里光やよい 准教授	副委員長
崎田マユミ 講師	受講者担当
角川 志穂 講師	受講者担当
工藤奈織美 講師	施設・消耗品担当
長井 栄子 助教	講義・演習担当

3. 活動内容

本委員会は、今年度は表2に示すとおり6回の委員会を開催し、平成21年臨床実習指導研修会のプログラムの検討、講師等の選定と依頼、広報、研修会の運営及び次年度のプログラム（案）作成及び運営マニュアル（案）の作成をおこなった。

表2 委員会開催

回	開催日	審議事項
1	2009年4月20日	年間計画 役割分担
2	2009年5月18日	受講者担当スケジュール、送付文書 作成、Web申し込み受付、アンケート 調査作成
3	2009年7月9日	プログラム確認、講師依頼
4	2009年9月3日	当日役割、演習進め方
5	2009年9月24日	臨床実習指導研修会のアンケート調 査結果 プログラム評価
6	2009年10月22日	新プログラム案作成 臨床実習指導研修会マニュアル作成

平成21年度臨床実習指導研修会は平成21年9月8日（火）、9日（水）の両日で開催した。プログラムは表3、受講者数は表4の通りであった。

表3 平成21年度臨床実習指導研修会 プログラム

9月8日（火） 会場：大教室Ⅱ

時間	科目	担当
9:00～9:10	オリエンテーション	委員長
9:10～9:20	学部長挨拶	学部長
9:20～10:20	看護学部のカリキュラムおよび 臨床実習の概要	教務委員長

— 休憩（10分） —

10:30～11:30	医療・看護トピックス	小原准教授
11:30～11:35	演習オリエンテーション	副委員長

— 昼食、移動（85分） —

13:00～14:30	看護する上で大切にしていること （演習） 場所：大教室Ⅲ・Ⅳ	委員
-------------	-----------------------------------	----

— 休憩、移動、他グループの資料閲覧（15分） —

14:45～15:45	看護する上で大切にしていること （発表・討議）	委員
15:45～16:00	本日のまとめ	委員

9月9日（水） 会場：大教室Ⅱ

時間	科目	担当
9:00～9:05	オリエンテーション	委員長
9:05～9:50	本学学生の理解	渡邊教授

— 休憩（10分） —

10:00～10:45	臨床実習指導の実際（教員の立場 から）	川上講師
-------------	------------------------	------

— 休憩（10分） —

10:55～12:05	10:55～11:25 臨床実習指導の 実際（臨床助教 の立場から） 11:25～11:55 11:55～12:05 質疑応答	臨床実習 指導者2名
-------------	---	---------------

— 昼食、移動（85分） —

13:30～14:50	学生の成長・発達を助ける実習 での支援方法について（演習）	委員
-------------	----------------------------------	----

— 休憩、移動、他グループの資料閲覧（15分） —

15:05～16:05	学生の成長・発達を助ける実習で の支援方法について（発表・討議）	委員
16:05～16:30	研修会まとめ、修了書授与式	委員長

表4 平成21年度臨床実習指導研修会受講者数等

受講申込者数	66名
受講者数	66名
修了者授与者数	66名

研究推進委員会

委員長 半澤 節子

1. 所管事項

研究推進委員会は、平成20年度に看護学部の教員による研究活動の強化を図るために、新たに設置された。研究推進委員会の目的は、平成20年度～平成24年度までの第二期中長期目標、中期計画に基づき、中期目標「教員の教育研究活動を適切に評価するための評価方法を構築する」、中期計画「評価方法を検討する」と明記されている。

本委員会の所管事項として、①研究活動評価のためのシステムの構築（平成20年度から24年度）、②研究体制の確立を図り、教員の研究能力、研究指導能力の向上を図り、現場の看護職者との共同研究を推進する具体的な方法を検討する（平成20年度、21年度）、③実践の場における研究の推進、④教員の研究能力の向上に資するための環境整備という4つの課題が明記されている。

2. 委員会の構成

表1 構成員と役割

氏名	役割
半澤 節子 教授	委員長
成田 伸 教授	副委員長
小原 泉 准教授	委員
鈴木久美子 准教授	委員
宇城 令 講師	委員
松本 幸枝 講師	委員

3. 活動内容

本委員会は、①研究体制の確立を図り、教員の研究能力、研究指導能力の向上を促すための共同研究を推進すること、②研究活動評価の方法を確立すること、以上2点を平成24年度までの目標とした。

2年目となった平成21年度は、引き続き現場の看護職者との共同研究を推進し研究体制の確立を図ることを目的に、看護系教員共同研究費申請の調整を行った。また、9月及び2月の年2回開催される附属病院看護部主催看護研究発表会に委員が参加し助言を行い、共同研究の推進についての理解を求めた。こうした取り組みの結果、本学看護学ジャーナルの原著、報告、学術誌などへの論文発表が増加した。

4. 定例会における議題

第1回定例（21.4.9）

- 1) 平成21年度年間計画（案）の検討
- 2) 平成21年度看護系共同研究費申請について

第2回定例（21.5.7）

- 1) 科学研究費の申請について
- 2) 科学研究費申請に関するセミナーの開催について

第3回定例（21.6.11）

- ・平成21年度共同研究費申請一覧について

第4回定例（21.11.19）

- 1) 科学研究費申請に関するセミナー実施報告
- 2) その他

第5回定例（21.12.10）

- 1) 平成21年度下半期及び次年度の年間計画
- 2) 文部科学省研究費補助金申請の状況
- 3) その他

第6回定例（22.3.11）

- 1) 看護学部看護系共同研究費の支出関係書類
- 2) 附属病院看護研究スーパーバイザー
- 3) その他

5. 本年度の目標達成状況と次年度の課題

平成21年度の重点課題である研究体制の確立、教員の研究能力、研究指導能力を向上のため現場の看護職者との共同研究の推進については、前年度に引き続き学内外の研究費補助制度の活用を促し、研究活動を充実させることができた。その一例として、科学研究費補助金獲得の年次推移（平成22年度6月の教授総会資料を参照）にも示したように、一定の成果を達成できた。

次年度も、科学研究費補助金の申請及び採択件数を増やすための取り組み、附属病院看護部などとの共同研究の強化について、引き続き課題とする。

実習調整委員会

エンターション

委員長 中島登美子

1. 所管事項

本委員会の所管事項は、1) 実習教育に関する事項、2) その他学部長が必要と認めた事項である。

2. 委員会の構成

委員会の構成員を表1に示す。

表1 構成員と役割

氏 名	役 割
中島登美子 教 授	委員長
高木 初子 准教授	副委員長
齋藤 良子 准教授	委 員
櫻井 美奈 講 師	委 員
崎田マユミ 講 師	委 員
野崎 章子 講 師	委 員

3. 活動内容

本委員会は、新カリキュラム進行に伴う実習教育運営上の全般的調整を行うために設置されており、設置期間は、平成20年4月から平成24年3月までである。本年度は計11回の委員会を開催し、1) 看護学臨地実習の計画・実施・評価に関する事項、2) 看護学臨地実習施設との連絡調整に関する事項、3) その他、臨地実習に関する事項を検討した。

1) 看護学臨地実習の計画・実施・評価に関する事項

- (1) 実習要項の作成
- (2) 臨地実習におけるヒヤリハットの蓄積とフィードバック
- (3) 3年次看護学実習全体オリエンテーション
- (4) 病院情報システム利用に伴う教育
- (5) 次年度の3年次前学期実習ローテーション表作成
- (6) 臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術の水準の検討

2) 看護学臨地実習施設との連絡調整に関する事項

- (1) 自治医科大学附属病院との臨地実習に係わる連絡調整
- (2) 実習教育説明会の計画立案と実施

3) その他、臨地実習に関する事項

- (1) 新任教員への本学の実習教育に関するオリ

4. 今後の課題

1) 実習施設との連携

カリキュラム改正を踏まえ、教育成果が得られる実習を行うには実習施設との連携が不可欠であり、主たる実習施設である自治医大附属病院看護部と実習指導に関する連絡調整を行ってきた。今後、カリキュラムが進むにつれ実習教育に対する相互理解が更に必要となるため、実習施設との連絡調整を密に行う必要がある。

2) 実習における安全対策の充実

最近の病院内感染や医療事故、および個人情報漏洩の発生に鑑み、実習における安全への配慮が必要となっている。実習における安全対策として、個人情報漏洩予防対策、事故予防対策等を行ってきたが、今年度は暴力予防対策を加えた。一方、今年度のヒヤリハットや事故報告件数は5件と比較的少なく、報告につなげる意識が弱い可能性がある。また、インフルエンザ流行期には実習への影響を最小限にできるよう、感染予防対策を強化する必要がある。これらを実習オリエンテーション等で注意を喚起することが必要と思われる。

入試実施委員会

委員長 渡邊 亮一

1. 所管事項

入試実施委員会の所管事項は、①入試実施説明会に関する事、②入試実施日の役割分担・実施手順に関する事、③推薦指定校の訪問の3つである。

2. 委員会の構成

平成21年度の入試実施委員会は、表1に示す6名の委員で構成した。

表1 構成員と役割

氏 名	役 割
渡邊 亮一 教 授	委員長
大塚公一郎 准教授	副委員長
井上みゆき 准教授	委 員
野崎 章子 講 師	委 員
松本 幸枝 講 師	委 員
矢野 美紀 講 師	委 員

3. 活動内容

平成21年度は、表2に示すような議題で計3回の委員会を開催した。

推薦指定校の訪問については、平成21年6月中旬から7月上旬にかけて、入試実施委員会の委員以外の教授・准教授を含めた計11名の教員と看護学務課・看護総務課の職員が協力して、栃木県18校、埼玉県10校、福島県4校、茨城県・群馬県各2校、岩手県・山形県各1校の計38校の推薦指定校の訪問を実施した。

入試実施説明会は、平成21年11月5日（木）に共通事項と推薦入学試験の説明会を、平成22年1月28日（木）に一般選抜入学試験の説明会を実施した。

入試実施日の役割分担・実施手順に関しては、前年度の委員会でこれらを記載した4種類のマニュアル（「入学試験の実施について（全入試共通）」、「推薦入学試験マニュアル」、「一般選抜入学試験第一次試験（筆記試験）マニュアル」、「一般選抜入学試験第二次試験（面接試験）マニュアル」）を作成していたので、この内容の見直しや再検討を行い、マニュアルを完成させた。このマニュアルを用いて、前述した入試実施説明会を行った。

表2 入試実施委員会の議題

回数	開催日	議 題
1	平成21年 4月28日	・入試実施委員会の所管事項ならびに委員等の構成について ・平成22年度看護学部入学試験の概要について ・推薦指定校の訪問について ・入試実施説明会の日程について ・入試実施マニュアルについて
2	平成21年 10月27日	・平成22年度入学試験の実施について（共通マニュアル）および平成22年度推薦入学試験実施マニュアルについて
3	平成22年 1月14日	・平成22年度一般選抜入学試験（一次、二次）実施マニュアルについて

大学院看護学研究科委員会等報告

大学院看護学研究科委員会

研究科長 水戸美津子

1. 所管事項

- (1) 学則の制定及び改廃に関する事項
- (2) 研究科の教育課程に関する事項
- (3) 入学、休学、退学、転学、転入学、除籍及び賞罰に関する事項
- (4) 試験に関する事項
- (5) 学位論文審査に関する事項
- (6) その他研究科の学事に関する重要事項

2. 委員会の構成

- (1) 「自治医科大学大学院学則」第41条第2項に規定する者（研究科長、専攻分野主任教授、研究科長が指名する教授）

表1 構成員と役割

氏名	役割
水戸 美津子 教授	委員長（研究科長）
三瓶 眞貴子 教授	委員（幹事長）
春山 早苗 教授	委員（専攻分野主任）
中村 美鈴 教授	委員（専攻分野主任）
中島 登美子 教授	委員
竹田津 文俊 教授	委員
本田 芳香 教授	委員
成田 伸 教授	委員
永井 優子 教授	委員
半澤 節子 教授	委員

3. 活動内容

- (1) 「自治医科大学大学院学則」第41条第1項の規定により、看護学研究科の学事に関する重要事項について審議を行うため、表2のとおり看護学研究科委員会を開催した。

表2 2009年度の審議事項

回	開催日	審議事項
1	4月2日	・入学生の研究指導教員について ・ティーチングアシスタント制度利用申請について ・入学試験日程について
2	5月7日	・休学願について ・長期在学制度利用申請について ・履修科目の決定について ・入学試験実施に関する担当の役割について ・2010年度入学試験説明会について ・科目等履修生の募集日程について

		・出願資格認定試験の実施要領、入学試験の実施要領について
3	6月4日	・大学院学則一部変更について
4	7月2日	・教員任用申請について
5	8月6日	・2010年度入学試験実施について ・研究構想発表会について ・2010年度予算要求に係る教育用機器備品購入要望書について
6	9月24日	・2010年度出願資格認定試験判定について ・休学願について
7	10月1日	・2010年度入学試験実施について ・研究構想発表会に関するアンケート調査について
8	10月22日	・2010年度入学試験合否判定について ・休学願について
9	12月3日	・ティーチングアシスタント制度利用申請について ・「自治医科大学大学院看護学研究科における学位に関する細則」の一部改正について ・科目等履修生単位修得（前期履修）について ・2010年度科目責任者について
10	12月24日	・学位審査委員会の設置について ・2010年度科目等履修生の決定について ・「自治医科大学学生懲戒規程」について ・「自治医科大学大学院学則」の一部改正について
11	1月28日	・論文審査（口頭試問）について ・授業研究会について ・2010年度学年歴について ・2010年度看護学研究倫理審査会等の日程について ・2010年度入学試験日程について ・2010年度非常勤講師申請について ・「自治医科大学大学院学則」の一部改正について
12	2月18日	・論文審査（口頭試問）の結果について
13	3月4日	・修士（看護学）学位論文の審査（最終試験）結果について ・修了判定について ・単位取得の認定について ・科目等履修生単位修得（後期履修）について
14	3月25日	・退学願について ・休学願について ・2010年度4月オリエンテーション計画について ・2010年度大学院看護学研究科の教員任用申請について ・2010年度看護学研究科委員会日程等について

		・2010年度教員組織及び役割分担について ・看護学研究倫理審査申請ガイドライン（学生用）について ・2010年度授業科目責任者の一部変更について
--	--	---

※ 本年度（2009年度）の項目については、年度の記載を省略

研究科委員会幹事会

幹事長 三瓶眞貴子

1. 所管事項

- (1) 研究科委員会に付議する事項に関する事前
審議
- (2) 看護学研究科に係る企画立案
- (3) その他看護学研究科の運営に係る日常業務
の処理

2. 幹事会の構成

氏 名	役 割
三瓶 眞貴子 教授	幹事長
竹田 俊明 教授	幹 事
中村 美鈴 教授	幹 事
春山 早苗 教授	幹 事
渡邊 亮一 教授	幹 事
井上 映子 准教授	幹 事
井上 みゆき 准教授	幹 事
小原 泉 准教授	幹 事
齋藤 良子 准教授	幹 事
里光 やよい 准教授	幹 事
鈴木 久美子 准教授	幹 事
高木 初子 准教授	幹 事

3. 活動内容

本幹事会は看護学研究科委員会の下部組織として位置付くものであり、今年度は研究科長と密接に連携をとりながら、看護学研究科委員会に付議する事項、看護学研究科にかかる企画立案等を行った。

会の運営について必要時開催とし、その他持ち回り審議を行い、効率化を図った。

教育研究分野別報告

基礎科学関連

教授 渡邊 亮一

1. スタッフの紹介

教授 渡邊 亮一

准教授 大塚公一郎

2. 教育の概要

1) 基礎科学関連の教育概要

(1)情報学（1～4年次後学期2単位：選択）

「情報学」は、情報とは何かを学び、情報量の概念を理解し、メディアリテラシー能力を養うことを教育目標としている。渡邊が30時間を担当して講義ならびに演習を行った。

(2)統計学（2年次前学期1単位：必修）

「統計学」は、推測統計学の基本的な概念を理解し、それを医療や看護の場面で応用できる能力を養うことを教育目標としている。渡邊が15時間を担当して講義を行った。

(3)統計学演習（2年次後学期1単位：必修）

「統計学演習」は、「統計学」で学習した内容をさまざまな場面で応用できる能力を養うことを教育目標としている。渡邊が30時間を担当して講義ならびに演習を行った。

(4)疫学（2年次前学期2単位：必修）

「疫学」は、疫学とは何か、保健問題解決のためになぜ必要なのかを理解し、その方法論を習得することを教育目標としている。加えて、健康指標、保健統計関連指標について理解することを教育目標にしている。渡邊が30時間を担当して講義ならびに演習を行った。

(5)疫学と公衆衛生（3年次後学期2単位：必修）

「疫学」は、保健問題の公衆衛生学的解決における看護の役割を理解することを教育目標としている。柳川洋非常勤講師（自治医科大学名誉教授）が22時間、渡邊が8時間を担当して講義を行った。

(6)保健医療関係法規（4年次前学期2単位：必修）

「保健医療関係法規」は、看護職に必要な保健医療に関する法体系の概要を理解することを教育目標にしている。柳川洋非常勤講師（自治医科大学名誉教授）が20時間、渡邊が10時間を担当して講義を行った。

(7)心理学（2年次前学期2単位：必修）

「心理学」は、心理学の基礎的な知識を理解することを教育目標としている。大塚が30時間を担

当して講義を行った。

(8)人間関係論（1～4年次前学期2単位：選択）

「人間関係論」は、集団力学の理論を習得し、相互に影響を与えながら人が他者と形成する人間関係を理解し、円滑な人間関係をつくりあげる能力を養うことを教育目標としている。大塚が18時間、高村寿子客員教授が12時間を担当して講義ならびに演習を行った。

(9)哲学（1～4年次前学期1単位：選択）

「哲学」は、人間、身体、精神、存在、自己、世界、宇宙などの意味について考察することを教育目標としている。大塚が15時間を担当して講義を行った。

(10)倫理学（1年次後学期1単位：必修）

「倫理学」は、社会的規範（ルール）や道徳的判断、道徳的価値について考察することを教育目標としている。春山早苗教授が2時間、大塚が13時間を担当して講義を行った。

(11)文化人類学入門（1～4年次後学期2単位：選択）

「文化人類学入門」は、家族と親族、地域社会・共同体・民族などの概念から、わが国の土着の文化を含めた多様な文化への理解を深め、文化の比較を行い、文化人類学を理解することを教育目標としている。科目分担者である嶋内博愛非常勤講師（東京大学人文科学系研究科特任研究員）が10時間、村田敦郎非常勤講師（共栄学園短期大学社会福祉学助手）が10時間、大塚が10時間を担当して講義を行った。

2) 基礎科学関連以外の担当教育概要

(1)看護基礎セミナー（1年次前学期1単位：選択）

「看護基礎セミナー」は、ヒューマンケアの基本を理解することを教育目標としている。大塚は和久紀子助教と組んで、渡邊は小川貴子助教と組んで、ともに30時間の演習を担当した。

(2)文献講読セミナー（2年次前学期1単位：必修）

「文献講読セミナー」は、看護にかかわる情報収集の基本的な方法を習得することを教育目標としている。渡邊は、「インターネットの情報資源」に関する2時間の講義を担当した。

(3)生活の理解実習（1年次後学期2単位：必修）

「生活の理解実習」は、健康な生活を理解することを教育目標としている。大塚と渡邊は、ともに90時間を担当した。

3. 研究の概要

1) 医療情報技師の育成に関する研究

渡邊は、日本医療情報学会医療情報技師育成部会が認定する資格である「医療情報技師」および「上級医療情報技師」の育成にかかわっているが、そのなかで「上級医療情報技師」の育成制度や資格制度に関連した研究を行っている。

2) 日系ブラジル人の社会精神医学的研究

大塚は、本学医学部大学院生近藤州医師とともに、本学附属病院精神科において、日系ブラジル人を中心とした外国人患者の診療にあたるとともに、日本に滞在する外国人、とりわけ、日系ブラジル人児童・生徒を対象とした社会精神医学的調査、精神病理学的研究を行い、その結果をいくつかの専門誌に論文発表した。

3) 腎透析患者の精神障害、腎移植ドナーのメンタルヘルスについての研究

大塚は、本学附属病院腎臓センター外科部門の依頼のもと、同病院精神科医師である大澤卓郎、松本健二とともに生体腎移植のドナー候補者の意思決定を確認するための面接を行うとともに、附属病院精神科外来で透析患者の診療にあたった。以上の診療にもとづきサイコネフロロジーの研究を行い、その結果の一部を専門誌に発表した。

4) 統合失調症の精神病理学的研究

大塚は、本学医学部精神医学教室加藤敏教授とともに、統合失調症についての精神病理学的研究を行った。

4. その他

1) 渡邊は、平成19年度に引き続いて、財団法人日本医療機能評価機構の評価調査者として、第三者病院機能評価事業に参画した。

2) 渡邊は、日本医療福祉設備学会理事ならびに事業委員、日本医療情報学会常任幹事・評議員ならびに選挙管理委員会委員長、日本診療録管理学会評議員、日本医療・病院管理学会評議員ならびに研究委員会委員などを務めた。

3) 渡邊は、第29回医療情報学連合大会（第10回日本医療情報学会学術大会）のプログラム委員会委員ならびに座長、第38回日本医療福祉設備学会の一般口演の座長を務めた。

4) 渡邊は、社団法人栃木県看護協会の認定看護管理者ファーストレベル教育「看護情報論」、ならびに認定看護管理者セカンドレベル教育「情報

テクノロジー」の講師を務め、講義ならびに演習を行った。

5) 渡邊は、非常勤講師として、女子栄養大学栄養学部保健栄養学科の「情報科学概論」の講義（30時間）を、社団法人南埼玉郡市医師会久喜看護専門学校「看護学概論Ⅲ（看護研究）」の講義および演習（30時間）を担当した。

6) 大塚は、平成21年1月より多文化間精神医学会理事、同年9月より同学会機関誌「こころと文化」編集委員を務めている。

7) 大塚は、平成21年度より日本社会精神医学会学術委員を務めている。

8) 大塚は、第28回社会精神医学会で事務局長とともに一般演題の座長を務めた。

9) 大塚は、平成19年度より引き続いて、栃木県障害者介護給付費等不服審査会委員を務めている。

10) 大塚は、非常勤講師として、栃木県立衛生福祉大学校看護学科専科で6時間の精神医学の講義を行った。また、本学医学部3年生を対象に、2時間の精神医学の講義を行った。

医学関連

教授 竹田津文俊

1. スタッフの紹介

教授 竹田津文俊

教授 竹田 俊明

2. 教育の概要

新カリキュラムが平成20年度にスタートし、平成21年度は2年目である。

専門基礎（旧カリキュラム）／医学関連分野（新カリキュラム）の主な担当科目は、旧カリキュラムでは「看護の対象である人間の理解および看護実践の基礎となる科目」、新カリキュラムでは「発達段階に共通する看護実践となる科目」より構成されている。

新旧カリキュラムを通じて、従来通り、竹田が専門基礎分野の主な担当科目のなかでもより基礎に近い部分を担当し、竹田津がより臨床に近い部分を担当した。

<旧カリキュラム>

竹田津は、英語Ⅱ（医療英語，3学年対象），医療論（3学年対象）を担当した。

<新カリキュラム>

竹田は、人体の構造と機能Ⅰ（1学年対象）と人体の構造と機能Ⅱ（1学年対象）を主科目として担当し、その他、生化学（1学年対象）、免疫学（1学年対象）とグローバル生物学（2学年対象）を担当した。

竹田津は、病態学概論（1学年対象）、病態学各論（2学年対象）を主科目として担当し、臨床検査学（2学年対象）も担当した。その他、免疫学（1学年対象）を分担した。

竹田、竹田津は、1学年（編入学生を含む）に対して看護基礎セミナー、生活の理解実習を分担した。

尚、教育の内容に関しては平成21年度看護学部シラバスを参照されたい。

3. 研究の概要

1) 竹田は、ニューラルネットワークの作用と応用について研究を行っている。

2) 竹田津は、過去の医療事故の原因分析を行っている。

基礎看護学

教授 三瓶眞貴子

1. スタッフの紹介

教授 三瓶眞貴子（2009年4月1日就任，
2010年3月31日退職）

准教授 里光やよい

講師 宇城 令

講師 櫻井 美奈

助教 和久 紀子（2009年4月1日就任）

資格：看護師，保健師。学位：看護学修士（日本赤十字看護大学看護学研究科修士課程基礎看護学専攻）職歴：初台リハビリテーション病院，国立がんセンター東病院等を経て着任。

助教 米良 千代（2009年7月1日就任，
2010年3月31日退職）

2. 教育の概要

基礎看護学関連科目群では，いつでも・どこでも・誰にでも，相手の立場に立って自らのもてる力を差し出し看護することができるための基礎構築をめざした。基礎構築の柱の一つは，看護の基礎となる看護の立場からの科学的なものの見方・考え方の学修である。もう一つは，その頭脳に導かれた看護技術の修得である。

2009年度は，下記の科目を担当した。括弧内は科目責任者を示す。

「看護学概論」（三瓶眞貴子），「実践基礎看護学Ⅰ」（三瓶眞貴子），「看護技術論Ⅰ」（三瓶眞貴子），「看護技術論Ⅱ」（宇城令），「看護技術論Ⅲ」（三瓶眞貴子），「看護技術演習Ⅰ」（櫻井美奈），「看護技術演習Ⅱ」（櫻井美奈），「看護技術演習Ⅲ」（櫻井美奈），「看護技術総合演習」（里光やよい），「生活の理解実習」（宇城令），「日常生活援助実習」（櫻井美奈）。また「看護技術論Ⅰ」と「看護技術論Ⅲ」については，共立女子短期大学准教授の山田秀樹氏に非常勤講師をお願いした。

その他，「看護基礎セミナー」を三瓶・里光・和久が，「文献講読セミナー」を宇城・櫻井が，「保健・看護研究セミナー」を櫻井・里光・宇城・和久が，「卒業研究」を櫻井・宇城・和久・米良・三瓶が，「へき地の生活と看護」・「夏期へき地体験研修」を三瓶・里光（途中交代）・和久が，「フィールド実習」を和久・米良が担当した。

3. 研究の概要

三瓶・米良は，矛盾論の観点から教育実践研究及び理論的実践研究をそれぞれ行っている。

宇城は，平成21年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（B））を受け，附属病院医療安全対策部等と「転倒・転落事故予防をめざす患者・家族と医療者による協働的リスク回避システムの開発」を課題とした研究を行った。また，看護学部看護系教員共同研究費を受け，自治医科大学附属病院神経内科病棟の看護師とともに「転倒・転落事故防止用マットセンサーの作動実態に関する調査—高齢者転倒ハイリスク患者を対象に—」について取り組みを行った。

櫻井は，看護学部看護系教員共同研究費を受け，自治医科大学附属病院神経内科病棟の看護師とともに「転倒・転落事故防止用マットセンサーの作動実態に関する調査—高齢者転倒ハイリスク患者を対象に—」について取り組みを行った。

4. その他

宇城は以下を担当した。

- ・栃木県看護協会主催看護職員実務研修における「リーダーシップ」の講義・演習
- ・栃木県看護協会主催実習指導者講習会における「看護論」の講義・演習
- ・栃木県看護協会主催看護職員再就業支援研修における「薬物療法の補助技術」の講義・演習

櫻井は以下を担当した。

- ・第40回日本看護学会（看護総合）論文集選考委員

和久は以下を担当した。

- ・栃木県看護協会主催看護職員再就業支援研修における「薬物療法の補助技術」の講義・演習

地域看護学

教授 春山 早苗

1. スタッフの紹介

教授 春山 早苗

准教授 鈴木久美子

講師 塚本 友栄

講師 工藤奈織美

助教 小川 貴子（2010年3月31日退職）

助教 島田 裕子（2009年4月1日就任）

資格：看護師，保健師

学歴：看護学（修士）（自治医科大学大学院看護学研究科修士課程修了）

職歴：栃木県の保健師として，栃木保健所，佐野保健所，県南健康福祉センター，本庁保健福祉課に9年間勤務。大平町の非常勤保健師として3年間勤務

2. 教育の概要

①地域看護学

公衆衛生の理念を追求する看護の目的と活動方法の基本を理解し，公衆衛生看護活動の展開に必要な基本的な知識と技術を学生が修得できることを目指して，主に行政に所属する保健師の活動を素材にして，教育にあたっている。学年進行に伴う教育目標は以下のとおりである。

2年次では，地域における生活の営みの中で人々の健康を維持・増進し，また疾病や障害をもちながら地域で生活する人々の生命や健康を守り支えるための看護の機能・役割，健康を志向する環境づくりや組織的な問題解決を含む公衆衛生看護の活動方法の基本の理解を目指す。続く3年次では，発達段階や健康障害の特性に応じた公衆衛生看護活動の展開方法を理解し，人々の生活の場における看護を含む公衆衛生看護活動の展開に必要な基本的な知識と技術の修得を目指す。また，医療を要し，健康問題を抱えながら地域で生活する人々や，学校や産業の場で生活する人々に対する看護の修得を目指し「フィールド実習」を実施している。在宅看護フィールド実習，学校フィールド実習，産業フィールド実習，外来看護実習，精神保健ケア施設実習から成る「フィールド実習」において，特に地域看護学担当教員は在宅看護フィールド実習，学校フィールド実習，産業フィールド実習，そしてへき地における実習を担

当した。115名の学生の内16名が，へき地（栃木県日光市，群馬県吾妻郡六合村）で実習した。4年次では，フィールド実習を踏まえて，保健福祉行政機関や学校，事業所など活動の場の特性に応じた公衆衛生看護活動の展開方法と，行政看護管理活動や地域における健康危機管理活動の理解を目指す。また，地域診断に基づき地域住民のヘルスニーズを明確にし，それを充足する保健福祉活動を展開する方法の修得を目指し，栃木県内の市町村，保健所をフィールドに演習・実習をしている。

②その他

日本の社会保障制度とそれに基づくヘルスケアシステムの成り立ちを学習する「保健医療福祉システム論」（1年次，必修）では，春山を科目責任者とし，鈴木，塚本，工藤で担当した。へき地に住む人々の生活と看護の特徴を学習する「へき地の生活と看護」（1年次，選択）では，工藤が研修施設との調整や事前演習を担当するとともに，9月より科目責任者となった。「家族生活援助論」（4年次，必修）では，鈴木が科目責任者となり，家族の概念，健康課題をもつ家族員のいる家族の理解とその援助方法等について講義・演習を8時間担当した。「国際保健論」（3年次，必修）では，科目責任者である春山が国際保健とは，世界の感染症の動向と対策について，6時間担当した。「国際看護活動論」（4年次，選択）では，春山は被支援国におけるヘルスプロモーション活動への支援について2時間，講義した。機能障害をもつ対象者に必要な日常生活の援助を理解することを学習目的とした「日常生活援助実習」（2年次，必修）では小川，島田が実習指導を担当した。

ヒューマンケアの基本を学習する「看護基礎セミナー」（1年次，必修）では，地域看護学担当教員全員がグループを担当した。看護にかかわる情報収集の基本的な方法を習得する「文献講読セミナー」（2年次，必修）では，工藤が演習において1グループを担当した。「保健・看護研究セミナー」（4年次，選択）については，地域看護学が担当した学生は16名で，研究テーマの絞り込みと文献検討，研究計画書の作成等を目的に，ゼミと個別指導を行い，地域看護学担当教員全員で20時間，担当した。「卒業研究」（4年次・必修）については，春山が2名，鈴木が3名，塚本が3名，工藤が3名，小川と鈴木で2名，島田と春山

で2名、計15名の学生を指導した。学生は、医療依存度の高い在宅療養者の介護者に対する看護援助や、生活習慣病予防や自己管理のための行動変容に関わる看護援助、育児支援、文化を考慮した看護、児童やへき地に住む高齢者のセルフケア力を高めるための看護援助、介護老人福祉施設入所者への看護援助等のテーマに取り組んだ。

工藤、島田は、三瓶教授、竹田津教授、里光准教授、和久助教とともに教務委員会の下部組織である夏季へき地研修担当の担当者となり、夏期休暇中にへき地にある8カ所の医療機関と併設する老人保健施設等において、「へき地の生活と看護」の履修者を含む33名の研修を企画・実施した。2009年9月30日にへき地体験研修懇談会を開催した。

3. 研究の概要

①自治医科大学看護学部看護系教員共同研究費による研究課題「ALS患者の療養生活支援における医療機関の地域連携部門の看護職の役割に関する研究」に鈴木を中心に地域看護学担当教員全員、並びに、附属病院地域医療連携部看護職とともに取り組んだ。

②春山は、研究代表者として分担研究者である鈴木、塚本、工藤、小川、島田と共に平成19年度～21年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））による研究課題「離島・山村過疎地域における市町村保健師活動のプライオリティの判断に関する研究」に取り組み、その結果を研究成果報告書にまとめた。

③春山は、平成21年度厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）による研究課題「大都市部における自然災害等健康危機発生時の保健活動体制と方法に関する研究」（研究代表者：千葉大学看護学部 教授 宮崎美砂子）の研究分担者として分担研究課題「大都市部における感染症集団発生時の保健活動」に、研究協力者の塚本、島田と共に取り組み、主に都市部に所在する4保健所の新型インフルエンザ等の感染症集団発生時の保健所並びに保健所保健師の活動を調べ、その結果を分担報告書としてまとめた。

④春山と島田は、平成21年度厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）による研究課題「災害・重大健康危機の発生時・発生後の対応体制及び健康被害抑止策に関する研

究」（研究代表者：日本大学医学部 教授 大井田隆）の分担研究「災害発生に備えた平常時における保健活動の取り組みに関する分析」（研究分担者：国立保健医療科学院公衆衛生看護部 奥田博子）の研究協力者として、平常時における自治体の保健活動8事例を調べ、活動の特性及び平常時の保健活動を促進する要因、保健師の役割を検討した。

⑤春山は、平成21年度独立行政法人福祉医療機構長寿・子育て・障害者基金助成事業「児童・生徒を中心とした在宅療養に関する学習支援の推進事業」のワーキング委員として、地域看護学担当教員全員とともに、一中学校の2年生170名を対象に健康教室「病気や障害をもつ人々や高齢者が暮らしやすい地域づくり」を実施し、教室前後の質問紙調査の比較から、その成果を報告書にまとめた。また、実施した健康教室に基づき、事業の目的である児童・生徒に対する在宅療養に関する学習支援の推進のための健康教室プログラムを作成した。

4. その他

1) 春山と鈴木は、県西地区看護職の連携を考える会のオブザーバーを務めている。

2) 春山は第4回日本ルーラルナーシング学会第4回学術集会（2009.8.29～30、前橋市）の企画委員長兼実行委員長を、鈴木、工藤は企画委員兼実行委員を、塚本、小川、島田は実行委員を務めた。

3) 春山：①独立行政法人 国際協力機構（JICA）草の根技術協力事業（草の根パートナー型）「メキシコ国保健医療従事者と思春期ピアリーダーによる健康なライフスタイルづくりシステム化支援事業」（実施期間2009.9～2012.6）のプロジェクトメンバーとして、2010.3.13～3.23に渡墨し、保健医療従事者を対象としたエンパワメント研修の講師を務めるとともに、システムづくりのために活動した。②栃木県地域保健中堅職員研修（企画評価編）（2日間1コース、2009.6.9、10.28、参加者6名）で講師を務めた。③日本地域看護学会 第12回学術集会一般口演1「保健師活動」の座長を務めた（2009.8.8、千葉市）。④JICA「ホンジュラス国オランチョ県思春期リプロダクティブ強化プロジェクト」における「保健行政マネジメント／思春期保健サービス向上研修」において、ホンジュラスの保健医療従事者6名を対象に「思春期保健の地域環境づくりーピアサポーター養成と地域

づくり」を2時間講義した（2009.8.30, 本学部）。⑤大阪市保健指導研究会特別例会において、保健師125名を対象に「新型インフルエンザ対策における保健師の役割」を講義し、意見交換した（2009.9.28, 大阪市）。⑥第14回日本看護サミット北海道'09の分科会「僻地の人びとの健康を守る看護職の役割拡大に向けて」のシンポジストを務めた（2009.10.14, 札幌市）。⑦（財）地域社会振興財団 第11回健康教育・ヘルスプロモーション研修会で、講師を務めた（2009.10.30～11.1, 受講者13名）。⑧小山市保健師人材育成プログラム（新任編）の作成にあたり助言者を務めた（2009.10～2010.3）。⑨栃木県地域保健中堅職員研修（ケアコーディネート・テーマ別編）地域支援従事者コース宇都宮市（3日間1コース, 2009.11.19, 12.7, 2010.1.12, 参加者12人）、並びに、烏山健康福祉センターエリア（2009.11.4, 12.15, 2010.1.19, 参加者15人）で講師を務めた。⑩第29回日本看護科学学会学術集会一般示説「地域看護」の座長を務めた（2009.11.27, 千葉市）。⑪厚生労働省 第4回へき地保健医療対策検討会の参考人として、へき地診療所における看護活動の現状と課題、へき地看護に従事する看護職の確保・定着のための提言を述べた（2009.12.24）。⑫平成21年度富山大学公開講座「保健師・訪問看護師のためのケーススタディおよび業務現状分析のすすめ」第4回目の講師として「地域看護領域における実践活動を見直す・評価するとは」を講義し、また助言者を務めた（2010.2.20, 富山市）。⑬栃木県市町村保健師業務研究会調査研究「事業の多様化・分散配置における市町保健師のあり方に関する調査」に係る指導及び助言を行った（2010.2～3）。⑭栃木県小山市 平成21年度保健師職能キャリアアップ研修会の講師として「保健師の役割と保健師活動に必要な能力、そして保健師活動の醍醐味とは」を講話し、その後のグループワークの助言者を務めた（2010.3.1, 参加者24名）。⑮医道審議会専門委員保健師助産師看護師分科会員を2009.9.27まで務めた。⑯2009年10月から厚生労働省「看護教育の内容と方法に関する検討会 保健師教育ワーキンググループ」のメンバーを務めている。⑰保健師助産師看護師試験副委員長を務めた。⑱日本地域看護学会査読委員を務めた。⑲日本公衆衛生雑誌査読委員を務めた。⑳独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会専門委員を務

めた。㉑日本私立看護系大学協会平成21年度研究助成事業選考委員を務めた。㉒日本ルーラルナース学会理事、編集委員長を務めている。

3) 鈴木：①栃木県看護協会平成21年度実習指導者講習会において「看護論」（6時間）の講義を担当した（2009.8.10, 受講者40名）。②栃木県地域保健中堅職員研修（ケアコーディネート・テーマ別編）地域支援従事者コース宇都宮市のグループワークにおいてファシリテーターを務めた。③下野市介護認定審査会委員を務めている。④栃木県立小山西高等学校の学校評議員を務めている。⑤栃木県看護協会監事を務めている。

4) 塚本：①栃木県地域保健中堅職員研修（企画評価編）において助言者を務めた。②栃木県看護協会平成21年度実習指導者講習会において「実習指導の評価」（6時間）の講義を担当した（2009.9.3, 受講者41名）。③日本看護教育学会第19回学術集会において企画委員を務めた。

5) 工藤：①日本ルーラルナース学会の編集委員を務めている。

6) 小川：①とちぎ思春期研究会事務局幹事を務めている。②日本ルーラルナース学会の編集委員を務めている。

精神看護学

教授 半澤 節子

1. スタッフの紹介

教授 永井 優子

教授 半澤 節子

講師 野崎 章子

助教 濱田 恭子（2009年8月31日退職）

助教 宮田真理子（2009年4月1日就任）

学歴：人間科学学士，人間総合科学大学 人間科学部 人間科学科，資格：看護師，職歴：自治医科大学附属病院の看護師として勤務後，本学に着任。所属学会：日本看護科学学会，日本精神衛生学会

助教 板橋 直人（2009年9月1日就任）

学歴：学士（藤田保健衛生大学衛生学部衛生看護学科），資格：看護師，保健師，職歴：自治医科大学附属病院の看護師として勤務後，医療法人孝栄会前沢病院，同法人福祉ホームB型，栃木県西健康福祉センター，自治医科大学附属病院の看護師を経て本学に着任。所属学会：日本精神障害者リハビリテーション学会，日本精神保健看護学会

2. 教育の概要

当領域では，あらゆる健康水準のすべての個人及び集団を対象に，対象者の人権を尊重するとともに，その人の希望を踏まえた精神看護実践の基礎的知識と技術の修得を精神看護学の学士レベルの教育目標として教育に当たっている。開学時から引き続き開講している3年次学生までを対象とした授業科目，演習科目，実習科目を担当した。また，精神保健や精神的健康に関連したテーマについて「卒業研究」を担当した。平成20年度に導入された新カリキュラムでは，1年次必修科目として「生涯発達看護論」を永井が，「援助関係論」を半澤がそれぞれ科目責任者として担当した。

3. 研究の概要

精神看護学では，継続的に科目教員全員で学内の看護系教員共同研究費を得て，研究に取り組んでいる。

平成19年度から故佐藤を中心として開始された「精神科における長期入院患者の退院を促進する看護に関する研究：精神科看護師の現状認知，使

命感，悲観的な予後予測の関連について」を継続し，平成21年度はその研究成果を国内外の学会に発表し，学術雑誌に公表した。平成21年度は，永井を中心として「地域資源を利用している精神障害者の健康管理に関する研究」と題した研究を展開した。

その他，永井は平成21年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究；研究代表者 大阪大学大学院遠藤淑美）の分担研究者として，研究課題「統合失調症の身体性を育む看護援助に関する研究」を進めている。

半澤は，平成21年度科学研究費補助金（基盤研究C）を得て，「統合失調症者の家族の介護負担感に影響を及ぼす社会文化的・自然環境的要因」と題した研究を，これまでの国内の調査研究を発展させ，東アジア(韓国)の大学教員と連携し多施設共同研究として展開した。その成果は国際学会及び学術雑誌に公表した。また，厚生労働省障害者保健福祉推進事業障害者自立支援調査研究プロジェクト（委員長 東洋大学ライフデザイン学部教授 白石弘巳）の委員として，全国の精神障害者家族を対象とした調査研究活動に従事し，報告書をまとめた。

野崎は，児童精神看護について研究を継続している。平成19-21年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）を得て，研究課題「小児科看護師の児童の心の問題への援助を支援するeラーニングプログラムの開発」と題した研究に継続して取り組んでいる。

濱田は，「精神障害者およびその家族の居場所」を研究テーマとして取り組んでいる。

4. その他

永井は，栃木県看護協会および，日本精神保健看護学会等が主催する各種研修会の講師として，看護職の継続教育に協力している。また，看護師国家試験ブラッシュアップ委員，看護師国家試験委員出題基準改訂部会委員会幹事委員をはじめ，日本精神保健看護学会理事（学術連携委員会）・査読委員，日本生活指導学会代表理事，日本ルーラルナーシング学会，日本看護科学学会，千葉看護学会，文化看護学会の評議員，日本看護学教育学会，日本家族看護学会の査読委員を務めている。

半澤は，日本精神障害者リハビリテーション学会の常任理事（学会誌編集担当理事），同学会誌

編集委員，同査読委員，日本社会精神医学会理事，日本精神保健・予防学会の評議員を務めた。

野崎は，日本看護科学学会第29回学術集会の企画・準備・実行委員，日本精神科看護技術協会千葉県支部の教育委員，千葉看護学会の広報委員，国際看護研究会第12回学術集会準備・実行委員を務め，関東近県の複数の医療施設における看護研究指導を継続している。また，北関東精神保健看護研究会（会長：永井）についても，当科目が事務局となり，年2回開催している。

母性看護学

教授 成田 伸

1. スタッフの紹介

教授 成田 伸

准教授 齋藤 良子（2009年4月1日就任）

助産師，看護師

学歴：自治医科大学附属看護学校看護科・助産科卒業。博士（保健学）神戸大学大学院，修士（保健学）神戸大学大学院，学士（言語・文化）大阪外国語大学

職歴：自治医科大学附属病院，神戸大学医学部保健学科助手・助教，奈良県立医科大学医学部看護学科講師を経て就任

講師 矢野 美紀（2009年12月31日退職）

講師 角川 志穂（2009年4月1日就任）

助産師，保健師，看護師

学歴：広島大学医学部保健学科看護学専攻卒，岩手県立大学看護学研究科博士前期課程卒，修士（看護学）

職歴：岩手医科大学附属病院に助産師として，岩手県立大学看護学部に助手，助教として勤務。

助教 西岡 啓子

助教 須藤 久実（2010年3月1日附属病院看護部に異動）

2. 教育の概要

1）生涯発達看護学概論Ⅰ（妊産褥期）（1単位：15時間，1年次後学期，必修科目）

新カリキュラム科目であり成田が担当した。母性看護学の基本概念，母親になっていくプロセス，生殖医療と倫理・法的な問題などを講義した。

2）看護基礎セミナー（1単位：30時間，1年次前学期，必修科目）

成田は北村助教と，齋藤は里光准教授と，西岡は竹田津教授共に，それぞれ7名，6名，7名の1年生を担当した。ヒューマンケア等をテーマに図書の探索・講読を行い，それぞれの課題に基づいてレポートを完成させた。

3）文献講読セミナー（1単位：30時間，2年次前学期，必修科目）

新カリキュラムの科目であり，角川が11名の学生を担当した。学生が興味関心を抱いている問いに対する答えを明らかにするために医学中央雑誌等の文献エンジンを活用して検索していく方法を

学ぶ。また，得られた文献から見えてきた問いの答えをまとめ，グループワークにてプレゼンテーションを行い，グループメンバーで互いの考えや意見をディスカッションし，問いに対する答えを追求していくためのより良い検索方法を考察していく演習を行った。

4）ジェンダー論（1単位：30時間，1年生後学期，選択科目）

成田が担当した。ジェンダーの概念を理解し，セクシュアリティを有する人間生活におけるさまざまな事象をジェンダーの視点から考察し，さらには，ジェンダーと健康や医療・看護との関係について考察することを目的に，講義・演習を展開した。48名の学生が受講終了し，ドメスティック・バイオレンスを考える演習には積極的な参加があった。

5）母性の心理と看護（1単位：15時間，3年生後学期，選択科目）

旧カリキュラム科目である。齋藤が担当し，4年次助産学関連科目受講生選考の際の成績評価科目であるが，受講を希望する学生は全員受講可能な科目として設定した。育児を取り巻く現代の環境と女性の心理，死産の親の心理，ドメスティック・バイオレンスについての講義も行なった。興味のある女性の置かれた状況やそのことから発生する心理状態について，学生がそれぞれテーマを決めレポートの作成を行なった。

6）助産学概論（1単位：15時間，3年次後学期，選択科目）

旧カリキュラム科目である。成田が担当し，上記「母性の心理と看護」と共に，4年次助産学関連科目受講生選考の際の成績評価科目であり，受講を希望する学生は全員受講可能な科目として設定した。概論として助産学や助産師の基礎概念を押さえると共に，母子医療の現状や課題を国際的な視点，日本国内の視点など，多様な視点から分析し，最終的により焦点化したテーマで各学生がレポートを作成した。

7）助産学Ⅰ（1単位：30時間），助産学Ⅱ（1単位：30時間），助産診断・技術学Ⅰ（2単位，60時間），助産診断技術学Ⅱ（2単位：60時間），助産管理（1単位：15時間）（4年次前期，選択科目）

旧カリキュラム科目である。3年次末に選考された10名の学生を対象に講義・演習を行った。成田・齋藤・矢野・角川・西岡が講義・演習を担当

した。

学ぶ学生にとって学びやすいような順序性を工夫し、また1週間単位程度で内容がまとまりを持つようにし、必要時小テストで知識の定着を図った。また自己学習を促進するために、課題レポートの作成を課した。分娩介助技術の演習では、演習室を学生に開放し、自己学習を奨励した。

助産学Ⅱに小児科医と助産学研究者、助産診断・技術学Ⅰに産婦人科医・臨床心理士・ラクターションコンサルタント、助産管理に看護管理（看護情報学）研究者に非常勤を依頼し、それぞれの領域の最新の話題について講義していただいた。

9) 助産学実習（5単位：225時間、4年次後学期、選択科目）

旧カリキュラム科目である。選考された学生10名を対象に展開した。主に分娩介助を学ぶ実習は済生会宇都宮病院、自治医科大学附属病院で行った。ハイリスク母子の助産については自治医科大学附属病院において、10名全員が実習し、ほぼ9例の分娩介助を行って実習を終了した。

助産所見学はままと赤ちゃんの家において行い、地域助産師の新生児訪問への同伴実習を行うと共に、地域助産師の育児支援活動に参加した。

10) 卒業研究

旧カリキュラム科目である。15名の学生を成田、齋藤、角川、西岡で担当し、成田が全体を統括した。新生児訪問、母乳育児支援、避妊や低用量ピル、NICU入院児の母親、羊水検査等のテーマで事例研究・文献研究を行った。助産学実習との絡みからデータ収集は夏休み期間となってしまったが、どの学生も熱心に行い、期限内に提出した。

11) 家族生活援助論（2単位：30時間、4年次前期開講）

旧カリキュラム科目である。成田と角川が母性看護学関連の単元を分担し、家族看護論等の理論および母性領域における事例を元に、家族生活援助についてのアセスメント、計画立案の演習を行った。

12) 国際看護活動論（1単位：15時間、4年次前期開講）

旧カリキュラム科目である。成田が国内に住む外国人の医療問題、途上国の母性領域で働く看護職の活動についての単元を分担し講義を行った。

3. 研究の概要

1) 成田が研究責任者として文部科学科研「避妊・性感染症予防カウンセリングの開発とウェブを用いたサポートシステムの構築」（平成19～21年度）を実施し、齋藤、角川、西岡が分担研究者として参加した。平成21年度は、平成20年度に実施した避妊・性感染症予防カウンセラー育成プログラムを、東京および大阪において実施した。

2) 成田は、広島赤十字看護大学新道幸恵教授の文部科学科研「看護系大学学士課程助産学生に有用な産婦ケア（分娩介助を含む）の教育方法の開発」（平成21～23年度）に研究分担者として、齋藤が研究協力者として「助産師教育における産婦のケア能力育成を目標にした教材の検討」を行う第3班に参加し調査研究を行った。

3) 看護学部看護系教員共同研究費の助成を受けて、角川が責任者となり「NICUに入院した子どもと母親のための母乳育児支援～NICUから地域につなぐ継続的な支援をめざして～」(共同研究者：成田、齋藤、西岡)を、齋藤が責任者となり「不妊女性の心理的サポート・プログラム考案の試み—第1報—」を、成田が責任者となり「へき地への派遣勤務が助産師のキャリア発達に与える影響」(共同研究者：角川)を、それぞれ附属病院NICU・産科病棟・産科外来・看護部の看護職との共同研究として申請し研究を行った。

4) 角川は、「祖父母教育に向けた孫育て手帳の開発と評価」に対して、文部科学省科学研究費補助金(若手研究B)を受けた。事前調査に基づき、これから孫育てを担っていく祖父母に対して、妊娠期から育児期にかけて必要な知識の提供と、祖父母としての役割や心構えを盛り込んだ手帳の作成を行った。また、調査で明らかとなった内容について、日本母性衛生学会学術集会で口頭発表を行った。

4. その他

1) 成田は、日本母性看護学会理事として戦略的プロジェクトを担当し、母性専門看護師教育課程の設立促進に向けての検討を行った。また学会から委嘱され看護系学会等保険連合の委員を担当した。齋藤は同学会戦略的プロジェクトの幹事として、成田を補佐した。

2) 成田は、平成21年度栃木県助産師再就業支援研修事業の委員として、助産師再就業研修の企

画・評価を行うと共に、栃木県看護協会が主催した助産師再就業研修において講師を務めた。

3) 成田は、平成21年度実習指導者講習会（主催：栃木県，実施機関：社団法人栃木県看護協会）で助産師教育課程の講義を担当した。

4) 成田は、日本助産師会の北関東地区理事として、北関東地区の取りまとめを担当した。また、受胎調節実地指導員講習会および受胎調節実地指導員ステップアップ研修会の講師を務めた。

5) 成田は、日本助産師会栃木県支部支部長として、助産師による子育て支援活動を取りまとめサポートした。

小児看護学

教授 中島登美子

1. スタッフの紹介

教授 中島登美子

准教授 井上みゆき（2009年4月1日就任,2010年3月31日退職）

資格：看護師

学歴：看護学修士（長野県看護大学大学院修士課程修了）。

職歴：群馬県立小児医療センター，新潟県立看護大学を経て就任。

講師 樋貝 繁香（2009年4月1日就任）

資格：看護師

学位：看護学博士（山梨大学大学院医学工学総合教育部ヒューマンヘルスケア学修了）。

職歴：独立行政法人国立病院機構 甲府病院の看護師，東京医療保健大学医療保健学部看護学科助手を経て就任。

助教 石田 寿子（2009年4月1日就任）

資格：看護師

学歴：浜松医科大学大学院医学系研究科修士課程（看護学専攻）修了

職歴：静岡県立こども病院看護師

助教 北村 露輝（2009年4月1日就任）

資格：看護師

学歴：2004年1月 PACE大学（米，ニューヨーク州）専攻心理学：Loss and grief Counseling 修士課程修了，2009年3月 北里大学大学院看護学研究科看護学専攻がん看護学分野修士課程修了

職歴：栃木県大田原赤十字病院，北里大学病院勤務を経て就任。

2. 教育の概要

小児看護では，子ども（出生から成人に達するまでの人）を総合的に理解し基礎的小児看護実践能力を育成することを目標に，下記の科目を担当した。

1) 小児看護学に関連する科目の教育概要

- (1)生涯発達看護学概論Ⅲ（1年次後学期2単位：必修）
- (2)小児実践看護学Ⅰ（2年次前学期1単位：必修）
- (3)小児実践看護学Ⅱ（2年次後学期1単位：必修）
- (4)小児看護学実習（3年次前学期2単位：必修）

2) 小児看護学以外の担当教育概要

- (1)看護基礎セミナー（1年次前学期1単位：必修）
- (2)文献講読セミナー（2年次前学期1単位：必修）
- (3)保健・看護研究セミナー（4年次前学期1単位：選択）
- (4)卒業研究（4年次後学期4単位：必修）

3. 研究の概要

1) 看護学部看護系教員共同研究費（平成21年度学内研究助成）では「根拠に基づく実践（Evidence Based Practice）～臨床へのエビデンス適用過程の解明」をテーマとして，臨床における看護実践にエビデンスを適用することについて検討を行った。

4. その他

1) 自治医科大学附属病院NICUで，退院後の育児相談や親同士の交流を目的に月1回行っている「すくすくクラブ」という親子教室の会誌（すくすくだより）の原稿執筆を行った。

2) 樋貝は，2008年9月に臨床指導者講習会（栃木県看護協会主催）で，「実習指導の実際」というテーマで講義を行った。また，臨床指導者講習会（栃木県看護協会主催）で小児グループの演習を担当した。

成人看護学

教授 中村 美鈴

1. スタッフの紹介

教授 中村 美鈴

講師 内海 香子

講師 崎田マユミ

講師 松本 幸枝（2009年4月1日就任，2010年3月31日退職）

資格：看護師，臨床工学技士，救命救急士，救急看護認定看護師，急性・重症患者看護専門看護師

学歴：東京都立公衆衛生看護学校，日本看護協会研修学校，放送大学教養学部，東京女子医科大学大学院看護学研究科（クリティカルケア看護学専攻）修了

職歴：東京女子医科大学病院看護師，東京女子医科大学看護学部非常勤講師，榊原記念病院看護師，日本看護協会研修学校救急看護学科非常勤講師を経て着任。

助教 段ノ上秀雄

助教 武正 泰子（2010年3月31日退職）

2. 教育の概要

1) 生涯発達看護学概論Ⅳ（成人期）

（新カリキュラム）

生涯発達看護学概論Ⅳ（成人期）は，1年次後学期，2単位30時間の必須科目である。学習目的は，生涯発達という観点から成人期にある対象を深く広く理解し，成人看護に有用な理論ならびに概念を学び，看護観を養うことである。成人期にある人の成長と発達，成人期にある人の発達課題，成人の生活，引き起こしやすい健康課題，さらに健康課題の多様性，成人の保健行動，健康行動理論，アンドラゴジー，セルフケア・セルフケアマネジメント，危機理論，ストレスコーピング，病みの軌跡，成人患者を取り巻く家族への支援等，成人期に有用な理論や概念，その実践への応用について講義を行った。中村が10時間，内海が8時間，崎田が6時間，松本が2時間の講義を担当した。

2) 成人実践看護学Ⅰ（新カリキュラム）

成人実践看護学Ⅰは，2年次前学期，2単位30時間の必須科目である。学習目的は，健康危機を引き起こしやすい機能障害をもつ成人とその家族に

看護を実践するための知識を学習することである。呼吸機能障害，循環機能障害，消化・吸収機能障害，身体防御機能障害，性・生殖機能障害をもつ成人・家族に各機能障害に伴う治療・検査が生命・生活へ及ぼす影響，各機能障害をもつ成人の治療・検査に伴う機能障害をもつ成人とその家族の把握方法と看護実践について理解するために，講義・演習を行った。

中村が10時間，崎田が6時間，松本が6時間，段ノ上が6時間担当した。評価は，定期試験，出席状況で行った。

3) 成人実践看護学Ⅱ（新カリキュラム）

成人実践看護学Ⅱは，2年次後学期，1単位30時間の必須科目である。学習目的は，健康危機を引き起こしやすい機能障害をもつ成人とその家族に看護を実践するために，必要な看護援助を学習することである。呼吸機能障害・循環機能障害をもつ成人の安楽な療養生活への支援，手術療法を受ける成人とその家族・生命の危機状況にある成人とその家族への支援について，成人と家族の把握とその方法ならびに必要な看護について講義・演習を行なった。これらの講義・演習を踏まえ，健康危機を引き起こしやすい機能障害をもつ成人とその家族に看護を実践するために，個人学習・グループ学習を取り入れて事例を用いた看護過程の演習を行なった。教材とした事例作成については，かかわる教員全員で検討を重ねた。臨床場面で遭遇することが多く，かつシンプルでわかりやすい事例で，国家試験出題基準も踏まえて，事例作成を心がけた。

中村が10時間，崎田が8時間，松本が2時間，段ノ上が2時間，武正が6時間，講義・演習を担当した。看護過程の演習10時間，手術療法を受ける成人の看護2時間，呼吸障害・循環障害をもつ成人の看護の演習4時間においては，内海を含め成人看護学教員全員で指導を行った。また，看護過程を除く各演習においては，1～3名の臨床助教の協力も得て，学生の指導にあたり効果的な学習につながった。評価は，定期試験，出席状況で行った。

4) 成人実践看護学Ⅲ（新カリキュラム）

成人実践看護学Ⅲは，2年次後学期，1単位15時間の必須科目である。学習目的は，長期的な療養生活が必要となる機能障害をもつ成人とその家族

に看護を実践するための必要な知識を学習することである。内分環境調節機能障害、脳・神経機能障害をもつ成人の看護について講義・演習を行った。内分環境調節機能障害をもつ成人の看護の講義6時間については内海が担当、演習2時間については、内海中心に成人看護学全教員で指導した。脳・神経機能障害をもつ成人の看護の講義6時間は、松本が担当した。評価は、定期試験、出席状況で行った。

5) 成人看護学実習Ⅱ（旧カリキュラム）

成人看護学実習Ⅱは、3年次前学期、3単位135時間の必須科目である。学習目的は、成人看護学Ⅰで経験した看護過程の展開能力を基盤に、既習の専門知識や文献等の知見を取り入れ、成人患者とその家族に必要な看護支援を考えるための能力を高めることであった。具体的な実習目的は、「機能障害をもつ成人とその家族の健康と幸せを目指した看護を創造するための基礎的能力を培う」とした。自治医科大学附属病院の外科系内科系病棟に1グループ6-7名の学生配置で1クール5病棟に分かれて実習を行った。方法は、内科的治療ならびに外科系治療を受ける成人とその家族を受け持ち、3週間継続して臨地実習を行った。実習中は、学生が主体的にテーマカンファレンス或いはケースカンファレンスを行い活発に意見交換し、受け持ち患者の看護について深く考える機会となった。また、担当教員は、看護専門職としての倫理観、探究的姿勢・態度を培うことを主眼に指導した。学生の臨地実習で成人患者とその家族の体験を実際に知り、信頼関係を丁寧に育みながら、その人の望む方向に向かって看護支援を実践できるよう取り組んでいた。

中村は実習全体の統括を行い、内海は4クール、崎田は4クール、松本は4クール、段ノ上は4クール、武正は4クールにおいて実習指導を行った。

6) フィールド実習（旧カリキュラム）

フィールド実習は、3年次後学期、3単位135時間の必須科目である。学習目的は、さまざまな健康レベルおよび生活の場（環境を含む）における看護の役割特性と課題について学習することである。

成人看護学領域では、外来看護を主に担当し、次の3点を実習目標とした。①地域で生活しなが

らさまざまな健康上の問題を持ち、外来を受診する人々への看護の役割を理解する、②救急外来を受診する人々とその家族への看護の役割を理解する、③外来を受診する人々とその家族が地域社会生活を営む上での看護の課題について考えるである。実習方法は、自治医科大学附属病院の総合案内から各科外来へ向かう初診患者、夜間救急外来を受診する患者・家族、透析センター、内科外来処置室、内視鏡室、外来点滴センターのいずれかで継続治療を受ける患者を担当し看護の役割について理解を深めた。また、看護の課題についてはグループワークを行い討議ならびに発表で、理解を深められるよう指導した。成人看護学の中村、内海、崎田、松本、段ノ上、武正が4週間実習を担当した。

7) 看護基礎セミナー

看護基礎セミナーは、1年次前学期、1単位30時間の選択科目である。学習目的は、ヒューマンケアの基本を理解することである。このセミナーは、教員3名が学生7-8名を担当し、グループワーク、文献学習、討議、見学（必要時）等の方法で、学生の関心のある個人や、個人の人生や体験が書かれた書籍を読み、自分の体験を振り返り、グループでのディスカッションを通して、「人間とは」、「人間の尊厳」、「人権擁護」、「ケアすること」などについて、学習を深めた。中村は長井助教（老年看護学）、内海は中島教授（小児看護学）、段ノ上は本田教授（がん看護学）、武正は半澤教授（精神看護学）、須藤助教（母性看護学）と共にセミナーを行った。

8) 文献講読セミナー（新カリキュラム）

文献講読セミナーは、2年次前学期、1単位30時間の必修科目である。学習目的は、看護にかかわる情報収集の基本的な方法を習得することである。学習目標は、看護に関する学生の興味や関心を明らかにするために文献・情報を収集する、図書館の効果的活用と文献検索ができるである。これらの目標達成のために、講義とグループ学習にて、学習指導を行った。成人看護学では崎田及び松本が、科目責任者永井教授（精神看護学）、渡邊教授（基礎科学関連）、他科目群講師とともに担当し、グループ学習を中心に指導を行った。

9) 保健・看護研究セミナー（旧カリキュラム）

保健・看護研究セミナーは、4年次前学期、1単位30時間の選択科目である。学習目的は、保健・看護に関する研究テーマの選び方、研究の進め方について学ぶことである。保健・看護研究セミナーは、4年次前学期、1単位30時間の選択科目である。学習目的は、保健・看護に関する研究テーマの選び方、研究の進め方について学ぶことである。このセミナーは、学生が各自関心のある看護に関する文献を検索する方法、ならびに論文をクリティークし、看護に関するテーマの多様性の理解、討議を通して看護学に対する視野を広げることを小グループ制（1グループ5-6名）で行った。グループワークは、個々の学生が自分の興味ある内容の論文を批判的に読み、その結果を各グループメンバーがプレゼンテーションを行い、その後討議を行うと言う形式で実施した。セミナーでは、中村、内海、崎田、松本、段ノ上、武正が16名の学生を担当した。

10) 看護研究（旧カリキュラム）

看護研究は、4年次後学期、4単位120時間の必須科目である。学習目的は、「看護の研究の方法や進め方から論文の作成までの過程を体験し、学ぶ」ことである。成人看護学領域では、この目的に「主体的に研究に取り組む姿勢をはぐくむ」という点を加え、指導した。担当は、中村、内海、崎田、松本、段ノ上、武正の5名で16名の学生を指導した。授業方法は、研究プロセスならびに学習の状況に応じて、ゼミ形式、個別指導、集団指導で行った。研究課題は、学生の関心を尊重し、丁寧に絞り込みを行った。卒業研究全体の進行過程としては、4月末にオリエンテーション、8月上旬に面接法に関するミニ講義、8月末に研究計画書の報告を自主ゼミ形式で行った。9月頃からデータ収集開始のための準備・研修・フィールドとの連絡調整を各担当教員が学生と共に実施した。10月以降からは、データの分析、考察、論文作成と、学生は比較的、順調に研究プロセスを体験できた。このように、研究の進行過程の要所でミニ講義を実施し、内容の理解と全体の調和を図った。学生は戸惑いながらも、主体的に研究を進めることができ、論理的に研究が進められるように一緒に考えを整理し、指導してもらったと実感していた。学生の教員に対する評価は、概ね良好であっ

た。成人看護学関連科目群で行った先行研究「看護系大学学士課程学生の卒業研究における困難の変遷と指導の工夫」の成果を実際に取り入れながら、卒業研究の指導を強化した。

3. 研究の概要

1) 成人看護学における看護学部看護系教員共同研究では、今年度から新たに「ペースメーカー植え込み術を受けた成人患者の日常生活上の困難」をテーマに、段ノ上を中心に研究に取り組んだ。

2) 中村は、文部科学省科学研究費補助金基盤(C)による研究課題「上部消化管がん患者の術後機能障害評価尺度（短縮版）の開発とその信頼性・妥当性の検討」（研究代表者：中村美鈴）を成果としてまとめ、英文誌に公表した。

3) 内海は、平成19年度～21年度 文部科学省科学研究費補助金基盤(C)研究課題「糖尿病患者セルフケア能力測定ツールを活用した看護援助プログラムの開発（研究代表者：清水安子）」について、共同研究者として参加し、データ収集、分析、専門家会議開催、認定看護師（糖尿病看護）への研究説明会資料作成など、研究を遂行した。

4. その他

1) 中村は、2009年6月に白鷗大学「救急医療と看護の役割」1コマ（2時間）講義を担当した。

2) 中村は、2009年8月に実践に活用できる看護過程」（栃木県看護協会主催）というテーマで臨床看護師50名を対象に12時間講義・演習を担当した。

3) 中村は、2009年度9月に臨床指導者講習会（栃木県看護協会主催）で、「実習指導の原理」で講義（3時間）、「実習指導の評価」講義・演習（6時間）を担当した。

4) 中村は、2009年度11月に認定看護管理者セカンドレベル教育研修会（栃木県看護協会主催）において、「人的資源活用論：継続教育」の講義・演習を芳賀日赤病院の久保・塩野谷とともに12時間担当した。

5) 中村は、2009年度11月に大阪大学大学院医学系研究科において、がん看護学援助論「手術療法を受けた患者・家族への専門的支援」の講義を3時間担当した。

6) 中村は、2009年度12月認定看護管理者セカンドレベル教育研修会（栃木県看護協会主催）にお

いて「根拠に基づいた看護実践」というテーマで講義（3時間）を担当した。

7）中村は、2009年度日本看護協会成人看護Ⅰ（急性期）学会委員と論文編集員長を担当した。

8）中村は、栃木病院附属看護学校でフィジカルアセスメントの概論、消化器系のフィジカルアセスメント講義・演習（4時間）、段ノ上は循環器系のフィジカルアセスメントの講義2時間を担当した。

9）中村は、2006年6月より日本ルーラルナーシング学会の評議員を務めている。

10）中村は、2008年度から日本ルーラルナーシング学会学会誌編集委員会の査読委員を務めている。

11）中村は、2009年度から日本看護教育学会学会誌の専任査読委員を務めている。

12）中村は、2008年度より日本クリティカルケア学会学会誌編集委員会の編集委員を務めている。

13）中村は、2006年9月より日本救急看護学会の評議員を務め、評議委員選出委員会、会則委員会の委員、専任査読委員を務めている。

14）中村は、2006年4月より日本保健医療社会学会の評議員、機関紙編集委員を務めている。

15）中村は、内海、崎田とともに、2009年度に独立行政法人国立病院機構栃木病院において、臨床看護師を対象に看護研究の指導を行なった。

16）中村は、2009年4月より日本ルーラルナーシング学会事務局副事務局長を務めている。また、内海、崎田、武正、段ノ上は、2009年4月より日本ルーラルナーシング学会事務局の中で、会員管理、ホームページ担当の役割を遂行した。

17）内海は、2009年8月に栃木県看護協会主催の看護トピック研修「慢性疾患患者の行動変容を促すアプローチ」にて、糖尿病患者を中心に慢性病をもつ患者の行動変容を促すために役立つ慢性病の捉え方、理論や概念の紹介、具体的な看護実践方法について講義を行った。

18）内海は、2008年10月より、2009年9月19日、9月20日に札幌で開催された日本糖尿病教育・看護学会 第14回学術集会（学術集会会長 川口洋子先生）企画・実行委員を務め、教育講演、シンポジウムの企画、演題査読を行った。

19）内海は、日本糖尿病教育・看護学会 第14回学術集会にて、シンポジウム「糖尿病教育・看護の未来に向けた人材育成」にて、西片久美子教授（日本赤十字豊田看護大学）と共に座長を務めた。

20）内海は、2003年度4月より、日本糖尿病教育・看護学会編集委員会専任査読者を務めている。

21）内海は、群馬県前橋市で8月に開催された第14回日本難病看護学会学術集会（学会長 牛久保美津子教授）にて実行委員を務めた。

老年看護学

教授 水戸美津子

1. スタッフの紹介

教授 水戸美津子

准教授 高木 初子

准教授 井上 映子

講師 川上 勝（2009年4月1日基礎看護学より異動）

助教 長井 栄子

助教 池下 麻美

2. 教育の概要

老年看護学では、加齢に伴う心身機能の変化と高齢者の発達課題・健康特性及び健康障害を理解し、それに伴って生じる生活障害に関する看護の方法について学び、広義としての老年看護技術を取得することを目指している。

1) 老年看護学に関する教育概要

(1) 老年実践看護学Ⅰ（2年次前学期1単位：必修）

高齢者の健康増進と健康の維持向上をめざしたアプローチについて講義した。

（担当：井上、高木、川上）

(2) 老年看護学実習（3年次前学期2単位：必修）

附属病院および介護老人保健施設（ユニットケア）・グループホームにおいて、疾病や障害をもつ高齢者に対する看護を実践するための基礎知識・技術について学ぶことを学習目的とする。2週間の実習のうち前半の3日間は施設で、後半は附属病院で実習を行った（担当：全教員）。

(3) 生涯発達看護学概論Ⅴ（老年期）（1年次後学期2単位：必修）

老年看護学の概念・対象及び老年看護学の役割を学ぶことを学習目的とし、高齢者理解に重点を置き、演習を取り入れを行った。また、病院での看護の実際が理解できるよう、関道子臨床講師による講義を組み込んだ。

（担当：高木、川上、長井、池下）

(4) 老年実践看護学Ⅱ（2年次後学期2単位：必修）

加齢のプロセスにより生じる様々な健康段階を理解し、生活・療養の場に応じた高齢者のエンパワメントを生み出す看護援助方法について学ぶことを学習目的とし、高齢者疑似体験、看護過程や倫理的課題の演習等を取り入れを行った。また、臨床の場で実際に行っているケア内容については、

井上佐代子臨床講師、太田信子臨床講師、境野博子臨床講師、野沢博子臨床講師による講義を組み込んだ（担当：高木、井上、川上、長井、池下）。

2) 老年看護学以外の担当教育概要

(1) 看護基礎セミナー（1年次前学期1単位：必修）

ヒューマンケアの基本を理解することを学習目的とし、学生は人間の生活および人生に関する体験が記述された書籍を選定、熟読し、プレゼンテーション、グループディスカッションおよびレポート作成を行った。

高木は井上みゆき准教授と6名の学生、井上は濱田助教と6名の学生、川上は小原准教授と6名の学生、長井は中村教授と7名の学生、池下は鈴木准教授と6名の学生を担当した。

(2) 家族生活援助論（4年次前学期2単位：必修）

高木は要介護高齢者と介護する家族の現状と看護の課題、井上は高齢者介護に関する看護の役割・機能について各1コマを担当した。

(3) 保健・看護研究セミナー（4年次前学期1単位：選択）

16名の学生に対し、先行研究の文献検討、研究計画書の作成に関連した指導を行った。

（担当：全教員）

(4) 卒業研究（4年次後学期4単位：必修）

16名一人ひとりが興味・関心のあるテーマで研究を進め、随時個別及びグループ討論を交えながら指導した。中間発表会および卒業研究発表会を開催したほか、卒業研究論文集を作成した。高木は4名、井上は4名、川上は4名、長井は2名、池下は2名を担当し、水戸は統括指導をした。

(5) 日常生活援助実習（2年次後学期2単位：必修）

長井は介護老人保健施設ひまわり荘集の舎で6名の学生、池下は附属病院8B（眼科・総合診療部）病棟で7名の学生を担当した。

(6) フィールド実習（3年次後学期3単位：必修）

在宅看護フィールド実習を担当した。高木、井上は「わくわく訪問看護ステーションおやま」で各4名の学生、川上は「とちぎ訪問看護ステーションみぶ」で12名の学生、長井は「訪問看護ステーションたんぽぽ」で10名の学生、池下は「JAマロニエ訪問看護ステーション石橋」で11名の学生を担当した。

3. 研究の概要

1) 平成21年度看護学部看護系教員共同研究費

「看護業務の相対的評価に関する研究－高齢者に関わる看護業務の分析から－」を課題として、水戸、川上、長井、池下が附属病院看護師らと研究に取り組んだ。

2) 高木は、「介護老人保険施設入所者高齢者の「発話」と摂食・嚥下機能の関連に関する実証的研究」に取り組んだ（平成21-23年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））：主任研究員井上映子）。

3) 井上は、平成21-23年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））を受け、「介護老人保険施設入所高齢者の「発話」と摂食・嚥下機能の関連に関する実証的研究」に取り組み、データ分析を行った。

また、看護学部看護系教員共同研究費の助成を受け、附属病院看護師らとともに「大腸がん及び乳がん患者の地域連携パス作成に関する実態調査」に取り組んだ。

4) 川上は、平成19-21年度文部科学省科学研究費補助金（若手研究（B））を受け、「臥床時体動測定による睡眠深度判定法の開発－睡眠ケアと安全対策の確立を目指して」を課題とした研究を行った。さらに、「生体情報計測用パネル及びそれを用いた生体情報計測システム」（特願2006-335869）について審査請求を行った。

また、看護学部看護系教員共同研究費の助成を受け、附属病院看護師らとともに「微弱無線タグを用いた看護師の所在確認システムの試験運用」と、臨床研究「離床を知らせる床敷きセンサーの作動実態の把握～高齢の転倒ハイリスク患者を対象に～」(第臨B09-63)に取り組んだ。

5) 長井は、平成21-22年度文部科学省科学研究費補助金（若手研究（B））を受け、「ユニットケア実施施設における認知症高齢者への安全なケア提供に関する研究」を課題とした研究を行った。

また、看護学部共同研究費による研究として、附属病院の皮膚排泄ケア認定看護師らと調査研究に取り組み、その成果を「集中治療部における褥瘡ケアに関する看護師の自己評価」として自治医科大学看護学ジャーナルに発表した。

6) 池下は、看護学部看護系教員共同研究費による研究として、附属病院の皮膚排泄ケア認定看護師らと調査研究に取り組み、その成果を「皮膚・排泄ケア認定看護師が推奨している褥瘡予防・治療ケア用品の使用状況の検討」として自治医科大

学看護学ジャーナルに発表した。

また、平成20年度栃木県実習指導者講習会委員会のメンバーとともに、「栃木県実習指導者講習会3年間の評価」に取り組み、研究分担者として日本看護協会学術集会（看護管理）に研究結果を発表した。

4. その他

1) 水戸

(1) 栃木県看護協会主催研修会の講師

・ 栃木訪問看護師養成講習会：講師

(2) 患者会活動への支援

・ 栃木県認知症の人と介護者の会：顧問

(3) 自治体事業への協力

・ 埼玉県教育委員会主催高等学校10年経験者研修会：講師

・ 栃木県鹿沼市高齢者福祉課主催講演会：講師

(4) その他

日本福祉工学会理事、日本看護学教育学会評議員、日本ルーラルナースング学会監事、M-GTA研究会会長、茨城県看護教育財団理事、社団法人栃木県看護協会理事、第10回日本私立看護系大学協議会セミナー大会長、第28回日本社会精神医学会総会 シンポジウム座長、第13回日本福祉工学会座長

2) 高木

(1) 看護協会主催の研修会の講師

2009年9月、栃木県看護協会主催の実習指導者講習会において「実習指導の原理」について講義した。

(2) 病院などの講師

小山市教育委員会開催の生涯学習の一環として、2009年10月に「食習慣と生活習慣病」について講義した。

3) 井上

(1) 看護協会主催の研修会の講師

2009年9月、栃木県看護協会主催の実習指導者講習会において、「実習指導の評価」について講義した。

(2) 東京医科歯科大学医学部保健衛生学科非常勤講師

2009年6月、基礎看護学において「衣生活」の講義、演習を行った。

4) 川上

(1) 看護協会主催の研修会の講師

2009年9月、栃木県看護協会主催の実習指導者講習会において「実習指導の原理」について講義した。

(2)非常勤講師

2009年12月、独立行政法人国立病院機構 栃木病院附属看護学校における「フィジカルアセスメント」の講義を担当した。

(3)第8回自治医科大学シンポジウム

平成20年度看護学部看護系教員共同研究費の助成を受け取り組んだ「神経内科病棟における転倒・転落事故の予防策の確立を目指した取り組み」の成果を発表した。

5) 長井

2009年9月14～19日、平成21-22年度文部科学省科学研究費補助金（若手研究（B））の課題である「ユニットケア実施施設における認知症高齢者への安全なケア提供に関する研究」に関連して、先進的取り組みを行っているスウェーデンの高齢者施設6施設を訪問し、調査を行った。

大学院看護学研究科 教育の概要

共通科目

本田 芳香

大学院看護学研究科 教育の概要

大学院看護学研究科の共通科目として、「地域医療論」「看護管理・政策論」「看護倫理」「看護実践研究論」「看護継続教育論」「コンサルテーション論」「地域調査法」「フィジカルアセスメント特論」の計8科目各2単位を設置している。全て選択科目として前期及び後期科目として開講している。全ての共通科目は、1・2年次の配当になっており、いずれの年次も履修することができる。この中で「看護管理・政策論」「看護倫理」「看護実践研究論」「看護継続教育論」「コンサルテーション論」の5科目（10単位）は、専門看護師教育課程の共通科目として平成20年度に認定されている。上記より選択し4科目（8単位）以上取得することが必要要件となっている。母性看護学，クリティカルケア看護学，精神看護学，小児看護学の4つの専攻教育課程は、専門看護師教育課程として認定されている。また、平成22年2月にがん看護専門看護師教育課程の認定をうけた。

共通科目の教育概要として、「地域医療論」は、地域に根差した医療や保健を展開する方法を理解することを目標に、地域ニーズの捉え方及びその展開方法、地域の保健医療施設の有機的連携等の実際等を教授した。「看護管理・政策論」は、保健・医療・福祉システムにおいて有効に機能する看護活動管理の組織化の方法並びに看護制度、政策的働きかけについて学修することを目標に、保健医療福祉システムの中で質の高いケアを提供するための機能・役割や活動方法等を教授した。「看護倫理」は、看護場面における複雑な判断を要する倫理的課題として、看護専門職としての立場から果たすべき機能について学修することを目標に、倫理的葛藤や課題並びに倫理的調整活動に必要な知識を教授した。「看護実践研究論」は、看護分野における実践研究の特徴を知り、その実際について学修することを目標に、専門的看護の質の向上に寄与する看護研究をすすめていく上での各種研究法の具体的展開について教授した。「看護継続教育論」は、生涯学習の視点から看護継続教育の現状を理解し、看護の継続教育に関する知識と技術について学修することを目標に、看護ケアの質を高めるために必要な上級看護職者が行う

教育的働きかけ、教育環境づくり等、看護の継続教育に関する知識と技術を教授した。「コンサルテーション論」は、コンサルテーションに関する理論と倫理的側面を含むコンサルテーションをめぐる問題や課題について検討することを目標に、上級看護職が必要とするコンサルテーション技能と役割について教授した。「地域調査法」は、地域における健康問題や健康ニーズを把握するための調査方法並びに分析方法等を学修することを目標に、地域において効果的かつ効率的な看護活動・保健活動やその管理的活動を展開する上で必要な地域の健康問題やニーズを把握するための質的・量的調査法を教授した。「フィジカルアセスメント特論」は、身体の急激な変調とその原因・要因となる病態を捉え、治療ならびに看護援助に生かすためのアセスメントを実例を通して学修することを目標に、特に救急、慢性疾患の治療、在宅患者における病態評価に重点をおいて教授した。

母子看護学領域「小児看護学」

教授 中島登美子

1. スタッフの紹介

教 授 中島登美子

准教授 井上みゆき（2009年4月1日併任，2010年3月31日退職）

講 師 樋貝 繁香（2009年9月1日併任）

2. 教育の概要

小児看護学は、さまざまな健康状況にある子どもがよりよく育つことを目的に、子どもとその家族への看護の現状と将来的な展望を踏まえ、専門的な知識や研究課題を探究するとともに、高度な看護実践能力を育み、小児看護の充実と発展に寄与する人材の育成を教育目標としている。

開設4年目を迎えた本年度は、「小児看護学講義Ⅲ」「小児看護学演習Ⅱ」「小児看護学演習Ⅲ」を開講した。これらは、高度医療および地域医療の場における演習を通して高度な看護実践能力について理解すること、および小児看護における研究課題を明確にすることを目標としている。

外来講師として、小児専門看護師である萩原綾子氏（神奈川県立こども医療センター）に高度看護実践についての講義を依頼した。

母子看護学領域「母性看護学」

教授 成田 伸

1. スタッフの紹介

教授 成田 伸

准教授 齋藤 良子（2009年4月1日併任）

講師 矢野 美紀（2009年12月31日退職）

講師 角川 志穂（2009年4月1日併任）

2. 教育の概要

平成21年度母子看護学領域母性看護学科目には2名が入学し、平成20年度入学生2名の計4名の院生に対して教育を行った。平成21年度入学生に対しては、前期に母性看護学講義Ⅰ、講義Ⅱ、母性看護学演習Ⅰ、演習Ⅱを開講し、後期には母性看護学講義Ⅲ、母性看護学演習Ⅲを開講した。平成20年度入学生には前期に母性看護専門看護実習を、後期に母性看護学特別研究を開講した。母性看護専門看護実習においては附属病院総合周産期母子医療センターおよび日光市民病院において実習を行い実習目標を達成した。また、母性看護学特別研究として研究を実施し、修士論文を提出した。

院生の状況を配慮しつつ、院生はティーチングアシスタントとして、母性看護学・助産学の講義・演習・実習・卒業研究等を補助し、教育方法について学んだ。

1) 母性看護学講義Ⅰ、講義Ⅱ、講義Ⅲ

講義Ⅰと講義Ⅱは成田、齋藤、矢野、角川が担当し、各ライフステージにある女性ならびに周産期にある母子とその家族の状況を理解し支援するための方法論について教授した。社会薬学を専門とする非常勤講師の松本佳代子氏が女性総合医療の動向と最新の薬物療法および在住しているUSAの女性医療の現状について教授した。また講義Ⅲは主に成田が担当し、周産期にある母子とその家族の状況を理解し支援を提供するための方法論、多様な健康状態にある母子や家族への支援に必要な各専門職の役割分担と連携・社会システム構築について教授した。講義Ⅲの一部は、福井トシ子氏（杏林大学付属病院）が担当し、杏林大学付属病院において臨床講義として実施した。

2) 母性看護学演習Ⅰ、演習Ⅱ、演習Ⅲ

母性看護学演習Ⅰと演習Ⅱは成田、齋藤、角川

が担当し、演習Ⅲは成田が担当した。母子とその家族の個々の健康／生活状況の包括的な査定・ケア計画立案・実施方法や周産期の母子に特有な倫理的課題の検討方法と母性看護における相談・教育・調整に関わる理論を検討し、母性看護の改善・改革の方策について教授し、また事例等を用いて演習を展開した。非常勤講師の臨床現場での研修を含んだ臨床講義として開講した。前期の演習Ⅰで武藤香子氏（ままと赤ちゃんの家、キッズシェルター）、後期には演習Ⅲで長坂桂子氏（NTT東日本関東病院）、浜崎京子氏（中央クリニック）、福井トシ子氏（杏林大学付属病院）において臨床講義および臨床研修を実施し学びを深めた。また坂上明子氏（埼玉県立大学）に「高度先進医療を受ける女性と家族の理解とその支援」を、大月恵理子氏（埼玉県立大学）に「周産期救急時の医療支援」を講義していただいた。

3) 母性看護学特別研究および修士論文の作成

平成20年度入学生の2名に対して開講した。テーマはそれぞれ「Late Preterm児を出産した母親の授乳と育児に関連する困難と乗り越えるのに影響した要因」「女性にとっての性と生殖に関わる体験－第2子以降の出産時点での振り返りから－」であり、修士論文としてまとめた。

4) 母性看護専門看護実習の事前研修

平成21年度入学生の2名に対して平成22年度に予定されている母性看護専門看護実習の事前研修として実習予定施設とその周辺地域の概要を知ることが目的に、自治医科大学附属病院における事前研修、また日光市を中心としたへき地視察および日光市民病院・奥日光診療所・日光市保健センターにおけるオリエンテーションおよび事前研修として日光市民病院での研修を実施した。

健康危機看護学領域 「クリティカルケア看護学」

教授 中村 美鈴

1. スタッフの紹介

教授 中村 美鈴

講師 内海 香子

講師 崎田マユミ

講師 松本 幸枝（2009年4月1日併任，2010年3月31日退職）

2. 教育の概要

平成21年度は，クリティカルケア看護学講義Ⅰ，クリティカルケア看護学講義Ⅱ，クリティカルケア看護学講義Ⅲ，クリティカルケア看護学演習Ⅰ，クリティカルケア看護学演習Ⅱ，クリティカルケア看護学演習Ⅲ，クリティカル看護学特別演習，クリティカル看護学特別演習Ⅰ（旧カリキュラムにおける実習），健康危機看護学課題研究の9科目を開講した。

1) クリティカルケア看護学講義Ⅰ

クリティカルケア看護学講義Ⅰは，前期，2単位30時間の必須科目である。他領域の院生も履修可能である。授業目標は，健康危機に関する人間の反応や立ち直りの過程にある人間の体験世界を哲学的に考察する諸理論を学修する。また，クリティカルな状況にある成人を心身統一体として捉え，衝撃的な体験に際しての人間の反応や立ち直りの状況を理解し，成人とその家族に必要な専門的支援方法と看護の課題について学修することであった。

具体的内容としては，クリティカルな状況にある成人（小児，高齢者を含む）とその家族に関する看護の動向と課題，クリティカルな状況にある人間の存在意味や体験世界を考察するための哲学的な諸理論，危機的な状況にある人間の反応や立ち直りの過程を把握するための諸理論，危機的な状況にある患者の家族に関する諸理論ならびに支援方法，危機的な状況にある患者とその家族への看護の専門性・独自性，クリティカルな状況から心身の回復過程にある患者と家族の状況に応じた専門的支援等についてであった。授業は，講義，討議，プレゼンテーション形式で行った。また，その都度，必要な文献および最新の論文を提示した。

評価は，授業への出席状況，討議内容，課題レポートで行った。

中村が14時間，内海が4時間，崎田が4時間，田畑（非常勤）が各8時間の講義を担当した。

2) クリティカルケア看護学講義Ⅱ

クリティカルケア看護学講義Ⅱは，前期，2単位30時間の必須科目である。授業目標は，危機的な状況/クリティカルな状況にある成人を総合的に捉え，衝撃的な体験に際しての人間の反応や立ち直りの状況を理解し，成人とその家族に必要な専門的支援方法と看護の課題について学修することであった。

具体的内容としては，危機的な状況にある人間の反応や立ち直りの過程を把握するための諸理論として，危機理論とストレスコーピングの理解，それぞれの理論を活用した危機的な状況にある患者とその家族への支援，危機的な状況にあるせん妄患者とその家族員を把握する方法と支援，危機的な状況から脱出し心身の回復過程にある患者とその家族へのアプローチ，心身の回復過程にある患者と家族の状況に応じた専門的支援，危機的な状況にある患者とその家族の総合理解，危機的な状況にある患者とその家族に対する専門看護師の役割に関して理解を深め，クリティカルケアへの応用について討議を行った。授業は，講義，討議，プレゼンテーション形式で行った。また，その都度，必要な文献および最新の論文を提示した。評価は，授業への出席状況，討議内容，課題レポートで行った。

中村が8時間，内海が6時間，崎田が4時間，松本が4時間，綿貫（非常勤）4時間，中村恵子（非常勤）が4時間の講義を担当した。

3) クリティカルケア看護学講義Ⅲ

クリティカル看護学講義Ⅲは，後期，2単位30時間の必須科目である。授業目標は，健康危機状態時のアセスメントの基礎となる高度な病態生理の知識を学修する。また，クリティカルケア・集中治療を必要とする患者の健康危機状況のアセスメントに必要な理論と高度な知識を学修することであった。

具体的内容としては，クリティカルケアの基礎となる呼吸循環動態について，成人を中心に学修し，小児ならびに高齢者の特徴を踏まえ，クリテ

イカルな状態にある成人の病態、生理学的変化について把握するために、フィジカルアセスメントを習得できるよう進めた。また、クリティカルな状態にある成人とその家族の生活行動、機能回復の状況を把握するための方法を知るために、治療環境と複雑で困難な生活状況についての理解、取り巻く生活環境を把握し、状況に応じた専門的支援と看護の課題、変化する時期を把握し、状況に応じた専門的支援と看護の課題について、講義、討議、プレゼンテーション形式で行った。また、その都度、必要な文献および最新の論文を提示した。評価は、授業への出席状況、討議内容、課題レポートで行った。

中村が10時間、内海が4時間、松本が4時間、布宮（非常勤）4時間、平林・多賀・和田・鈴川（非常勤）が各2時間の講義を担当した。

4) クリティカルケア看護学演習Ⅰ

クリティカルケア看護学演習Ⅰは、前期、2単位60時間の必須科目である。授業目標は、クリティカルな状況にある個人を心身統一として捉え、医学的治療並びに療養生活等の全療養過程における個人の選択・意思決定を支援し、療養生活を支える看護援助について、理論を活用し、文献並びに事例を用いて演習する。選択や意思決定の支援に伴う複雑な問題と倫理的支援、健康危機にある成人に関わる保健医療福祉関係者との連携について学修することであった。

クリティカルな状況にある個人を心身統一として捉え、医学的治療を受ける患者・家族の選択・意思決定を支援し、療養生活を支える看護について、理論を活用し学修する。また、療養生活を支える福祉制度について、理論を活用し学修する。クリティカルな状況にあるがん患者の治療および生活に関わる選択・意思決定を支援し、療養生活を支援する看護援助について、理論を活用し学修する。また、がんの遺伝子診断／治療と倫理ならびに現状の課題について学修する。授業の半分は履修内容を踏まえ、各自が関心のあるテーマに合わせて文献を概観し、クリティカルケアにおける実践的知識に基づいた専門的援助、専門看護師の課題を検討する。

授業は、事例並びに文献を用いてその現状と課題を学修できるように、講義、討議、プレゼンテーション形式で行った。また、その都度、必要な

文献および最新の論文を提示した。評価は、授業への出席状況、討議内容、課題レポートで行った。

中村が36時間、崎田が8時間、松本が8時間、牛込（非常勤）が8時間の講義・演習を担当した。

5) クリティカルケア看護学演習Ⅱ

クリティカルケア看護学演習Ⅱは、前期、2単位60時間の必須科目である。授業目標は、クリティカルな状況にある患者と家族の療養生活を支える看護と福祉制度について、理論を活用し学修する。また、クリティカルな状況／健康危機にある成人に関わる保健医療福祉関係者との連携について学修する。さらに、がんの遺伝子診断／治療と倫理ならびに現状の課題について学修することであった。

具体的内容は、クリティカルな状況にある患者と家族の総合的理解を深めるために、療養生活を支える福祉制度と活用できる社会資源、治療・療養経過に起こる健康危機の理解、治療の選択と意思決定を支える看護、慢性病の治療・療養経過に起こる健康危機の理解、治療の選択と意思決定を支える看護、セルフケア能力を高める看護、医療チームにおける治療管理と連携・協働、CNSの専門的援助と実際の活動内容、がんの遺伝子診断／治療と倫理ならびに現状の課題について学修した。

授業は、事例並びに文献を用いてその現状と課題を学修できるように、講義、討議、プレゼンテーション形式で行った。また、その都度、必要な文献および最新の論文を提示した。評価は、授業への出席状況、討議内容、課題レポートで行った。

中村が24時間、内海が8時間、崎田が8時間、松本が16時間、藤井(非常勤)が4時間の講義・演習を担当した。

6) クリティカルケア看護学演習Ⅲ

クリティカルケア看護学演習Ⅲは、後期、2単位60時間の必須科目である。授業目標は、クリティカルな状況における痛みに関する人間の反応と治療ならびに緩和ケアに関する理論と方法を学修することであった。

具体的内容は、クリティカルな状況の患者における痛みの病態生理、痛み治療の現状と課題、患者および家族の心身の苦痛とその緩和を学修した。具体的内容は、痛みの病態生理、痛み治療の現状と課題、クリティカルな状況で痛み・苦痛を抱え

る成人・家族の理解と看護援助、痛みの理解・把握、痛み・苦痛緩和に関わる原理・理論、クリティカルな状況における成人・家族の痛み・苦痛の特徴、クリティカルな状況における成人の痛み測定ツール、クリティカルな状況における成人の痛み・苦痛アセスメント、痛み・苦痛の緩和をはかる看護援助として薬理学的介入と非薬理学的介入、痛み・苦痛の緩和をはかる看護援助の評価、痛み・苦痛の緩和をはかる看護援助の評価、クリティカルな状況で痛み・苦痛を抱える成人および家族を理解し支援するための理論と方法、専門看護師の役割と機能等である。授業は、事例並びに文献を用いてその現状と課題を学修できるように、講義、討議、プレゼンテーション形式で行った。また、その都度、必要な文献および最新の論文を提示した。評価は、授業への出席状況、討議内容、課題レポートで行った。

中村が36時間、内海が4時間、松本が8時間、新貝（非常勤）8時間、瀬尾・井上（非常勤）が各2時間の講義・演習を担当した。

7) クリティカルケア看護学特別演習

クリティカル看護学特別演習は、後期、4単位120時間の選択科目である。授業目標は、クリティカルケア看護に関する研究課題の明確化、研究課題に基づいた研究の進め方、研究成果の実践への応用について学修する。また、クリティカルケア領域における実践上の課題を見出し、専門的な援助・技術の向上のために改善・開拓する方法を修得することであった。

具体的内容は、看護研究の重要性とその意義、看護研究の概要、看護研究のプロセスと科学的方法、研究課題に関して研究課題の明確化、および絞り込みの過程、前提条件、文献検討ならびに文献検討の意義、ならびにその方法、概念枠組みとモデル、理論的文脈での研究、仮説の組み立て、研究デザイン、研究設計の原理、標本抽出、各種研究方法；実験研究、質的研究、量的研究、研究データの分析、推測統計、研究計画書の作成、研究結果の応用、クリティカルケアにおける関心のあるテーマに関する文献の概観、各自の研究課題に関連した文献検討の発表であった。これらの学修課題を通して、クリティカルな状況にある患者と家族に関する実践研究課題の明確化につながるように授業を展開した。

評価は、授業への出席状況、討議内容、課題レポートで行った。

中村が44時間、内海が12時間、崎田が18時間、松本が12時間、ゼミ形式36時間で講義・演習を担当した。

8) クリティカルケア専門看護実習

（成人看護学特別演習Ⅰ 旧カリキュラム）

クリティカルケア専門看護実習は、後期、4単位180時間の必須科目である。授業目標は、健康危機状態にある成人と家族に対する救急医療、集中治療、高度医療の特性と課題、高度な看護実践、調整・教育・コンサルテーション・倫理的調整の必要性とあり方、専門看護師の役割について学修することであった。実習の概要は、クリティカルな状態にある成人と家族のケアを行う部署にて実習し、複雑多岐に渡る病態、ならびに治療への反応に関する高度なアセスメントに基づく看護実践を行う。また、外来ならびに病棟等において高度な治療を受けて生活する患者への専門的看護実践を行う。さらに、医療施設内あるいは地域で健康危機にある成人のケアにかかわる家族、看護職、他職種などに対しての調整・教育・コンサルテーション・倫理的調整の機能を実習する。クリティカルケアにおける看護学実践研究の課題を見出すことである。

実習施設は、自治医科大学附属病院のICU、CCU、手術室、内分泌病棟、透析センター、他関連部署であった。今回の実習生の関心は、糖尿病患者の健康危機状況にあった。実習方法は、実習生の関心領域において、高度の実践知識・スキルの修得、専門看護師の役割・機能などの内容を網羅した実習計画を熟考の上、実習要項に基づき計画書を作成し、実習先で事前研修、実習を4週間以上にわたり行った。11月から事前研修に取り組み、実習期間は1月上旬から2月中旬となった。

実習指導者は、担当教員として中村美鈴、内海香子の2名と自治医科大学附属病院における各実習部署の師長、およびクリティカルケアCNS相当の看護職で指導した。評価は、実習目標達成度とし、実践状況、実習記録、ケースレポート、課題レポート、実習へ出席状況で行い、概ね目標には達成できていた。

9) 健康危機看護学課題研究

健康危機看護学課題研究は、4単位120時間の必須科目である。授業目標は、クリティカルケア看護学、精神看護学の学修ならびに看護実践を通して見出された研究課題について研究を行い、研究指導をうけて修士論文を作成することであった。該当する院生は今回は1名であった。大学院生の主体的な取り組みを前提に、学内及び研究フィールドにおいて見出された研究課題に関する直接的助言・指導及び修士論文の作成について、状況に応じて、個別または集団で指導をおこなった。また、クリティカルケア看護学では、主にクリティカルケアの専門性・独自性に関する研究、クリティカルな状況にある人々への生活に関する研究、クリティカルケアが必要とされる看護実践への貢献に関する研究をテーマとしており、当該年度の大学院生の研究課題は「山間へき地中核病院において救急外来を受診し入院となった患者の家族の困難」であった。データ分析、得られた結果の解釈、考察に多くの指導を要したが、実践に寄与できる価値ある修士論文を完成できた。研究指導教員として中村が、研究指導補助教員として、崎田が担当した。

健康危機看護学領域「精神看護学」

教授 半澤 節子

1. スタッフの紹介

教 授 永井 優子

教 授 半澤 節子

講 師 野崎 章子

2. 教育の概要

実践看護学分野健康危機看護学領域の精神看護学の科目を主科目群として選択した大学院生（1名）に対して、研究指導は半澤が担当教員となり、精神看護学主科目群の授業科目は永井と半澤が担当した。院生は、後期の「特別演習」において研究計画書を作成し、11月には研究構想発表会において研究テーマに関する準備状況について発表した。

がん看護学領域「がん看護学」

教授 本田 芳香

1. スタッフの紹介

教授 本田 芳香

准教授 小原 泉（2009年4月1日就任）

＜取得資格＞看護師，保健師

＜学歴＞千葉大学看護学部卒業（看護学士），北里大学大学院看護学研究科修了（修士・看護学），東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科修了（博士・看護学）

＜職歴＞東京慈恵会医科大学附属第三病院（看護師），国立がんセンター東病院（看護師）

2. 教育の概要

がん看護学領域は，平成19年度に文部科学省の「がんプロフェッショナル養成プラン」において，本学の取り組みである「全人的ながん医療の実践者養成」が採択された。本学大学院看護学研究科において，平成20年度より高度専門看護職に求められる看護実践能力の育成強化を教育課程の特徴とする実践看護分野に，がんの急性期から終末期に至る様々な健康状態にある患者とその家族に対して，看護実践を提供するための実践理論とその方法を系統的に教授するがん看護学領域を開講した。この領域はがん看護学のみで，がん看護における専門的知識や研究課題を探究するとともに，がん患者とその家族に生じる複雑な状況を的確に判断し，苦痛や苦悩を緩和し，生活の質の向上を目指した高度な看護実践のできるがん看護のスペシャリストを育成する。

1) がん看護学に関する教育概要

平成21年度は3名の学生を受け入れた。3名とも標準コースにて講義・演習を開始した。

【がん看護学講義Ⅰ】（1年次前期科目）2単位

がんの疫学，病態生理，診断，治療法に関する最新知見を理解する。がん患者およびその家族に生じる複雑な健康課題を包括的にアセスメントする視点を修得し，最新のケア実践への適応を探究することを授業目標とした。がん患者とその家族に生じる複雑な健康課題に対して，がんの疫学，病態，診断，治療法などの最新知見から包括的なアセスメントを行う視点を，学生によるプレゼンテーション，討議を通して最新のケア実践へ繋げ

る方策を考察した。評価方法は，プレゼンテーション，討議及び課題レポートで評価をおこなった。本田，小原，非常勤講師8名が担当した。

【がん看護学講義Ⅱ】（1年次前期科目）2単位

がん患者とその家族が抱える複雑な健康問題を理解する基盤となる概念や理論を学び，看護モデルへの適応を探究することを授業目標とした。がん患者とその家族を理解するための基盤となる概念枠組みを理解するため，国内外の文献と討議をもとに，がん看護領域における基本的概念について考究した。またがん看護領域に関連するストレスコーピング理論，ニューマン理論，危機理論などの諸理論の理解についてプレゼンテーション，討議をし，それをもとにがん看護における本理論の適応を考究した。評価方法は，プレゼンテーション，討議及び課題レポートで評価をおこなった。本田，小原，非常勤講師2名が担当した。

【がん看護学演習Ⅰ】（1年次前期科目）2単位

がん患者とその家族が抱える複雑な健康問題を身体的，心理的，社会的，スピリチュアルな側面から包括的にアセスメントする方法を学修することを授業目標とした。がん患者とその家族の健康問題を身体的，精神的，社会的，スピリチュアルな視点から包括的にアセスメントするための観察スキルの習得や，専門的コミュニケーションスキルを習得するため，3回（2コマずつ）シリーズで行った。また各期（急性期～終末期に至る）におけるがん患者とその家族の症状アセスメントを実践事例の分析を通して系統的に習得する方法を教授した。評価方法は，プレゼンテーション，討議及び課題レポートで評価をおこなった。本田，小原，非常勤講師1名が担当した。

【がん看護学演習Ⅱ】（1年次前期科目）2単位

がん看護の基盤となる概念や理論，および緩和医療の知識を活用した事例分析や看護介入モデルの展開を通して，がん患者とその家族が抱える複雑な健康問題に対する自己の看護観の洞察や，専門的な看護実践の介入方法を学修することを授業目標とした。がん看護に関連する上記の諸理論を用いて実践事例を分析し，発表と討議を通して自己の看護観を考究した。また実践事例が有する健康課題を的確に捉える視点を，がん看護に関連する理論や概念を用いて看護介入モデルを作成し，プレゼンテーション，討議を通して実践への適用を検証及び考察した。評価方法は，プレゼンター

ション、討議及び課題レポートで評価をおこなった。本田、小原、非常勤講師5名が担当した。

【がん看護学講義Ⅲ】（1年次後期科目）2単位

がん診断から終末期に至るまで、様々な健康問題を抱えるがん患者とその家族に緩和ケアを系統のかつ体系的システムとして提供するための専門的な看護支援方法を探究することを授業目標とした。各領域（周手術期、化学療法、放射線療法、遺伝性のがん看護、長期療養過程にある看護、終末期にある看護、地域看護）の様々な健康課題を抱えるがん患者とその家族に緩和ケアを系統のかつ体系的システムとして提供する看護支援方法を、各専門領域の講師より最新知見の提供を受けた。またがん看護専門看護師が果たすべき役割機能として探求するため、実践事例に基づきプレゼンテーション、討議形式で系統的に習得できるように教授した。評価方法は、プレゼンテーション、討議及び課題レポートで評価をおこなった。本田、小原、非常勤講師8名が担当した。

【がん看護学演習Ⅲ】（1年次後期科目）2単位

様々な健康課題を抱えるがん患者・家族に緩和ケアを提供するための専門的な看護支援の実際を、CNSの6つの機能（実践、教育、相談、調整、倫理、研究）に基づいて学修することを授業目標とした。実践事例や国内外の文献を検討し、質の高い緩和ケア提供方法を探究するため、プレゼンテーション、討議を通して、がん看護や緩和ケアにおける課題や展望について考察した。評価方法は、プレゼンテーション、討議及び課題レポートで評価をおこなった。本田、非常勤講師3名が担当した。

【がん看護専門看護実習】（2年次前期科目）2単位

がん患者およびその家族が体験する様々な健康課題の時期に適した専門的な看護支援を継続的に提供するため、臨地実習を通して高度な看護実践・教育・相談・調整・倫理調整の実際について理解を深め、創造的ながん看護ケア開発を目指すことを授業目標とした。CNS役割開発実習と上級がん実践看護実習の2つに分け系統のかつ包括的な実践能力を育成する。CNS役割開発実習では、CNS役割実習と在宅がん看護実習を通して、CNSのスーパービジョンを受けながら、その役割機能の実際を学んだ。上級がん実践看護実習では、CNSとして、複雑な健康問題のあるがん患者とその家族に対して、高度な看護実践・教育・相談・調

整・倫理調整の役割機能を遂行できる能力を養うため主体的な実践を通して、CNSのスーパービジョンを受けながら、創造的ながん看護ケア開発を学修した。評価方法は、実習態度、実習目標に対する自己評価、他者評価、レポート評価、総括報告会で評価をおこなった。本田、小原が担当した。

3. その他

看護学部教育において、がん看護学に関連する科目及び総合分野の科目を担当した内容を下記の通り教授する。

1) がん看護学に関連する看護学部教育の概要

ターミナルケア（4年次前期科目1単位：選択）の科目責任者を小原が務めた。学習目的は死についてさまざまな角度から検討しながら、「生命の尊厳」と「生活の質」について考察し、ターミナル・ケア（ジ・エンド・オブ・ライフ・ケア）・緩和ケアにおける看護職の役割について学ぶことである。履修した学生は60名で、講義形式で授業が進められた。講義は、6名の非常勤講師と小原が担当した。

2) 総合分野における看護学部教育の概要

看護基礎セミナー（1年次前期科目1単位：必修）では、7～8名の学生を対象にセミナー形式ですすめていった。保健・看護研究セミナー（4年次前期科目1単位：必修）、卒業研究（4年次後期科目4単位：必修）は、7名の学生を対象に前期の一部は全員にて文献検討をおこない、その後研究テーマ別に3名および4名のグループに分かれ、グループ指導および個別指導をおこなった。

老年・地域看護管理学領域 「老年看護学」

教授 水戸美津子

1. スタッフの紹介

教授 水戸美津子

准教授 高木 初子

准教授 井上 映子

2. 教育の概要

老年・地域看護管理学領域「老年看護学，老年看護管理学」には6名の学生が在籍した。そのうち3名は有職者であり長期在学制度を利用した。平成20年度入学生からカリキュラムを改正したため，新旧両方のカリキュラムに沿って授業を展開した。

老年看護管理学領域では，地域で生活する健康な高齢者のための健康の保持・増進に積極的に寄与するとともに，健康障害をもつ高齢者とその家族に対して，高度で適切な看護ケア能力とコンサルテーション能力を活用して健康な生活を支援できる看護管理能力の取得を目指している。

平成21年度修了生3名，論文題名「地域支援病院における退院調整看護師の役割遂行の現状分析」，「訪問看護ステーションにおける他職種とのケア情報の連携に関する研究」，「自宅で認知症高齢者を介護する家族の生活の再構築に関する研究」であった。

【老年看護管理学講義Ⅰ】（1年次前学期2単位）

ここでは，老年看護の概念及び老年期の特徴と健康課題を理解し，老年看護管理について学ぶ。講義・学生によるプレゼンテーションにより授業を実施した。（担当：水戸，高木，井上）

【老年看護管理学講義Ⅱ】（1年次後学期2単位）

ここでは，様々な健康障害をもつ老年者が地域で生活を維持出来るような各種社会資源や住まい環境の整備の重要性と，家族・地域および社会関連から専門知識を体系的に理解したうえで，ケアシステムを開発することや社会資源の有効な活用に学ぶ。講義・学生によるプレゼンテーションにより授業を実施した。（担当：水戸，高木，井上）

【老年看護管理学演習Ⅰ】（1年次前学期4単位）

ここでは，老年者の健康課題について生活要因や保健行動との関連から評価する方法や，健康の保持・回復に関わる専門的ケア提供方法に関して

検討し，老年看護管理の課題について学ぶ。1名の学生が介護老人保健施設における実習を実施した。（担当：水戸，高木，井上）

【老年看護管理学演習Ⅱ】（2年次前学期4単位）

ここでは，老年看護に関連する特定分野の研究を系統的に整理し，今後の研究課題を探索する。老年看護実践への取り組みについての国内外の関連文献をクリティークし，研究課題を探究した。（担当：水戸，高木，井上）

【老年看護学特別演習】（2年次前学期4単位）

ここでは，老年看護管理学講義Ⅰ・Ⅱ及び老年看護管理学演習Ⅰ・Ⅱでの学習内容を発展させ，フィールド調査・実習を通して自分自身の研究課題を明確にする。先行研究や理論のながれを探究し，実践を通して実証的研究の可能性やその展望を多面的に検討し，研究計画書につなげた。（担当：水戸，高木，井上）

【老年・地域看護管理学特別研究】（2年次前学期・後学期）

ここでは，これまでの学修並びに看護実践を通して見出された研究課題に沿って研究を行い，修士論文を作成する。学生は自分自身の研究計画に基づきデータ収集及び分析を行い，2名の学生が修士論文を作成した。（担当：水戸，高木，井上）

【老年看護学特別演習Ⅰ】（2年次前学期4単位）

ここでは，老年者ケアの地域連携に関して臨床の具体的事例の検討を通して，将来を展望した課題を明確にする実習を行った。病院・施設・在宅で療養生活を送る老年者への地域連携に関する国内外の文献を検討し，地域連携に関する臨床の場への看護介入の方法を学ぶ。1名の学生が介護老人保健施設で4日間実習を実施した。（担当：水戸，高木，井上）

【老年看護学特別演習Ⅱ】（3年次前学期2単位）

ここでは，老年看護学講義Ⅰ・Ⅱ及び老年看護学演習Ⅰ・Ⅱでの学習を発展させ，さらに特別演習Ⅰで明確にした課題に基づき，地域を中心としたフィールド調査・実習等を通して自分自身の研究課題を明確にする。2名の学生が訪問看護ステーション，地域老人専門施設において実習し，自分自身の研究課題を明確にし，研究計画を立案した。（担当：水戸，高木，井上）

【老年・地域看護管理学特別研究】（3年次前学期・後学期）

ここでは，これまでの学修並びに看護実践を通

して見出された研究課題に沿って研究を行い，修士論文を作成する。2名の学生は自分自身の研究計画に基づきデータ収集及び分析を行い，1名の学生が修士論文を作成した。（担当：水戸，高木，井上）

老年・地域看護管理学領域 「地域看護管理学」

教授 春山 早苗

1. スタッフの紹介

教授 春山 早苗

講師 鈴木久美子

講師 塚本 友栄

講師 工藤奈織美

2. 大学院看護学研究科 教育の概要

地域看護管理学を選択している1年生は1名、2年生は3名（2年目2名、3年目1名）で3名が長期在学制度を利用している。

地域看護管理学では、地域特性に応じた政策立案や地域資源づくり、地域ケア体制づくり、その他の地域における看護管理に関わる知識や技術を教授し、地域ケアの現場において管理的・指導的役割を担い、地域のニーズに合った看護サービス提供システムを改善・改革・創出できる人材育成を目指した教育活動をしている。

今年度の開講科目は「地域看護管理学講義Ⅰ」（2単位、春山担当）、「地域看護管理学講義Ⅱ」（2単位、春山・鈴木で担当）、「地域看護管理方法Ⅰ」（2単位、春山と非常勤講師で担当）、「地域看護管理方法Ⅱ」（2単位、春山と鈴木、非常勤講師で担当）、「地域看護管理学演習」（4単位、春山・鈴木・塚本・工藤で担当）、「地域看護管理学特別演習Ⅱ」（2単位、春山と鈴木で担当）であった。

【地域看護管理学講義Ⅰ・Ⅱ】

講義Ⅰの授業目標は、文献検討や近年の地域看護活動の課題の検討を通して、地域看護管理に係る主要概念、地域における看護活動体制づくりの理論と考え方、地域資源の評価と開発に関わる看護活動について学修することである。1年生1名が履修した。

講義Ⅱの授業目標は、文献抄読により、へき地に住む人々のヘルスニーズと地域診断の視点、へき地看護理論の基礎、へき地看護活動の展開方法、へき地における看護管理体制のあり方について学修することである。1年生1名、科目等履修生1名、計2名が履修した。

【地域看護管理学方法Ⅰ・Ⅱ】

方法Ⅰの授業目標は、実践事例や先行研究の知

見から地域連携体制の構築や地域看護管理活動の展開方法、施策化に関わる看護専門職の役割と看護活動の展開方法について検討することである。1年生1名が履修した。

方法Ⅱの授業目標は、山間へき地や離島、豪雪地帯における実践事例や国内外の文献を検討し、へき地における看護活動発展のための方法を考えることである。1年生1名が履修した。

【地域看護管理学演習】

授業目標は、地域特性と人々のヘルスニーズの分析から、地域における看護提供機関の看護体制を評価検討し、看護管理に関する改善・改革の課題を明らかにすることである。1年生1名、2年生2名、計3名が履修した。教員の指導により授業目標に関連した目標を学生自身が立て、1名は豪雪地帯で保健医療福祉の包括的システムが構築されている新潟県南魚沼市で、2名は栃木県内の市町において実習を実施し、レポート等により評価した。

【地域看護管理学特別演習Ⅱ（旧カリ）】

授業目標は、実践現場の看護管理に関する改善・改革の課題を実現するために、研究的アプローチを検討し、研究を計画することである。2年生1名が履修した。文献検討、並びに、学生が自分の研究テーマであるへき地診療所の看護管理活動について、複数のへき地診療所に出向き看護職からの情報収集を行い、ゼミと個別指導により、研究計画を精練した。

研究業績録

- 注 1) 掲載対象は2009年1月1日から同年12月31日までである。
2) ゴシック体の人名は対象年に本学に所属していた者である。

基礎科学関連

(1) 論文

- 1) 大塚公一郎：透析患者の語りと聴取から学ぶーサイコネフロロジー入門。臨床透析，25（6）；790-792，2009.
- 2) 近藤 州，大塚公一郎，沢口グラウシア，宮坂リンコン，本多エリザ，中村好一，加藤 敏：日本に在住する日系ブラジル人児童・生徒のメンタルヘルスの現状ーブラジル在住の日系人児童・生徒との比較調査よりー。日本社会精神医学会雑誌，18；105-111，2009.
- 3) 大塚公一郎：「生きられる身体」に配慮した透析患者へのナラティブ・アプローチー現代医療におけるダブルバインドからの脱出の試みー。栃木精神医学，29；24-39，2009.
- 4) 大塚公一郎：異文化間精神療法ー「身分けされた文化」を導きとしてー。精神科治療学24；102-103，2009.
- 5) 大塚公一郎：第28回日本社会精神医学会大会を終えて。日本社会精神医学会雑誌，18；85-87，2009.

(2) 著書・総説

- 1) 渡邊亮一：医療行為と医療専門職の責務。新版「医療情報」医学・医療編（日本医療情報学会医療情報技師育成部会編）。篠原出版新社（東京），52-59，2009.
- 2) 岡本悦司，小橋 元，坂田清美，佐藤敏彦，西浦 博，横山英世，岡田充史，尾島俊之，亀崎豊実，高橋美保子，富田敦子，山本秀樹，渡邊亮一：サブノートF第33版 保健医療論・公衆衛生学（2010年版）。Medic Media（東京），2009.

(3) その他

- 1) 大塚公一郎，辻 恵介，宮坂リンカーン，加藤 敏：日系ブラジル人とうつ病親和型性格。第28回日本社会精神医学会，宇都宮。2009年2月27日。（日本社会精神医学会雑誌 18（1）；134，2009）
- 2) 近藤 州，大塚公一郎，沢口グラウシア，宮坂リンコン，本多エリザ，中村好一，加藤 敏：日本に在住する日系ブラジル人児童・生徒のメンタルヘルスの現状ーブラジル在住の日系人児童・生徒との比較調査よりー。第28回日本社会精神医

学会，宇都宮。2009年2月28日。（第28回日本社会精神医学会プログラム・抄録集；54，2009）

3) 大塚公一郎：特別講演：透析患者さんの“うつ”とその対応。栃木県透析懇談会 看護部・栄養部合同勉強会，宇都宮。2009年3月5日。

4) 大塚公一郎，加藤 敏：統合失調症における虚偽主題ー離人症との関係と治療的意義についてー。第32回日本精神病理・精神療学会，盛岡。2009年9月25日。（臨床精神病理 28；74-75，2009）

5) 阿部隆明，大塚公一郎，加藤 敏：急性精神病（非定型精神病）における縦断的診断。第29回日本精神科診断学会，東京。2009年10月16日。（第29回日本精神科診断学会プログラム・抄録集；33，2009）

医学関連

- 1) 竹田俊明, 松下康弘, 清水いはね, 村松慎一: 漢方薬の近縁関係に関する自己組織化マップ解析. 第10回自己組織化マップ研究会, 名古屋. 2009年3月10日. (SOM2009講演論文集; 7-10, 2009)
- 2) 竹田俊明, 清水いはね, 村松慎一: 頭痛処方
の近縁関係に関する自己組織化マップ (SOM) 解析. 第60回日本東洋医学会学術総会, 東京, 2009年6月19-21日. (日本東洋医学雑誌 60 Suppl; 357, 2009)
- 3) 村松慎一, 竹田俊明, 清水いはね: 診断特性
及び生薬構成から見た頭痛処方の特徴-自己組織
化マップ (SOM) を用いた解析. 第26回和漢医薬
学会学術大会, 千葉. 2009年8月20-30日.
(J.Trad.Med. 26 Suppl., p.102, 2009)
- 4) 竹田俊明, 村松慎一, 清水いはね, 松下康
弘: 2次元自己組織化マップ (SOM) による漢方
頭痛処方の特徴解析. 自治医科大学シンポジウム,
栃木県下野市. 2009年8月29日. (第8回自治医
科大学シンポジウム抄録集; C-1, 2009)
- 5) 竹田俊明: 自己組織化マップ (SOM) による
頭痛処方の解析. 厚生労働省科研費「主観的個別
化患者情報のデータマイニングによる漢方・鍼灸
の新規エビデンスの創出」における研究成果発表
会における招待講演, 東京. 2009年11月20日.

基礎看護学

(1) 論文

1) Ushiro, R.: Nurse-Physician Collaboration Scale: development and psychometric testing. Journal of Advanced Nursing, 65(7); 1497-508, 2009.

2) 里光やよい, 今野葉月, 須釜なつみ, 市塚京子, 佐藤淳子, 鈴木照実, 古橋洋子: 臨床看護師の成長に影響を及ぼしたもの－中堅看護師グループインタビューより－. 自治医科大学看護学ジャーナル, 6; 131-143, 2009.

3) 植村由美子, 櫻井美奈, 山口由子, 水戸優子, 牧野美幸, 川守田千秋, 相馬朝江: 看護師による排泄用具の評価に基づく用具改善の方向性. 日本看護技術学会学会誌, 8(2); 103-112, 2009.

(2) 著書・総説

1) 宇城 令: 第5章「食事」に関連したところとからだのしくみ. 最新介護福祉全書12ところとからだのしくみ (小板橋喜久子, 松田たみ子). メヂカルフレンド社 (東京), 153-185, 2009.

2) 里光やよい: 第9章死にゆく人のところとからだのしくみ. 最新介護福祉全書12ところとからだのしくみ (小板橋喜久子, 松田たみ子). メヂカルフレンド社 (東京), 270-286, 2009.

(3) その他

1) 大島康晴, 野中 静, 齋藤ひろみ, 半田直子, 豊田省子, 里光やよい: 看護学生の看護技術に関する標準模擬患者導入による学習効果. 日本看護教育学会, 北海道. 2009年9月20日. 日本看護教育学会第19回学術集会 (日本看護学教育学会誌第19回学術集会講演集) 19巻; 130, 2009)

2) 滝 恵津, 栗山葉子, 宇城 令, 北島元治, 櫻井美奈, 永野美奈子, 高尾 志, 里光やよい, 川上勝, 戸田昌子, 岩永秀子: 神経内科の入院患者に適した転倒・転落アセスメントシート項目の検討. 医療の質・安全学会. 東京. 2009年11月21日. (医療の質・安全学会誌4 (増補); 107, 2009)

3) 北島元治, 櫻井美奈, 永野美奈子, 高尾 志, 里光やよい, 滝 恵津, 栗山葉子, 宇城 令, 川上 勝, 戸田昌子, 岩永秀子: 患者の転倒リスクを予測する看護師の「臨床知」の内容の明確化. 医療の質・安全学会. 東京. 2009年11月21日.

(医療の質・安全学会誌4 (増補); 108, 2009)

4) 高尾 志, 櫻井美奈, 北島元治, 永野美奈子, 里光やよい, 滝 恵津, 栗山葉子, 宇城 令, 川上 勝, 戸田昌子, 岩永秀子: 転倒・転落につながる状態についての臨床知－転倒・転落予知メモ, 転倒後の振り返りメモの分析から－. 医療の質・安全学会. 東京. 2009年11月21日. (医療の質・安全学会誌4 (増補); 159, 2009)

5) 永野美奈子, 里光やよい, 北島元治, 高尾志, 櫻井美奈, 滝 恵津, 栗山葉子, 宇城 令, 戸田昌子, 岩永秀子: 転倒・転落につながる状態についての臨床知－神経内科病棟看護師グループインタビューより－. 医療の質・安全学会. 東京. 2009年11月21日. (医療の質・安全学会誌4 (増補); 159, 2009)

6) 野中 静, 大島康晴, 齋藤ひろみ, 豊田省子, 里光やよい, 半田直子: 基礎看護技術における歯ブラシを用いた口腔ケアに関する評価項目の検討. 日本看護科学学会, 東京. 2009年11月27日. 第29回日本看護科学学会学術集会講演集; 290, 2009)

地域看護学

(1) 論文

1) 工藤奈織美, 舟迫 香, 青木さぎ里, 塚本友栄, 鈴木久美子, 春山早苗: 平常時における感染症の発生予防に関わる保健所保健師の役割. 自治医科大学看護学ジャーナル, 6; 35-50, 2009.

2) 鈴木久美子, 塚本友栄, 工藤奈織美, 春山早苗: 都道府県における保健所保健師に対する感染症対策に関する研修の実態. 自治医科大学看護学ジャーナル, 6; 123-129, 2009.

(2) 著書・総説

1) グレッグ美鈴, 奥井幸子, 高橋みや子, 近田敬子, 林 千冬, 牧本清子, 池西悦子, 田村由美, 和賀徳子, 安酸史子, 塚本友栄, 佐々木幾美, Joan Kathy Magilvy, Gayle Preheim, Vicki Erickson, 松谷美和子, Sally Glen, 田素斎: 第七章 臨地実習における教育と学習 2. 看護学生が直面しやすい問題: 臨地実習を通して. 看護教育学 看護を学ぶ自分と向き合う (グレッグ美鈴, 池西悦子編集). 南光堂 (東京), 191-202, 2009.

2) 福島道子, 河野順子, 永岡明子, 手塚美恵子, 宮崎照子, 伊藤まゆみ, 塚本友栄: 第6章 退院支援・調整に関する看護師の教育. 入院時から始める退院支援・調整 (福島 道子, 河野 順子編著 共同代表). 日総研 (東京), 141-154, 2009.

(3) その他

1) Haruyama, S., Suzuki, K., Aoki, S., Shionoya, A. and Yamada, A.: Study on Establishing the Healthcare System for the Elderly in the Remote Area in Japan. The 4th international conference on community health nursing research, Adelaide South Australia. Aug.17,2009. (The 4th international conference on community health nursing research Conference Handbook; 362, 2009)

2) Suzuki, K., Haruyama, S., Kudo, N., Tsukamoto, T. and Ogawa, T.: Study on the Judgment of the Priority of Healthcare Services in which Municipal Public Health Nurses were engaged in the Remote Area. The 4th international conference on community health nursing research, Adelaide South Australia. Aug.17,2009.

(The 4th international conference on community health nursing research Conference Handbook; 365, 2009)

3) 富田倫子, 春山早苗: 地域難病療養支援従事者への研修事業を実施して～地域リーダーと地域支援従事者への重層的な研修展開とその方向性について～. 第14回日本難病看護学会学術集会, 群馬. 2009年8月28日. (日本難病看護学会誌 14 (1); 49, 2009)

4) 塚本友栄, 小川貴子, 工藤奈織美, 鈴木久美子, 春山早苗, 関山友子, 小谷妙子, 工藤祝子, 福田順子, 佐藤里美: へき地診療所看護職の学習ニード. 第4回日本ルーラルナース学会, 群馬. 2009年8月29日. (日本ルーラルナース学会第4回学術集会抄録集; 27, 2009)

5) 菊池睦子, 相賀美幸, 中山鈴子, 福田順子, 小谷妙子, 後藤光代, 塚本友栄, 鈴木久美子, 春山早苗: 地域における大学病院の看護部の役割. 第4回日本ルーラルナース学会, 群馬. 2009年8月29日. (日本ルーラルナース学会第4回学術集会抄録集; 23, 2009)

6) 鈴木久美子, 小川貴子, 工藤奈織美, 塚本友栄, 春山早苗, 関山友子, 小谷妙子, 工藤祝子, 福田順子, 佐藤里美: 僻地診療所看護職の救急時の活動における工夫と平常時の取り組み. 第4回日本ルーラルナース学会, 群馬. 2009年8月29日. (日本ルーラルナース学会第4回学術集会抄録集; 41, 2009)

7) 塚本友栄, 小川貴子, 工藤奈織美, 鈴木久美子, 春山早苗, 大澤真奈美, 小池亜紀子, 櫻山豊夫, 森 仁実, 山口佳子: 感染症対策において保健所保健師に求められる能力. 第68回日本公衆衛生学会総会, 奈良. 2009年10月22日. (日本公衆衛生雑誌総会抄録集 56 (10); 268, 2009)

8) 小川貴子, 塚本友栄, 工藤奈織美, 鈴木久美子, 春山早苗, 大澤真奈美, 小池亜紀子, 櫻山豊夫, 森 仁実, 山口佳子: 感染症対策における保健所と教育機関の協働に関する課題. 第68回日本公衆衛生学会総会, 奈良. 2009年10月22日. (日本公衆衛生雑誌総会抄録集 56 (10); 269, 2009)

9) 島田裕子: 自然災害に備えた市町村保健師の活動方法. 第68回日本公衆衛生学会総会, 奈良. 2009年10月22日. (日本公衆衛生雑誌総会抄録集 56 (10); 276, 2009)

10) 宮崎美砂子, 奥田博子, 牛尾裕子, 春山早苗,

森下安子, 田村須賀子, 歌川孝子, 藤谷明子, 飯野理恵, 岩瀬靖子: 被災時に必要な保健師マンパワー算定基準の試案作成(第3報) - 風水害に焦点をあてて. 第68回日本公衆衛生学会総会, 奈良. 2009年10月22日. (日本公衆衛生雑誌総会抄録集 56(10); 563, 2009)

11) 田村須賀子, 須永恭子, 春山早苗, 鈴木久美子, 波多野浩道, 兒玉慎平: 山間へき地診療所における医師と看護師の役割分担と連携. 第68回日本公衆衛生学会総会, 奈良. 2009年10月22日. (日本公衆衛生雑誌総会抄録集 56(10); 576, 2009)

12) 須永恭子, 田村須賀子, 春山早苗, 鈴木久美子, 波多野浩道, 兒玉慎平: 山間僻地診療所における終末期及び看取り時在宅対応での医師と看護師の役割分担と連携. 第68回日本公衆衛生学会総会, 奈良. 2009年10月22日. (日本公衆衛生雑誌総会抄録集 56(10); 576, 2009)

13) 工藤奈織美, 塚本友栄, 小川貴子, 鈴木久美子, 春山早苗, 大澤真奈美, 小池亜紀子, 櫻山豊夫, 森 仁実, 山口佳子: 医療監視や施設指導における感染症予防のための保健所保健師活動第68回日本公衆衛生学会総会, 奈良. 2009年10月23日. (日本公衆衛生雑誌総会抄録集 56(10); 594, 2009)

14) 富田倫子, 青木博美, 春山早苗: 地域の特性を活かした地域難病療養支援従事者への人材育成研修の取り組み. 第68回日本公衆衛生学会総会, 奈良. 2009年10月23日. (日本公衆衛生雑誌総会抄録集 56(10); 594, 2009)

15) 高村寿子, 春山早苗, 上原里程, 中村好一: メキシコ国ベラクルス州における思春期ピアリーダーによる健康づくり活動の成果. 第68回日本公衆衛生学会総会, 奈良. 2009年10月23日. (日本公衆衛生雑誌総会抄録集 56(10); 644, 2009)

16) 春山早苗, 田村須賀子, 鈴木久美子, 須永恭子, 関山友子: へき地診療所における医師と看護師との役割分担と連携. 第29回日本看護科学学会学術集会, 千葉. 2009年11月28日. (第29回日本看護科学学会学術集会講演集: 492, 2009)

17) 春山早苗, 鈴木久美子, 塚本友栄, 工藤奈織美, 小川貴子: 離島・山村過疎地域における市町村保健師活動のプライオリティの判断に関する研究. 平成20年度科学研究費補助金実績報告書, 2009.

18) 春山早苗: 感染症健康危機管理における保健

所保健師の役割と求められる能力. 保健師ジャーナル, 65(9); 729-735, 2009.

19) 春山早苗, 鈴木久美子, 小池亜紀子, 櫻山豊夫, 山口佳子, 大澤真奈美, 森 仁実: 結核・感染症の発生に備えた保健所保健師の平常時体制づくり並びに現任教育プログラムの開発に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 健康安全・危機管理対策総合研究事業「結核・感染症の発生に備えた保健所保健師の平常時体制づくり並びに現任教育プログラムの開発に関する研究」平成20年度総括・分担研究報告書, 1-8, 2009.

20) 春山早苗, 工藤奈織美, 小川貴子, 舟迫香: 感染症予防のための保健所保健師活動ガイドライン. 厚生労働科学研究費補助金 健康安全・危機管理対策総合研究事業「結核・感染症の発生に備えた保健所保健師の平常時体制づくり並びに現任教育プログラムの開発に関する研究」平成20年度総括・分担研究報告書, 9-16, 2009.

21) 小池亜紀子, 工藤奈織美, 小川貴子, 舟迫香: 感染症の早期発見のための保健所保健師活動ガイドライン. 厚生労働科学研究費補助金 健康安全・危機管理対策総合研究事業「結核・感染症の発生に備えた保健所保健師の平常時体制づくり並びに現任教育プログラムの開発に関する研究」平成20年度総括・分担研究報告書, 17-18, 2009.

22) 鈴木久美子, 塚本友栄: 感染症業務に関わる保健所保健師の現任教育プログラムの検討. 厚生労働科学研究費補助金 健康安全・危機管理対策総合研究事業「結核・感染症の発生に備えた保健所保健師の平常時体制づくり並びに現任教育プログラムの開発に関する研究」平成20年度総括・分担研究報告書, 41-44, 2009.

23) 春山早苗, 鈴木久美子, 小池亜紀子, 櫻山豊夫, 山口佳子, 大澤真奈美, 森 仁実: 結核・感染症の発生に備えた保健所保健師の平常時体制づくり並びに現任教育プログラムの開発に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 健康安全・危機管理対策総合研究事業「結核・感染症の発生に備えた保健所保健師の平常時体制づくり並びに現任教育プログラムの開発に関する研究」平成19~20年度総合研究報告書, 1-15, 2009.

24) 春山早苗, 鈴木久美子, 小池亜紀子, 山口佳子, 大澤真奈美, 森 仁実, 櫻山豊夫, 塚本友栄, 工藤奈織美, 小川貴子, 舟迫 香, 青木さぎ里: 感染症対策における平常時の保健所保健師活動ガ

イドライン。厚生労働科学研究費補助金 健康安全・危機管理対策総合研究事業「結核・感染症の発生に備えた保健所保健師の平常時体制づくり並びに現任教育プログラムの開発に関する研究」平成19～20年度総合研究報告書，別1-1～1-41，2009.

25) 春山早苗，鈴木久美子，小池亜紀子，山口佳子，大澤真奈美，森 仁実，櫻山豊夫，塚本友栄，工藤奈織美，小川貴子，舟迫 香，青木さぎ里：感染症業務に関わる保健所保健師の現任教育プログラム。厚生労働科学研究費補助金 健康安全・危機管理対策総合研究事業「結核・感染症の発生に備えた保健所保健師の平常時体制づくり並びに現任教育プログラムの開発に関する研究」平成19～20年度総合研究報告書，別2-1～2-10，2009.

26) 宮崎美砂子，奥田博子，牛尾裕子，春山早苗，森下安子，田村須賀子，歌川孝子，白石 都，藤谷明子，古場裕司，大橋毅夫，飯野理恵，岩瀬靖子：風水害発生時に必要な保健師マンパワー算定基準の検討。厚生労働科学研究費補助金 健康安全・危機管理対策総合研究事業「災害・重大健康危機の発生時・発生後の対応体制及び健康被害抑止策に関する研究」平成20年度総括・分担研究報告書，41-79，2009.

27) 春山早苗，鈴木久美子，関山友子，三瀬順一，波多野浩道，兒玉慎平，田村須賀子，須永恭子：医療過疎地域領域の役割分担・連携。厚生労働科学研究費補助金 厚生労働科学特別研究事業「医師と看護師との役割分担と連携の推進に関する研究」平成20年度総括研究報告書，202-246，2009.

28) 春山早苗，鈴木久美子，塚本友栄，工藤奈織美，小川貴子，小谷妙子，工藤祝子，福田順子，佐藤里美：へき地診療所における看護活動の実態と課題に関する調査－へき地診療所全国調査報告－。自治医科大学看護学部地域看護学 同大学附属病院看護部発行，1-79，2009.

精神看護学

(1) 論文

1) Hanzawa, S., Bae, JK., Tanaka, H., Tanaka, G., Bae, YJ., Goto, M., Inadomi, H., Ohta, Y., Nakane, H. and Nakane, Y.: Family stigma and care burden of schizophrenia patients: Comparison between Japan and Korea. Asia-Pacific Psychiatry, 1; 120-129, 2009

(2) その他

1) Nosaki, A., Iwasaki, Y., Ishikawa, K., Higashimoto, H. and Komiya, H.: Child psychiatric nurses' practice, difficulties and educational needs in Japan. RCN Mental Health Conference and Exhibition 2009, Edinburgh, U.K. Mar. 1, 2009 (Conference and Exhibition 2009 conference programme; 90-91, 2009)

2) Hanzawa, S., Tanaka, G., Inadomi, H., Goto, M., Tanaka, H., Bae, JK., Bae, YJ., Nakane, H., Ohta, Y. and Nakane, Y.: Families stigma and Care burden of Patients with Schizophrenia: A comparison of Japan and Korea 12th IFPE Vienna, Austria. Apr. 16-19, 2009

3) 野崎章子：児童の心の問題への看護援助を支援する教育プログラム開発のためのニーズ調査. 日本児童青年精神医学会第50回総会，京都，2009年10月1日。（日本児童青年精神医学会第50回総会抄録；268，2009）

4) 岩崎弥生，小宮浩美，石川かおり，東本裕美，野崎章子，山田 洋：精神科入院患者の退院促進を指向した看護援助に関する調査. こころの健康，24（1）；76-77，2009

5) 小宮浩美，岩崎弥生，石川かおり，東本裕美，野崎章子，山田 洋：当事者力量を高める看護援助－看護師に対する観察・聴き取り調査より－. こころの健康，24（1）；76，2009

母性看護学

(1) 論文

- 1) Narita, S., Tsuru, S., Kudo, R., Nonoyama, M., Dannoue, H. and Endo, T. : Evaluation of a Training Program for Counselors in Contraception and Prevention of STIs and a Website-based Support system. Connecting Health and Humans-Proceedings of NI2009 ; 631-635, 2009.
- 2) Saito, Y. and Matsuo, H. : Trial development of the Cognitive Appraisal Scale for Infertility (CASI) (version 1). Fertility and Sterility, 91 (6) ; 2596-2601, 2009.
- 3) Saito, Y. and Matsuo, H. : Survey of Japanese infertile couples' attitudes toward surrogacy. Journal of Psychosomatic Obstetrics & Gynecology, 30 (3) ; 156-161, 2009.
- 4) 成田 伸, 矢野美紀, 西岡啓子, 加藤優子, 森島知子, 須藤久実, 段ノ上秀雄, 水流聡子, 鈴木幸子, 工藤里香, 野々山未希子, 齋藤益子, 岡本美香子, 遠藤俊子: 避妊・性感染症予防に関するカウンセリング概念の構築と避妊・性感染症予防カウンセラー育成プログラムの開発. 自治医科大学看護学ジャーナル, 6 ; 101-112, 2009.
- 5) 沼尾美津穂, 立木歌織, 成田 伸: 「フリースタイル分娩」の用語の変遷と概念の明確化. 自治医科大学看護学ジャーナル, 6 ; 113-121, 2009.
- 6) 角川志穂: 子育て支援に向けた祖父母学級導入の検討. 母性衛生, 50 (2) ; 300-309, 2009.

(2) 著書・総説

- 1) 成田 伸: 第1章 周産期医療における質と安全の保障. 助産師基礎教育テキスト第3巻「周産期における医療の質と安全」(成田 伸編). 日本看護協会出版会(東京), 2-26, 2009.
- 2) 成田 伸: 第2章 日本の周産期医療システム. 助産師基礎教育テキスト第3巻「周産期における医療の質と安全」(成田 伸編). 日本看護協会出版会(東京), 28-41, 2009.
- 3) 成田 伸: 第4章 周産期におけるリスクマネジメント. 助産師基礎教育テキスト第3巻「周産期における医療の質と安全」(成田 伸編). 日本看護協会出版会(東京), 90-125, 2009.
- 4) 成田 伸: 第6章3. 助産所における助産サービス管理の実際. 助産師基礎教育テキスト第3

巻「周産期における医療の質と安全」(成田 伸編). 日本看護協会出版会(東京), 173-186, 2009.

5) 成田 伸: 第6章5. 地域における助産サービス管理の実際. 助産師基礎教育テキスト第3巻「周産期における医療の質と安全」(成田 伸編). 日本看護協会出版会(東京), 193-199, 2009.

(3) その他

- 1) Shimon, R., Tsuru, S., Narita, S., Munechika, M. and Iizuka, Y. : Structuring Development Process of Learning Knowledge and Procedure in Healthcare Using the Unit Process Flow Chart. The 10th International Congress on Nursing Informatics(NI2009), Helsinki. Jun. 30, 2009 (Connecting Health and Humans-Proceedings of NI2009 ; 631-635, 2009)
- 2) Shimon, R., Tsuru, S., Narita, S., Munechika, M. and Iizuka, Y. : Structuring Development Process of Learning Knowledge and Procedure in Healthcare Using the Unit Process Flow Chart. The 10th International Congress on Nursing Informatics(NI2009), Helsinki. Jun.30,2009 (Connecting Health and Humans-Proceedings of NI2009 ; 887, 2009)
- 3) 小嶋由美, 佐藤君江, 渡辺 博, 成田 伸: 緊急母体搬送され, その後の出産し, さらに逆搬送となった母親の体験. 第34回栃木県母性衛生学会, 宇都宮. 2009年6月13日. (栃木母性衛生(とちぼ) 36 ; 13-15, 2010)
- 4) 成田 伸, 角川志穂, 寒河江かよ子, 工藤祝子: 地域支援病院への派遣勤務が助産師のキャリア発達に与える影響-地域支援病院への派遣勤務での助産師の体験-. 日本ルーラルナース学会第4回学術集会, 前橋. 2009年8月29日. (抄録集 ; 47, 2009)
- 5) 沼尾美津穂, 立木歌織, 高木友子, 高橋斉子, 金子清恵, 小嶋由美, 山下 瞳, 齋藤良子, 成田 伸: 母性看護専門看護師教育課程における地域支援病院実習での実践と課題. 日本ルーラルナース学会第4回学術集会, 前橋. 2009年8月29日. (抄録集 ; 48, 2009)
- 6) 工藤里香, 野々山未希子, 鈴木幸子, 成田 伸, 遠藤俊子: 避妊・性感染症予防カウンセラーの育成とその評価(その1). 第50回日本母性衛生学会学術集会, 横浜. 2009年9月27日. (抄録

集；122, 2009)

7) 野々山未希子, 工藤里香, 鈴木幸子, 成田伸, 遠藤俊子：避妊・性感染症予防カウンセラーの育成とその評価（その2）第50回日本母性衛生学会学術集会, 横浜. 2009年9月27日. (抄録集；123, 2009)

8) 小嶋由美, 佐藤君江, 渡辺 博, 成田 伸：緊急母体搬送になり, その後に出産し, さらに逆搬送となった母親の体験. 第50回日本母性衛生学会学術集会, 横浜. 2009年9月27日. (抄録集；112, 2009)

9) 遠藤俊子, 鈴木幸子, 渡邊竹美, 成田 伸, 斉藤益子, 山崎圭子, 渡部尚子, 新道幸恵：キャリア認識からみた新卒1年目の助産師. 第50回日本母性衛生学会学術集会, 横浜. 2009年9月27日. (抄録集；175, 2009)

10) 鈴木幸子, 遠藤俊子, 斉藤益子, 成田 伸, 渡部尚子, 山崎圭子, 渡邊竹美, 新道幸恵：卒後10年以下の助産師のキャリアへの見通しに関する認識. 第50回日本母性衛生学会学術集会, 横浜. 2009年9月27日. (抄録集；176, 2009)

11) 金子清恵, 成田 伸：幼児後期の子どもの距離感についての母親の体験. 第50回日本母性衛生学会学術集会, 横浜. 2009年9月27日. (抄録集；166, 2009)

12) 角川志穂：孫育て手帳の開発に対する祖父母のニーズ. 第50回日本母性衛生学会総会学術集会, 横浜. 2009年9月27日. (母性衛生, 50(3)；128, 2009)

13) 品川直美, 齋藤良子：分娩時呼吸法の25年間の変遷と今後の課題～呼吸法に焦点を当てた文献検討から～. 日本母性衛生学会第50回学術集会, 横浜. 2009年9月28日. (母性衛生 50(3)；85, 2009)

14) 山名香奈美, 中西伸子, 泉川孝子, 脇田満里子, 齋藤良子：乳房ケアに最適な環境のための基礎調査＜清潔環境＞. 日本母性衛生学会第50回学術集会, 横浜. 2009年9月28日. (母性衛生 50(3)；186, 2009)

15) 成田 伸, 大原良子, 黒田裕子, 植竹貴子, 西岡啓子, 加藤優子, 藤川智子：下野市周辺における地域助産師による育児支援活動. 自治医科大学看護学ジャーナル (自治医科大学看護学部共同研究費報告), 6；155-156, 2009.

16) 成田 伸, 大原良子, 黒田裕子, 植竹貴子,

西岡啓子, 加藤優子：へき地で乳児を育てる母親の健康ニーズ－へき地中核病院小児科外来受診乳児の母親調査－. 自治医科大学看護学ジャーナル (自治医科大学看護学部共同研究費報告), 6；153-154, 2009.

17) 新道幸恵, 遠藤俊子, 渡部尚子, 鈴木幸子, 成田 伸, 斉藤益子, 他：看護系大学の統合カリキュラムにおける助産師教育の到達目標に関する検討. 平成20年度科学研究費助成金基盤研究 (B) 研究成果報告書, 119；2009.

小児看護学

(1) 論文

- 1) 樋貝繁香, 遠藤俊子, 榊原まゆみ: 父親の父親クラス参加が産後1カ月の母親の育児ストレスに与える影響. 山梨県母性衛生学会誌, 8(1); 6-16, 2009.
- 2) 富岡晶子, 篠木絵理, 樋貝繁香, 中久喜町子: 乳幼児の健康に対する親のニーズと健康教育認定こども園における実践から. 東京医療保健大学紀要, 4(1); 63-67, 2009.
- 3) 井上みゆき, 横尾京子: NICUにおける子どもの最善の利益と生命維持治療にたいする看護師の認識. 日本新生児看護学会誌, 15(2); 11-17, 2009.

(2) 著書・総説

- 1) 樋貝繁香: 助産師基礎教育テキスト第7巻 ハイリスク妊産褥婦・新生児へのケア (遠藤俊子編). 日本看護協会出版会 (東京), 206-214, 2009

(3) その他

- 1) Higai, S. and Endo, T.: Effect of father's Participation in Child-Rearing Classes on the Their Self-efficacy and Child-Rearing Behavior. World Academy of Nursing Science, Kobe. Sep.19, 2009 (The 1st International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science; 179, 2009.)
- 2) 渡邊隆子, 籠谷京子, 赤池佑季子, 杉本礼子, 武藤彩子, 樋貝繁香: 富士・東部小児初期救急医療センターの果たす役割 - 家族のアセスメントの向上を目指して -. 山梨県母性衛生学会, 甲府. 2009年5月30日 (山梨県母性衛生学会誌 9(1); 54, 2009)
- 3) 井上みゆき: 看護師-医師コラボレーションに関する文献的考察-子どもの生命をめぐる意思決定に焦点をあてて- 日本小児学会第19回学術集会, 札幌. 2009年7月18日. (日本小児看護学会第19回学術集会講演集; 91, 2009)
- 4) 石田寿子: 重症心身障害児をもつ母親に対する看護師の自己開示の実態. 日本看護研究学会, 横浜. 2009年8月4日. (日本看護研究学会雑誌 32(3); 231, 2009)

5) 石田寿子: 看護師の自己開示に対する重症心身障害児をもつ母親の感情. 日本看護学教育学会, 北見. 2009年9月21日. (日本看護学教育学会誌 19; 164, 2009)

6) 山内桂子, 早川満利子, 久山幸恵, 岸田さな江, 北村露輝, 嶺岸秀子 (訳): 末期の悪性腸障害の本質と進行がんの患者に対するその影響 The nature of turminal malignant bowel obstruction and its impact on patients with advanced cancer. がん看護, 14(6); 678-693, 2009.

成人看護学

58-74, 2009.

(1) 論文

- 1) Sakita, M., Yamazaki, Y., Sato, M., Inoue, Y., Togari, T., and Mizota, Y.: Social relationships and their effects on anxiety, depression, and hope in people with rheumatoid arthritis in Japan. *Jpn J Health & Human Ecology*, 75(1); 3-16, 2009.
- 2) 内海香子, 水野照美, 山本洋子, 村上礼子, 清水玲子, 棚橋美紀, 中村美鈴: 看護系A大学成人看護学領域での学生の卒業研究における困難と学び. *日本看護学教育学会誌*, 19(1); 71-78, 2009.
- 3) 清水安子, 黒田久美子, 内海香子, 森小律恵, 麻生佳愛, 村角直子, 正木治恵: 糖尿病患者のセルフケア能力測定ツールの開発 試用結果に基づいた修正の試み. *日本糖尿病教育・看護学会誌*, 13(2); 146-157, 2009.
- 4) 中村美鈴, 細谷好則, 段ノ上秀雄, 武正泰子, 矢野雅彦, 土岐祐一郎: 胃切除後障害(5) 胃切除後の機能障害とQOLの評価ー現状と展望. *臨牀消化器内科*, 24(11); 1477-1485, 2009.

(2) 著書・総説

- 1) 段ノ上秀雄: 術式別ドレーン管理とアセスメント 胸腔ドレナージ 心臓手術後. *月刊ナーシング*, 29(3). 学研(東京), 26-28, 2009.
- 2) 崎田マユミ: 術式別ドレーン管理とアセスメント 肺がん術後のドレナージ. *月刊ナーシング*, 29(4). 学研(東京), 20-23, 2009.
- 3) 武正泰子: 術式別ドレーン管理とアセスメント 胃全摘後のドレナージ. *月刊ナーシング*, 29(4). 学研(東京), 32-34, 2009.
- 4) 中村美鈴: 術後ドレーン挿入中の患者へのケアとアセスメント. *月刊ナーシング*, 29(5). 学研(東京), 10-17, 2009.
- 5) 中村美鈴: ドレーンの種類とドレナージの分類に関する基礎知識. *月刊ナーシング*, 29(6). 学研(東京), 18-19, 2009.
- 6) 中村美鈴: 応用力が身につく看護過程 食道がん患者の看護ケア. *ナーシングカレッジ*, 13(5). 株式会社医学芸術社(東京), 66-82, 2009.
- 7) 段ノ上秀雄, 中村美鈴: 応用力が身につく看護過程 乳がん患者の看護ケア. *ナーシングカレッジ*, 13(10). 株式会社医学芸術社(東京),

(3) その他

- 1) Narita S., Tsuru S., Suzuki S., Kudo R., Nonoyama M., Dannoue H. and Endo T.: Evaluation of a Training Program for Counselors in Contraception and Prevention of STIs and a Website-based Support System. 10th International Nursing Informatics Congress, Helsinki. Jun. 29, 2009. (Proceedings of NI2009 146; 631-635, 2009)
- 2) Nakamura, N. and Suzuki, S.: Nursing care of postoperative gastrointestinal dysfunction and resumption of social activities in patients after gastrectomy. International Council of Nurses in 2009, South Africa. Jul. 2, 2009. (International Council of Nurses in 2009, CD-ROM)
- 3) Shimizu, Y., Kuroda, K., Uchiumi, K., Asou, K., Murakado, N., Mori, K., Seto, N., Masaki, H.: Development of a Nursing Program to Promote Diabetes Self-Care Agency. International Council of Nurses in 2009, South Africa. Jul. 2, 2009.
- 4) 茂呂悦子, 中村美鈴: 集中治療室入室中に人工呼吸器装着となった術後患者の回復を促すための看護援助の検討. 第5回クリティカルケア看護学会, 神戸. 2009年7月19日. (日本クリティカルケア学会学術集会講演集5(1) 102, 2009)
- 5) 中村美鈴: パネルディスカッション: 患者体験を取り入れた教育実践の工夫と未来: 患者がつづる開腹手術体験記からの教育方法の検討. 第35回日本看護研究学会, 横浜. 2009年8月3日. (日本看護研究学会誌; 99, 2009)
- 6) 佐藤幹代, 小島善和, 高橋奈津子, 佐藤正美, 吉田澄恵, 中村美鈴, 村上礼子: 患者体験を用いた創傷ケア演習での学生の気づきと学び. 第36回日本看護研究学会, 横浜. 2009年8月4日. (日本看護研究学会誌; 167, 2009)
- 7) 村上礼子, 城丸瑞恵, 彦山弘子, 山根麗子, 佐藤幹代, 高橋奈津子, 吉田澄恵, 中村美鈴, 小島善和創傷ケアを受けた術後患者の心理から導き出される看護実践の検討. 第29回日本看護科学学会, 千葉. 2009年11月27日. (日本看護科学学会学術集会講演集; 201, 2009)
- 8) 清水玲子, 中村美鈴, 水野照美, 山本洋子, 内海香子, 村上礼子: 生命の危機状況にある患者に代わり延命治療の意思決定を行った家族の体験.

第30回日本看護科学学会，千葉．2009年11月28日．
（日本看護科学学会学術集会講演集；241，2009）

9）段ノ上秀雄，武正泰子，中村美鈴，内海香子，
崎田マユミ，松本幸枝：ペースメーカー埋め込み
術を受けた成人の退院後の生活における困難に関
する研究．第8回自治医科大学シンポジウム ポ
スターセッション，下野．2009年8月29日．（第8
回自治医科大学シンポジウムポスターセッション
発表者一覧及び抄録；C-7，2009）

老年看護学

(1) 論文

- 1) 高木初子, 水戸美津子: 高齢者通所施設利用者の聴力障害の実態. 自治医科大学看護学ジャーナル, 6; 61-70, 2009.
- 2) 長井栄子, 浅井美千代, 榎本麻里: 看護学生の喫煙に関する知識・行動・認知の状況と防煙教育について. 第39回日本看護学会論文集看護教育, 83-85, 2009.
- 3) 長井栄子, 橋本佐由理: 臨地実習における看護学生のストレスマネジメント支援-イメージ法を用いた支援プログラムの実践と検討-. 自治医科大学看護学ジャーナル, 6; 15-27, 2009.
- 4) 池田浩子, 池下麻美, 水戸美津子: 栃木県における認知症高齢者とその家族を支える社会資源の検討 - 既出資料からの分析 -. 自治医科大学看護学ジャーナル, 6; 71-82, 2009.

(2) その他

- 1) 高木初子, 水戸美津子: 高齢者通所施設利用者の聴力障害の実態 第1報. 日本看護研究学会, 横浜. 2009年8月3日. (日本看護研究学会雑誌 32(3); 396, 2009)
- 2) 軽部真粧美, 小竹久実子, 井上映子, 田中康代, 本田芳香: 乳がん患者の継続看護に関する研究-病棟と外来とのケア継続性の実態. 第35回日本看護研究学会学術集会, 横浜. 2009年8月3日. (日本看護研究学会雑誌 32(3); 312, 2009)
- 3) 川上 勝: 試作した体動検知パネル用計測記録装置の有効性と安全性の検討. 第35回 日本看護研究学会学術集会, 神奈川. 2009年8月4日. (日本看護研究学会雑誌 32(3); 209, 2009)
- 4) 太田信子, 吉澤利恵, 渡邊美智子, 篠原和子, 池下麻美, 長井栄子, 里光やよい, 水戸美津子, 大久保祐子: 褥瘡ハイリスクケア加算実施前後の皮膚・排泄ケア認定看護師の活動 影響調査-ICUに焦点をあてて-. 日本褥瘡学会, 大阪. 2009年9月5日. (第11回日本褥瘡学会誌学術集会抄録集11(3); 401, 2009)
- 5) 須釜真由美, 長井栄子, 榎本麻里, 茂野香おる, 浅井美千代, 白鳥孝子, 中井裕子, 川崎由理: 実習指導者による「学生指導のための事例検討会」に教員が参加する意味 - アンケートの分析より -. 日本看護学教育学会, 北海道. 2009年

9月20日. (日本看護学教育学会誌学術集会講演集19; 117, 2009)

- 6) 吉本照子, 酒井郁子, 杉田由加里, 八島妙子, 渡邊智子, 井上映子, 茂野香おる: 介護老人保健施設の看護師・介護福祉士および理学療法士・作業療法士による在宅生活支援. 第14回日本老年看護学会学術集会, 札幌. 2009年9月27日. (日本老年看護学会第14回学術集会抄録集; 177, 2009)
- 7) 戸田昌子, 秋元ますえ, 遠藤恭江, 大野 忍, 菊池真有美, 池下麻美, 水戸美津子: 栃木県実習指導者講習会3年間の評価. 第40回日本看護学会-看護管理-学術集会, 大阪. 2009年10月21日, 22日.
- 8) 本田芳香, 半澤節子, 井上映子, 軽部真粧美, 田中康代, 吉澤理恵: 大腸がん患者の継続支援システム構築に関する研究. 第29回日本看護科学学会学術集会, 千葉. 2009年11月28日. (日本看護科学学会第29回日本看護科学学会学術集会講演集; 474, 2009)
- 9) 川上 勝, 櫻井美奈, 宇城 令, 水戸美津子: チューブ型感圧センサーを用いた臥床者の体動検知に関する基礎的研究. 第13回日本福祉工学会学術講演会, 東京. 2009年11月28日.
- 10) 鹿内佳人, 川上 勝, 兼平知実, 阿部勇貴, 尾崎功一: 看護における臥床時の体動検出器の開発 第10回計測自動制御学会 SI部門講演会, 東京. 2009年12月25日.
- 11) 長井栄子, 井上映子: 応用力が身につく看護過程 骨粗鬆症 患者の看護ケア. ナーシングカレッジ, 13(11); 46-62, 2009.
- 12) 川上 勝, 宇城 令, 櫻井奈美, 里光やよい, 北島元治, 滝 恵津, 栗山葉子, 戸田昌子: 神経内科病棟における転倒・転落事故の予防策の確立を目指した取り組み. 第8回自治医科大学シンポジウム, 自治医科大学. 2009年8月29日.

がん看護学

(1) 論文

- 1) 本田芳香：保健・医療・福祉におけるIPEとIPWの検討. 社会福祉学, 49 (1) ; 34-40, 2009.
- 2) 本田芳香：がん看護シミュレーション体験プログラムの開発. 自治医大看護学ジャーナル, 6 ; 51-60, 2009.

(2) 著書・総説

- 1) 小原 泉：3. 研究者として育つ過程：大学院での論文作成の経験－「論文ゼミを通して，学問的スキルだけでなく情緒的サポートを得る」. インターナショナルナーシングレビュー, 32 (3). 日本看護協会出版会（東京）, 104-108, 2009.

(3) その他

- 1) Kohara, I., Takeda, Y. and Inoue, T. : Factors influencing decision-making in patients considering participation in cancer phase I clinical trials. The 12th East Asian Forum of Nursing Scholars, Tokyo, Japan. Mar. 13-14, 2009
- 2) 本田芳香, 小竹久実子：がん看護に必要なコミュニケーション因子構造. 第23回日本がん看護学会, 沖縄. 2009年2月（日本がん看護学会学術集会講演集；122, 2009）
- 3) 本田芳香, 三澤真理：高齢者主体の自己実現・生き甲斐活動を地域で展開するためのIPW支援者教育. 日本地域福祉学会第23回大会, 三重. 2009年6月（日本地域福祉学会第23回大会集録集；156, 2009）
- 4) 本田芳香, 三澤真理：介護老人保健施設におけるがん患者の看とりに関する一考察. 日本地域福祉学会第23回大会, 三重. 2009年6月（日本地域福祉学会第23回大会集録集；114, 2009）
- 5) 本田芳香, 井上映子, 軽部真粧美：乳がん患者の継続看護に関する研究. 第35回日本看護研究学会, 神奈川. 2009年8月（日本看護研究学会32 (3) ; 312, 2009）
- 6) 本田芳香, 半澤節子, 井上映子, 軽部真粧美, 田中康代：大腸がん患者の継続支援システムの構築に関する研究. 第29回日本看護科学学会学術集会, 東京. 2009年12月（第29回日本看護科学学会学術集会講演集；474, 2009）

資 料

2009年度（平成21年度）看護学部学年暦

○前学期

4月2日（木）	編入生オリエンテーション，ガイダンス（4年）
4月3日（金）	ガイダンス（2・3年），授業開始（2・3・4年）
4月10日（金）	入学式，オリエンテーション（1年）
4月13日（月）	授業開始（1年）
4月29日（水）～5月5日（火）	春季休業
5月11日（月）～7月31日（金）	前学期実習（3年）
5月14日（木）	創立記念日
7月1日（水）～7月3日（金）	定期試験（4年）
7月6日（月）～7月31日（金）	地域看護学実習（4年）
7月28日（火）～7月31日（金）	定期試験（1・2年）
8月1日（土）～9月30日（水）	夏季休業
9月2日（水）～9月4日（金）	再試験
9月25日（金）～9月27日（日）	学園祭（インフルエンザ感染拡大防止のため，中止）

○後学期

10月1日（木）	授業開始
9月7日（月）～10月9日（金）	助産学実習（4年）
10月1日（木）～10月21日（水）	日常生活援助実習（2年）
11月24日（火）～12月4日（金）	生活の理解実習（1年）
12月25日（金）～1月4日（月）	冬季休業
1月26日（月）～1月29日（金）	定期試験（1・2・3年）
2月1日（月）～2月26日（金）	フィールド実習（3年）
3月1日（月）～3月3日（水）	再試験
3月5日（金）	卒業式
3月20日（土）～	学年末休業

自治医科大学看護学部の概況（平成22年3月31日現在）

1. 教 員 数	44名
2. 学 生 数	422名
4 年生（平成18年 4 月 1 日入学） （平成20年 4 月 1 日編入学）	102名
3 年生（平成19年 4 月 1 日入学） （平成21年 4 月 1 日編入学）	116名
2 年生（平成20年 4 月 1 日入学）	102名
1 年生（平成21年 4 月 1 日入学）	102名

看護学部教職員名簿

1. 教員

職 名	氏 名	主要担当科目
学部長	水戸美津子	老年看護学
教授	三瓶眞貴子	基礎看護学
教授	竹田俊明	医学関連
教授	竹田津文俊	医学関連
教授	永井優子	精神看護学
教授	中島登美子	小児看護学
教授	中村美鈴	成人看護学
教授	成田伸	母性看護学
教授	春山早苗	地域看護学
教授	半澤節子	精神看護学
教授	本田芳香	がん看護学
教授	渡邊亮一	基礎科学関連
准教授	井上映子	老年看護学
准教授	井上みゆき	小児看護学
准教授	大塚公一郎	基礎科学関連
准教授	小原泉	がん看護学
准教授	齋藤良子	母性看護学
准教授	里光やよい	基礎看護学
准教授	鈴木久美子	地域看護学
准教授	高木初子	老年看護学
講師	宇城令子	基礎看護学
講師	内海香子	成人看護学
講師	川上勝	老年看護学
講師	工藤奈織	地域看護学
講師	崎田マユミ	成人看護学
講師	櫻井美奈	基礎看護学
講師	角川志穂	母性看護学
講師	塚本友栄	地域看護学
講師	野崎章子	精神看護学
講師	樋貝繁香	小児看護学
講師	松本幸枝	成人看護学
講師	矢野美紀	母性看護学
助教	池下麻美	老年看護学
助教	石田寿子	小児看護学
助教	板橋直人	精神看護学
助教	小川貴子	地域看護学
助教	北村露輝	小児看護学
助教	須藤久実	母性看護学
助教	島田裕子	地域看護学
助教	武正泰子	成人看護学
助教	段ノ上秀雄	成人看護学
助教	長井栄子	老年看護学
助教	西岡啓子	母性看護学
助教	濱田恭子	精神看護学
助教	宮田真理子	精神看護学
助教	米良千代子	基礎看護学
助教	和久紀子	基礎看護学

2. 事務部

職 名	氏 名
大学事務部長	川村廣栄
大学事務副部長 (看護学部担当)	久保典昭

(看護総務課)

職 名	氏 名
課 長	石崎雅司
参事(兼)課長補佐	半田美治
係 長	軽部和夫
主任主事	大石千代
主 事	田中千里
嘱 託	中村里子

(看護学務課)

職 名	氏 名
課 長	若林茂行
参 事	藍原孝樹
課長補佐(兼)係長	安島幸子
主 事	河原節子
主 事	桑島秀典
主 事	佐藤真美

※平成21年4月1日～平成22年3月31日在職者
(各職名ごとの50音順)

2009年度（平成21年度）大学院看護学研究科学年暦

○前期

4月6日（月）	入学式 オリエンテーション，授業開始
4月13日（月）	履修計画書の提出
5月14日（木）	創立記念日

○後期

10月1日（木）	授業開始 後期科目履修取消届出
12月21日（月）	学位申請書・学位論文（審査用）提出
2月1日（月）～10日（水）	論文審査・口頭試問
2月26日（金）	学位論文発表会（最終試験）
3月8日（月）	学位論文（保存用）提出
3月19日（木）	修了式（学位授与式）

大学院看護学研究科の概況（平成22年3月31日現在）

1. 教 員 数	30名
2. 学 生 数	31名
2年生（長期履修制度利用者）	21（6）名
1年生（長期履修制度利用者）	10（2）名

大学院看護学研究科教職員名簿

1. 教員

職 名	氏 名	主要担当科目
研究科長	水 戸 美津子	老年看護管理学
教授	三 瓶 眞貴子	看護技術開発学
教授	竹 田 俊 明	共 通 科 目
教授	竹田津 文 俊	共 通 科 目
教授	永 井 優 子	精 神 看 護 学
教授	中 島 登美子	小 児 看 護 学
教授	中 村 美 鈴	クリティカルケア看護学
教授	成 田 伸	母 性 看 護 学
教授	春 山 早 苗	地域看護管理学
教授	半 澤 節 子	精 神 看 護 学
教授	本 田 芳 香	が ん 看 護 学
教授	渡 邊 亮 一	共 通 科 目
准教授	井 上 映 子	老年看護管理学
准教授	井 上 みゆき	小 児 看 護 学
准教授	大 塚 公一郎	共 通 科 目
准教授	小 原 泉	が ん 看 護 学
准教授	齋 藤 良 子	母 性 看 護 学
准教授	里 光 やよい	看護技術開発学
准教授	鈴 木 久美子	地域看護管理学
准教授	高 木 初 子	老年看護管理学
講 師	宇 城 令	看護技術開発学
講 師	内 海 香 子	クリティカルケア看護学
講 師	工 藤 奈織美	地域看護管理学
講 師	崎 田 マユミ	クリティカルケア看護学
講 師	櫻 井 美 奈	看護技術開発学
講 師	角 川 志 穂	母 性 看 護 学
講 師	塚 本 友 栄	地域看護管理学
講 師	野 崎 章 子	精 神 看 護 学
講 師	樋 貝 繁 香	小 児 看 護 学
講 師	松 本 幸 枝	クリティカルケア看護学
講 師	矢 野 美 紀	母 性 看 護 学

2. 事務部

職 名	氏 名
大学事務部長	川 村 廣 栄
大学事務副部長 (看護学部担当)	久 保 典 昭

(看護総務課)

職 名	氏 名
課 長	石 崎 雅 司
参事(兼)課長補佐	半 田 美 治
係 長	軽 部 和 夫
主任主事	大 石 千 代
主 事	田 中 千 草
嘱 託	中 村 里 子

(看護学務課)

職 名	氏 名
課 長	若 林 茂 行
参 事	藍 原 孝 樹
課長補佐(兼)係長	安 島 幸 子
主 事	河 原 節 子
主 事	桑 島 秀 典
主 事	佐 藤 真 美

※平成21年4月1日～平成22年3月31日在職者
(各職名ごとの50音順)

編集後記

皆様方の多くのご協力により、本号上梓の運びとなりました。お忙しい中、原稿をご執筆いただきました皆様に厚くお礼を申し上げます。

本号では、発刊以来の内容に加え、新たに「活動報告」の項目を設けました。当該年度に特記すべき活動に関する報告として、本号では「実習調整委員会」、「文献講読セミナー」、「研究構想発表会」の活動をご報告いただいています。

また、特別報告として、本号では看護学研究科修了生の大柴幸子さん（認定看護管理者）、茂呂悦子さん（クリティカルケア専門看護師）にご寄稿いただきました。本学を修了された方々が臨床実践でさらに活躍の場を広げられていることは、大変に喜ばしいことです。

本年報もまた、本学の教育・研究の活性化に寄与し、看護学のさらなる発展に少しでも貢献できるよう、次号以降も努めてまいります。皆様の一層のご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

（平成23年3月 編集委員長 本田芳香）

編集委員会

自治医科大学看護学部

委員長 本田 芳香

副委員長 大塚公一郎

委員 小原 泉

里光やよい

鈴木久美子

高木 初子

自治医科大学看護学部年報（第8号）
自治医科大学大学院看護学研究科年報（第4号）

平成23年3月31日発行

発行者	学部長（研究科長）	水戸美津子
編集責任者	編集委員会委員長	本田芳香
発行所	自治医科大学看護学部	
	栃木県下野市薬師寺3311-159	
	電話 0285（58）7409	
印刷所	（株）松井ビ・テ・オ・印刷	
	栃木県宇都宮市陽東5-9-21	
	電話 028（662）2511（代）	